

れ、會て一點の人爲人力を其間に夾まざる者、是を天成自然の眞君と謂はずして將た何とか謂はん、我々臣民の遠祖が辱くも神系の庶流より發せしより、亦今に數千載、一宗分れて九族と爲り、九族更に分れて百姓と爲り、百よりして千、千よりして萬、以て海内に瀾漫せる四千餘萬の國民と爲り、今や少數の名門巨族を除くの外は、殆ど復た何れに發し何れより降りしかを辨じ得ざるに至れり、然れども此等幾千萬人の皇室に對し奉るや、尊崇の意敬慕の念、常に各自の肺腑中より發し、其何に由りて此の如きかは、殆ど自ら覺知せざる者に似たり、是を天成自然の眞皇國と謂はずして將た何とか謂はん、夫れ智力兵力を以て國を立つる者は、固より言ふに足らず、徳義を以て一國の帝王と爲る者は、其相優る數等の上に在りと雖も、未だ天成自然の天皇を戴く者と、日を同ふして語る可からず、余の我國を皇國と稱する、何ぞ徒爾ならんや。

更に人類團結の發達順序より考察するも、我君國の獨り天成自然に適合せること、愈よ争ふ可からざるを見る可し、抑も人類團結の最先模型は家にして、家より族を成し、族より國を成し、國と家とは大小單複の差ありと雖も、其秩序と組織とは、全く同一精神に基く者とす、是れ天然發達の國家也、然り而して天創草昧の人類が、始めて家を成せ

る所以を尋ぬるに、一に血縁を重んずる情念が、夙に彼等の心田に栽培せられたるに由る者の如し、唯其れ血縁を重んずるが故に、血縁の相連りたる人類相合して、家を成す也、唯夫れ血縁を重んずるが故に、血縁の本源たる父若くは母を尊崇して、其の命令に服従する也、既にして漸く人類蕃殖の度を加へ、一家より數家を出だして、遂に本支宗族の關係を生ずるに及んでや、家人が家主を尊崇するの念は、直ちに族人が宗室を尊崇するの念と爲り、一家相親愛するの情は、直ちに一族相結托するの情と爲る、更に進んで邦國の形體を成すに至るも、其所謂治者被治者の關係は、取りも直さず家人の家主に對し、族人の族長に對する關係にして、所謂君臣上下の分位は、取りも直さず子孫の父祖に於ける、支族の宗室に於ける分位に外ならず、何となれば君家は九族百姓の共同宗室なれば也、是に於て乎君臣の義は、父子の親と其精神を一にし、法制道德均しく君家なる一泉源より流出し、全國を舉げて渾然一家團欒の狀を呈せしむる者、豈に天成自然に依るに非ずや。

軌近歐西に於ても、社會學者及法制史家等は、漸く此發達順序を覺得し察りたるのみならず、其前世たる希臘羅馬の社會に於ても、頗る數多の證據あるを發見したり。

利害生存

然るに現今の所謂強邦強國なる者は、腕力若くは智術に依りて國を建てたるに非ざれば、則ち民衆の共約又は偶然の事變に依りて團體を結びたる者のみ、而して之が團結の要旨とする所は、民衆利害の異同共同生存の必要と云ふに過ぎず、其基礎の安危と根底の深淺とは措て問はずとするも、彼の博愛平等と云へる人爲的宗教が、容易に其間に侵入し得たるを見れば、今の列國が天成自然の原素に乏しかりしは、推知するに餘あり。是に由りて之を觀れば、數千歳の上より、數千歳の下に至るまで、能く天成自然の原形を完うして、毫末でも神聖を汚されざる者は、眞に唯我國と我 皇室とある而已、夫れ天には固より二日ある可からず、土には固より二王ある可からず、苟くも萬古侵す可からざる天成自然の眞皇あらば、之れをして六合を統べ、四海を一にし、以て普天率土の生靈を化育せしめられんこと、天意に非ずして何ぞや。

宏猷大謨

我國は皇國也、天成自然の國家也、我國が四海六合を統一するは、天の我國に命する所也、皇祖 皇宗の宏猷大謨也、已に然らば我國前途の最大目的は、此宏猷大謨を大成するの外に出でず、願ふに皇道の天下に行はれざるや久し、海外列國概ね虎吞狼食を以て唯一の計策と爲し、射利貪慾を以て最大の目的と爲し、其奔競爭奪の狀況は、恰も群犬の腐肉を争ふが如し、是時に當り、上に天授神聖の眞君を戴き、下に忠勇尙武の良民を帥ひ、有罪を討して無辜を救ひ、廢邦を興して絶世を繼ぎ、天成自然の皇道を以て、虎吞狼食の蠻風を攘ひ、仁義忠孝の倫理を以て、射利貪慾の邪念を正し、苟も天日の照らす所復た寸土一民の 皇澤に浴せざる者なきに至らしむるは、豈に我皇國の天職に非ずや、豈に我君我民の 祖宗列聖に對する本務に非ずや。

而して此雄圖鴻謀を大成せんには、之に従事する覺悟を定め、豫じめ健全鞏固なる前途經營の準備を整へざるべからずとて、提言して曰く、

經營準備

富強之基礎、心力之統一、與亞之經綸

何ぞか前途經營の準備と謂ふや、曰く國家富強の基礎を建設し、其立脚の地盤を築成する是也、何ぞか富強の基礎を建つると謂ふや、曰く國民心力の統一を固め、其全心を外に傾注して、其全力を内に充實せしむる是也、何ぞか立脚の地盤を築くと謂ふや曰く、

東亞興隆の經綸を定めて、西力東漸の暴潮を堰塞する是也。

眼ある者は視よ、耳ある者は聴け、四海を統一し宇内を風化するの大任を負ふたる我日本國は現に如何なる地位に立てるや、我日本に隣近する東亞の諸舊邦は、現に如何なる境遇に陥れるや、世の呼で強と云ひ弱と云へる泰西列國は、現に東亞の諸邦に向ひ、如

何なる動靜を爲せるや、東方の一大禍機を隠伏する支那の老朽は、今如何ぞや、東洋のバルカン半島と名けらるゝ朝鮮の孤弱は、今如何ぞや、眼ある者之を見、耳ある者之を聞かば、其心頭に湧起す可き感想は、如何ぞや、支那の老朽は獨り支那自身の爲めに憂ふ可きのみなる乎、朝鮮の孤弱は、獨り朝鮮自身の爲めに悲しむ可きのみなる乎、暹羅に緬甸に安南に印度に、陸梁跋扈せる狼呑虎食國の暴威は、獨り暹羅緬甸安南印度の國民自身の爲めに慷慨す可きのみなる乎、念ふて此に到らば、寒心酸鼻に堪へざる者あらん、然らば則今日に於て彼老朽せる支那を奈何す可く、彼孤弱なる朝鮮を奈何す可く、彼衰廢淪没せる暹羅緬甸安南印度を奈何す可きやの問題を決定するは、實に我國が宇内の事業に對する第一着手と謂ふ可し、嘗に宇内の事業の第一着手と謂ふ可きのみならず、彼虎豹豺狼の利爪銳牙の間に在りて、我宗社家國の安固を保つ所以は、此を措て他に求む可からざる也、且夫れ昊天は既に六合統一の大任を以て我國に命じ、皇祖 皇宗は既に四海奄有の宏謨を以て我國に遺させられたり、苟も我國民たる者、其心思を凝らし其の耳目を明にし、以て東亞の實勢真情を熟察せば、國家進發の前路を塞げる各種の問題、何ぞ氷釋して一定せざるを患へん、獨り各種の問題を一定せざるのみならず、之が

區處條理を立て、東亞興隆の經綸を確定すること、敢て難きに非ざる可し、唯講究未だ熟せず、查察未だ至らざるを憾む耳。

然りと雖も東亞興隆の經綸を行ふに當りては、或は弱を扶けて強を挫くの必要もあらん或は有罪を討して無辜を救ふの必要もあらん、又或は廢國を興し絶世を繼ぐの必要もあらん、夫れ已に弱を扶け強を挫き、有罪を討し無辜を救ひ、廢國を興し絶世を繼ぐの必要あらば、隨て陸海軍備も擴張せざる可からず、軍器兵餉も充實せざる可からず、是豈に一朝一夕にして具備し得可き者ならんや、是豈に一局一部の臣民を以て經營し得可き者ならんや、然らば之を爲す宜しく奈何す可き乎、他なし國民の全心を外に注いで、其全力を内に實し、以て所謂國家富強の基礎を建つる是已、奈何にして國民の全心を外に注ぐ可き乎、他なし政事上國家對外の方針を一定すると同時に、國民海外通商の方向を指示して、之が振興を獎勵する是已、奈何にして國民の全力を内に實す可き乎、他なし國家致富の泉源たる可き農工業を撰定して、之が發達を啓導する是已、今夫れ我國の產物にして海外に輸出し、以て我致富の泉源と爲す可き者は、幾種にして、何々なるや、他の國の產物にして我國の工藝を加へ以て、我致富の泉源と爲す可き者は、幾種にして

何々なるや、是れ第一に講究せざるべからざる所也、已に此等物貨の何種何類たるを知らば、之が産出製造及び輸出入を盛にする總ての方法手段は、須らく豫め其規模方針を定めて、之を施設す可く、同時に金融線、運輸線及交通線も、亦須らく國家對外運動の規模方針と致富の泉源たる殖産工藝、及び貿易の緩急方向とに應じて之を擴充し、進張する方法手段を實行す可き也、再言すれば前途最も多望なる水陸産業は、如何に獎勵す可きか、將來最も多利なる製造工藝は如何に振作す可きか、此等生産物の販路は如何に開拓し如何に擴張す可きか、之に伴ひ之に要する内外爲換事業は、如何に整備す可きか、海陸保險事業は如何に振作す可きか、銀行及び取引所事業は如何に經紀す可きか、貨幣制度と造幣事務とは、如何に確立し如何に整理す可きか、郵便電線は如何に延長す可きか、道路橋梁は如何に修理す可きか、鐵道は何れより何れに敷設すべきか、港灣は何れに築き、何れに開く可きか、航路は何れに向ひ幾線を通す可きか、植民は如何、居留地は如何、倉庫棧橋は如何、船渠は如何、造船所は如何、製鋼所は如何等、凡そ農工商業及び金融運輸交通の諸業に關する重要問題は、一々之を政事上國家對外の方針と規畫とに照らし、最も精確に講究して、之を整頓せざる可からず。

富強之基  
建於是  
乎建矣

而して又當局者は、例へば或る者は某地に向つて某事を行ひ、他の或る者は他の某地に在りて某業を擧げ、又某事の經營は若干年を繼續して、斯々の目的を達し、某件の運動は若干歳を経過して斯々の結果を得可しと云ふが如く、豫め運動の部署を定め、豫め成功の期限を剋し、各線各條の大綱を中樞に總攬し、以て舉國の民衆をして均しく一定の方針に向つて、着々歩武進むを得せしめざる可からず、苟も此の如くならん乎、國外に於ける貿易の振起は、同時に國內に於ける農工商業の獎勵と爲り、一方に於ける農工商業の發達は、同時に他方に於ける金融運輸諸業の刺衝と爲り、金融運輸交通諸業の進歩は、又同時に内外商業工藝及び水陸産業の振起發達を促がす可きや、智者を待たずして知るべき也、此時に於てや、舉國の民衆は或は、農工商の發達に勤勞して、財力開發の準備を爲し、或は通商貿易の振起に奔走して、富資收集の準備を爲し、或は金融運輸交通の諸業に勵精して、民業隆興の準備を爲し、而して政治家と軍人とは、又各其執る所の職務に鞅掌して、内外經營の準備に怠らざる可ければ、上に閑士なく、下に游民なく、所謂國民心力の統一は、是に於て成る也、所謂國家富強の基礎は、是に於て建つ也、國家富強の基礎已に建てば、進んで海陸軍備を擴張し得可く、進んで兵餉軍器を整備し得可く、

進んで城塞砲壘を經營し得可く、更に進んで東亞經綸の實功を奏し得可く、所謂國家立脚の地盤も遂に築成し得可し。

君は此理想に依り、立言力行す、故に首尾一貫脈路井然、些個の滯滞なく些個の阻碍なし恰かも天馬空を驅るが如く、誰か能く之を支へん、根津一は君と交親同胞も管ならず、其交情實に管飽に過ぎたり、故を以て君に就き語る所最も肯綮に中り、地下の君の聞くを喜ぶ所ならん、根津嘗て君が事略を叙せる一節に

君東亞時事に於て、機を見微を察し、知つて言はざるなく、謀て忠ならざるなし、士官學校に在るの日、嘗て韓京變あるを聞き、一學生を以て當路に見えて、事宜を言ひ、清憂初めて啓くや、對清意見を著して、海内士民を戒め、將に和を議せられんとするや、敵計の出づる所を指摘して當局の籌措に資し、對清辨妄を著して、輿論の惑を辨じ媾和條約の患を我民に貽すあるを見るや、全國商工大會に授くるに、訂約建議案を以てし、韓廷動搖し再び大局を擾るの虞あるを見るや、官卿に周旋し、志士を糾合し、當路に對韓策を定めんことを勸む凡そ其謀る所、盡く當時に行はれずと雖も、其慮る所一として後日に驗あらざるなし。眞に然り、君が日清提携論も、清國膺懲論も、媾和管見も、對清通商意見も、將た對韓計

因此理想  
立行、百理

理想之分  
派

書も、貿易研究商品陳列所の設立も、通商協會紳商協會の發起も、其他一生を通じて言ふ所行ふ所、悉く君が理想の源泉より分派せるものにして、其言行一々驗あるに於て、益々君の高邁達識遠く時流に超越せるものありしを想はずんばあらず、而して益々君の志業伸びず、所謂百年の長計を立つる能はざりしを惜むや切なり。

### 三 新立國策

君嘗て漢口に在りし時、天下の大勢を觀察し、其經綸策中三帝五王案なるものありき、後洛東若王子に辭居するや、隨時所見を吐露して、國家に裨益する所あらしめんとしたることと前説する所の如くなるが、頃者遺稿を檢して、新立國策一篇を得たり事空想に屬するが如きも、亦以て國士の用意を見る可し依て其梗概を抄録す。

新立國策

新立國策  
東方大經  
綸之理想

第一段

#### 第一段

- 一新立國設立の主旨、
- 一同區域、
- 一同名稱、

第二段

- 一同言語、
- 一同旗章、
- 一同衣冠、
- 一同國祭及儀式、
- 一同臣民冠婚葬祭儀式、
- 一從來國民の風俗習慣上、必ず變改を要するもの、及其改良法、

第二段

- 一國是大方針、
- 一創業上急を要する人才の養成法、
- 一國富を來すべき水陸物産の種類、及其發達せしむべき方針順序、
- 一國富を來すべき工藝品の種類、及其發達せしむべき方針順序、
- 一生産物品の發達に伴はしむべき内外に通ずる交通運輸、金融線、及築港、設衛其他造船所製鐵所等の、創設すべき方針順序、
- 一國防及出師上海陸軍の設備すべき方針順序、

第三段

- 一移住せしむべき國民及其程度、
- 一創立初年より二十年に至る毎年徵收すべき歲入額、
- 一創立初年より二十年に至る毎年歲出に要する不足額、
- 一創業中歲出不足額の募債法、及其消却法、
- 一政略及通商上の便益を來さしむる爲、各外邦と交際すべき方針順序、

第三段

國體

- 一新立國は、當分君主獨裁とす、
- 獨裁政治の弊は、貴賤の疎隔に流れ、中央干涉の弊は、都鄙の懸隔に陥り、國の統一を破ふる通患なれば、最も深く講究せざるべからず、
- 一新立國は、其大方針を達する爲め、左の綱領に依り、政治機關を設く、
- 一國威を張る、
- 一國安を保つ、
- 一國財を整ふ、

一 國俗を善す、

一 國富を増す、

政治機關立禮の綱目

一 國威を張る、

注意、國民競争の甚しき、今日に在りては此種の行政、最も緊要の問題にして、其薄弱なるときは、殆んど國民の獨立及進歩をして前途に望なからしむ、故に全國民の爲には勿論、一臣民の爲にも、邦外に對し公力を以て、其妨障を排し、及其利便を圖らざるべからず、之が爲には最も精銳なる外務省及軍務省を立てざるべからず、其兩省の組織は、先づ某國の制度を本とし、其弊害を除き規則は可成簡易にし、當局者をして活動を得せしむべく、宇内諸強國の制度を参考して組織すべし、以下之に倣ふ。  
外務省に付ての注意、

外交官には、最も人物を精選せざるべからず、是れ其國の權勢及品位を代表するものにして且新立國の事故、常に敏活廣遠の注意を爲し、各國の舉動にして我國の利益及權利に關するものは、精細に之を觀察して、内閣の耳に入れ、且輿論の注意を

促さざるべからず。

領事にも老成にして事に親切なる人物を選ばざるべからず、且領事を進退する局に於ては、通商運輸交通及金融に關する他の諸局と協同すべきは勿論、商業學校造船學校及商業會議所商品陳列所等に連絡して、通商上の務を全うする事に注意すべし。  
軍務省に付ての注意

軍務省は陸海軍を總轄するものにして、新立國の事故、陸海軍共將校下士の養成を急にし、兵卒は漸次其方針に従ひ増加せしめ、且兩軍共國家經濟の思考を、其行政上に注ぐべきを要す。

一 國安を保つ、

國安を保つ行政は、社會の存立進歩に一日も缺くべからざるものなり、國威を張る行政には、外方に向つて妨障を排し、而して國安の行政は、内部に向つて損害を防ぐ、二者相俟ちて國民の生存及獨立を全うす、故に國安の行政も、亦國民全般の利益、或は時としては一臣民の利益にまで保護を及ぼすことあり、今此行政上講究すべき要綱を掲ぐれば。

第一國家の治安を維持する事、  
第二公衆の身命を保護する事、  
第三公衆の財産を保護する事、  
第四社會の不能を救恤する事、  
右四項に向つて力を致さしむる爲に、内務省を設くべし、以下四項に付き一々其必要の注意を述べん。

注意

第一項の行政は、最も緻密の注意を要するものにして、其施行の得失は往々志士の氣を激せしめ、終に治安を維持せんとして、却て之を害するもの尠からざれば、深く講究せざるべからず。  
第二項の行政は、恩威共に行はざるべからず、且つ醫術衰へ衛生振はざる國柄にあつては、殊に艱難を極むべきを以て、廣く其行政の得失利害を研究せざるべからず。  
第三項の行政は、常に盜賊を防ぐのみならず、凡行政干渉を以て、水害火災等の豫防に力を致す事密ならざるべからず、且つ金融の安康を害し、商業社會の安全を妨

げ、或は賃金小作料、若くは貸借條件等にして、行政の干渉を要するものは、其警察上最も注意せざるべからず。

第四項の行政は、鰥寡孤獨及廢疾不具の類にして生計を失ふものは、自身の不幸のみならず、其結果の及ぶ所は遂に社會全般の不幸に至るべきを以て、之を教育して其緒に安せしめざるべからず。

一國財を整ふ、

國財とは國家の財産にして、其行政は即世の所謂財政是なり、國家百般の政務は、必ず之に相當の費用を要す、財政なるものは此費用の供給を司るものにして、其整否は國の行政全部の盛衰に繋るのみならず、國民全般の休戚に繋ると云ふべし、國財行政上研究すべきの綱領を掲ぐれば、

- 第一、歳計豫算法、
- 第二、税則の立案及租税の徴收法、
- 第三、國庫金の保管及出納法、
- 第四、國有財産の管理法、



### 第五、國債の整理及消却法、

此行政を擔任せしむる爲には、大藏省を設く、

大藏省は國財政の中央機關にして、専ら右五項の職司に任ずるのみならず、社會の金融に干渉を及すべき任務ありて、國家の專占業たる貨幣鑄造は、實に此職に屬せざるを得ず、尙ほ進んで干渉すべきは、金融制度の類にして、郡國立私立銀行は、其監督する所に係はる、此故に同省は金融安全の行政に付ては、内務省と協同し、實業進歩の保護に付ては、又其主務と協同し、國有財産の管理に付ては、則ち諸般の主務廳と協同し、政費支辨監督に付ては、會計検査局の力に依るものとす、今右五項の講究すべき要點に注意を述べ。

第一豫算上の注意、財政當局者は、歳出を支辨し得るの責任、歳出を支辨し得るの保證に供するのみならず、猶一步を進め行政の大方針に従つて、各省主務の輕重を定め、歳計豫算の全體に付て、充分の責任を負はしむべし。

第二稅則立案上の注意、關稅徵收の寬嚴は、一面に於て内地土産の盛衰に關すること勿論なれども、他の一面には國庫收入の増減に關係あるを以て、稅率を若干の

割合に定めて、適當なるや、稅率の昇騰が、反て收入の減少を來すことなきや等の問題は、深く講究せざるべからず。

第四國有財産管理上の注意、國有財産とは、官業及官有物を總稱するものにして、其收益は國庫歳入の一部を補ふに足る、而して之を管理するは、財政當局者のみに非されども、他に一任して關せざる弊を生じ易きを以て、直轄者と連脈貫通して、遺算なきやう組織せざるべからず。

### 一國俗を善くす、

風俗の改良と智識の開發とに因て、文明の進歩を圖るの行政は、行政部中未だ此より神聖にして、且高尚なるものなし、此行政に任ずる爲め、教部省を置き、其消極手段に付ては、内務省をして其要重なる職司を有せしめ、又最高等の行政としては、宮内省に讓るべし。

此種の行政に任ずる者は、須らく俗界名利の外に超然として、社會智徳の運行の洞見し得る者を選ばざるべからず、本來の性質より之を言へば、國俗に係はる行政、特に教育の行政は、通常行政の部類に置くべからず、俗吏に感染せざる學者の團中に之を

据置かざるべからず、殊に新開國の事故、國俗行政の勢力は甚だ強大にして、家庭の風儀に迄も、感化を及ぼすものなれば、之を尋常行政の階級に加へて、吏務の弊を波及せしむるは、甚だ不可なるを以て、深く此點に注意せざるべからず。

國俗に係はる行政の部類中、深く講究を要する事物頗る多し、今試に行政手段の點より、直接及間接に屬するものを掲ぐれば、左の如し。

- 第一官立諸學校の管理、
  - 第二官立圖書館博物館天文臺等の管理、
  - 第三高等教員の養成及教科書の編修、
  - 第四學位の授與、
  - 第五國史の編撰、
  - 第六神官及官國幣社の保護及管理、
  - 第七監獄の管理、
- 間接に屬するもの、

- 第一公立及私立の諸學校、並に感化院育兒等に係はる、保護及監督、
- 第二教科書の檢定、
- 第三公私立の學術書、教育會、圖書館、博物館、美術會、慈善會等に係はる獎勵及監督

- 第四著述出版に係はる保護及獎勵、
- 第五宗教建設物の保存及監督、

右の外國俗の壞亂を防遏する爲に、干涉すべきもの左の如し。

- 第一著述圖書及寫眞、其他出版物の檢閲、
- 第二演說又は説教、其他公開言論の監督、
- 第三演劇寄席觀世物、其他興行物の監督、
- 第四人事上總て風儀を破るべき、一切の所爲に係はる監督、

此の如き廣汎なる事物に付き、國俗上の行政を有效ならしむる爲めには、教部省は内務省及司法省と大方針に付、一致の活動を爲さしめざるべからず、且善行美術等の獎勵を司る、最高等の行政は、宮内省に掌らしむべし。

國俗の行政は、其結果を永遠に期するものにして、臨機應變の策は、此行政に殆んど無用なれば、此行政に當るものは互に懇切協議して、相矛盾なきを勉めしむべし。實業専門の學科程度は、必ず其國の進歩と伴はざるべからず。

學位の授與及學藝の獎勵は、其主義を誤まるべからず、眞正の學者は素より名爵を以て榮とするものにあらず、然るに學位の如きものは、學者其人を勵ますと言ふのみにあらず、碩學高德を社會に旌はして、衆人に師表を示すが爲なり、故に學位の授與は、寧ろ吝に失するも、其濫に陥らざらんことを欲するなり。

著述出版の業にして、政府の當然に爲すべきものは、國史の編纂、統計の編修、字典の編修、語法の編修、法令の編修、教科書の編修、又は内外地理圖の編修、  
一國富を増す

古の専制惡政の、或時代にあつては、行政は人民を動物視し、之に鞭撻を加ふるが如きもの有りし雖も、今の行政は須らく人民を靈物視して、之に援助を望むにあらずべからず、國富行政が獎勵を主旨として、實業社會に干渉を及ぼす所以のものは、社

會に存する百般の有形的事物を招請して、國の進歩に協力せしめんと欲するが爲なり、此行政に勸業省を設く、其職司に屬して獎勵せしむる方法の講究すべきものは、左の如し。

第一法令的獎勵、

第二制度的獎勵、

第三補助的獎勵、

第四名譽的獎勵、

此四種の獎勵は、一般の行政にも要用なりと雖も、國富行政には創業國なるを以て最も必要なり。

國富行政の區域及目的を言へば國富とは、國民の富源を總稱するものにして、其行政の區域は、農工商業より、以て通運金融等の事に至る迄、凡そ有形上國富の、發達に資するもの、皆其保護獎勵を掌るものにして、其職司の爲め講究すべきものは、左記の種類に對する保護獎勵の諸制度なり。

第一農工商漁業鑛山森林の類、

巨人先尾緒

第二工業製造建築土木の類、

第三海外貿易内國商業諸會社諸取引所の類、

第四鐵道航海郵便電信の類、

第五諸種の銀行、及諸の金融制度、

國富行政は、國富の障害を排除する事も、此職司に屬すと雖も、此點は多く國安行政の職司に委ね、其本來の目的、即積極手段なる國富の改進を保護獎勵するに在り。例へば森林法の如き、鑛法の如き、職工條例の如き、會社法の如き、之を法令的獎勵と云ひ、例へば博覽會の如き、之を制度的獎勵と云ひ、例へば利子補充の如き、益金補助の如き、其他金錢を以て獎勵するもの、之を補助的獎勵と云ひ、而して褒章賞牌、又は叙位叙勳、或は名譽職を授くるが如き、之を名譽職的獎勵と云ふ。

第三章 對清貿易擴張案

前章述ぶる所、宇内一統論と云ひ、興亞政策と云ふ、共に君の理想にして、常に口にするに非らず、偶々日清の國交破れ、東亞局面の大變故に際し、一片報國の至誠は、君

實行者、  
而非空  
論家、

識時務、  
在後傑、  
故能若、  
眼大處、  
著經世、  
之偉略、

人格之光、  
蝕經濟、  
手腕、

東方振興、  
之第一着、  
手、

當時僅三、  
十一歳、

を驅つて自家所見の一端を吐露して、以て一世を警醒するの己むを得ざるに出でしめしのみ、君は實行者なり、斷じて空論家に非らず、其然る所以は、君の實歴之を證す、世君の出身と、其風采を想望し、豪傑肌の士にして、經濟思想の如きは疎なりしなるべしとなす者尠なからず、而して始めて前章の所論を読み經濟思想の周密なるに驚く可し、夫れ時務を識るは俊傑に在り、唯だ夫れ俊傑、故に能く大處に着眼し、經濟の偉略を著ふ、唯だ夫れ俊傑、故に能く實務に通じ、經濟の大手腕を有す、彼の空言徒に喜び、區々錙銖の利を争ふものと日を同うして語るべからず、而して其往々にして如是誤解を受けしもの、君の經濟的手腕が、其人格の光に蝕せられ、世眼に映じ難かりしが爲めのみ、君は前章述ぶる如き理想を抱き、大局の挽回を以て、己れが任となし、拮据經營十餘年、死に至る迄も渝らざりし。

君は東方振興の第一着手は、先づ其通商權の掌握に在るを信じ、日清貿易擴張を以て當面の題目となし、日清貿易研究所、並に商品陳列所の設立を提唱して、對清通商の急務を全國に遊説したり、當時僅に三十一歳の時たりしを知らば、以て其不出世の巨人たるを知るべし、余豈に好む所に阿する者ならんや、君は一面より見れば實に經濟の頭腦ある好箇の

貿易指導者たりしなり、事業家たりしなり、廿六年の秋公にしたる對清貿易擴張意見は當時君が懷抱の一端と、之が實施の手段たる研究所陳列所二事業の梗概を知るに足るものあり、左に之を録す。

貿易は國家經濟の大本、生民富饒の樞紐たる、固より論を待たず、況んや饒勝劣敗、富強是れ競ひ、弱肉強食鹿を中原に追ふの今日をや、富の存する所は、實に邦家安泰萬民鼓腹の繫る所なり、貿易の急務たる亦知るべし、然らば則ち彼の日清貿易の如き、之を歴史に考へ、之を現狀に照すも、殊に大に之を振興せずして可ならんや、精自ら搦らず大に日清貿易を擴張し、以て國家民生の公利を興さんと欲し、向きに日清貿易研究所を創設し、而して古人百聞一見に如かず、居以て氣を移すの意に基き、特に之を清國上海に設立し、四方有爲の青衿、苦學鍛鍊すること茲に三年、今や學課の程を卒へ、又商品陳列所の開設就り、卒業生の實地修鍊と全國各府產貨者の研究と、互に相待て日韓、日清貿易の隆興を期するの運に至れり、今左に過、現、未三境の要領を講究し、以て清國に供す。

第一項 日清貿易の必要

夫れ我國の清國に於けるや、之を歐米の清國に於けるに比するに、其距離の甚だ近きのみならず、其人種宗教制度文物人情風俗嗜好生活を以てするに、彼は霄壤の差異あつて、我は頗る相伯仲せり、然るに彼我清國に於けるの狀況は、却つて得失反對の觀あるは何ぞや、蓋し彼は人事の經營を盡して天然を補ひ、我は人事天然兩ながら之を等閑に附するに因らざるばあらず、是れ豈に今日處世の道ならんや、苟も然らず今日我國人をして、大に發奮以て日清貿易に拮据經營すること、恰も歐米人の清國に於けるが如くならしめ、而して其人情風俗の同じきを利し、其嗜好生活の似たるに乘じ、大に天然關係の利便を利用するに及ては、我供給は終始渝替することなく、彼の需要も永く窮極することなく、其勢之に同うして、其功必ず之に倍せん、日清の貿易豈に之を振起せずして可ならんや。

且夫れ數年ならずして清政府の大計畫に係る鐵道の清國中樞の一大市場たる漢口を出で、中原の各都府を貫き、北京に達し、轉じて山海關を経て、滿州を横ぎり、西伯利亞鐵道に連接するに至らば、是れ即ち清國貿易の更に一大進歩を現はすの時機にして、思ふに清國に於ける、各國射利の競争は、是より益甚しからん、之を近時泰西人

の頻りに大會社を組織して、以て同國に向うに徴するも、其れ亦必ず早晩の商戦に必勝を期するの意に外ならざる歟、果して然らば、今日我國は優柔不斷之を輕視すべきの秋にあらざるなり、必ずや上下齊心、天然の關係を利用して、人事の經營を悉くし彼の壟斷を奪ふて我商權を回復し、進で衡を中原に争ふの用意なかるべからず、之に加ふるに今回銀貨下落の影響は、(當時我國未だ金本位制にあらず)我日清貿易上至大の好運を來し、夫の久しく東洋の商權を壟斷して、跋扈を恣まにせし歐米人は、今の金貨不權衡を來せし爲め、從來の形勢頓に一變せんとす、且又銀相場の變動毎に迷惑を感じたる清商は、今や已に金貨國より輸入の最も不利益なるを悟り、本位を共にする我國に供給を仰がんとするの傾向あり、此の際此の時、世界の氣勢を觀じ來れば、今や歐米人は攻めざるに自ら潰走せんとし、清商は求めざるに我に好機會を與ゆるものなり、是の時に當りてや、日本人たるもの協力同心大に日清貿易發達増伸の基礎を定め、以て歐米の壟斷を奪ひ、清國人の望みを容れて、元と利害を共にするの關係を結ぶこと、實に今日の最急務なり。

第二項、日清貿易者養成の必要、

日清貿易者養成之必要

清國の貿易額は、已に六億萬圓に達すと雖も、我國との貿易額は、未だ二千萬圓に出でざるのみならず、其本邦商賈の手に由る直輸出に屬するものは、僅かに清人の十分一に止まり、其輸入の如きは殆んど全く支那人の掌握を出でず、而して其在清日本人の現状を見るに、上海は亞細亞第一の貿易港たるに拘はらず、隨て開店すれば隨て倒閉し、現に存するもの僅に若干戸に過ぎず、其他の諸港に至りては、寂々寥々存するが如く、亡するが如し、是を以て我邦人の支那貿易を言ふもの、前に懲り後に懲り、遂に以て向ふべからずとなすもの、如し、然れども退て之を想ふに、支那に向ふもの必ずしも失敗せず、只缺點あるもの失敗するのみ、其失敗する所以を究めず、只管支那を以て向ふべからずと爲すものは、抑も亦誤れりと云ふべし、願ふに其缺點の重なるもの三大端あり、而して其原蓋し眞成の性能を備ふる貿易者、乏しきに歸するに似たり、何をか三大缺點と云ふ、曰く第一日清貿易直接の賣買をなすべき資格ある商人なきこと是なり。

三大缺點

第一缺點

今一例を掲て之を示さんに、抑輸贏の道は、彼我の情を知るを要とす、殊に清國に於て然りとす、蓋し清國は今尙大小の金銀塊を切斷して、之を使用し、種類の多き十有

五に至り、塊質の鑑定算計の方法、甚だ紛雜を極むるが如き、其度量衡は品質の繁さ、  
 一百餘種、使用分別煩錯無比なるが如き、百規民物紛々擾々、假令ひ具眼の士を以て  
 するも、能く一朝一夕の徹底通達し得べきにあらず、然るに従來渡清の我國の商人は  
 多くは言語の通せざる、風俗の明かならざる、或は支那人を備ふて其人を誤り、或は習  
 慣を知らずして、需要の嗜好を傷ひ、或は運輸交通の便否遠近と、習俗節時の要措を  
 審かにせずして、進退期を誤まり、緩急宜しきを失ひ、或は其貨物をして空しく滞積  
 以て來季を待つのに不幸に沈み、或は急遽の輸送、爲に運賃の高低を顧みるに違あらざる  
 の失策に陥るが如き、其他商家の要件として鹵莽滅裂皆不利の原とならざるものなし、  
 失敗せざらんと欲すと雖も豈得べけんや、之を第一缺點とす。

第二、日本の荷主が、一時の便宜上より、物貨の權衡を失ふにも拘はらず、日本にて  
 支那人に販賣することは是なり、假令は茲に一物貨あり、神戸商人より之を在上海なる  
 日本商店へ向け、委託販賣をなさんとす、其之を委託するに方り、荷主は以爲らく直輸  
 せば必ず巨利を博し得べしと、乃ち同地の卸相場に一票を加へて之を送る、然るに該  
 荷主或は同貨物を有する他の荷主が、一時金を要するに際し、在神戸支那人に現金を

第二缺點

以て同地の卸相場より更に五分或は一割を減じて賣却し、而して其支那人は、巧に時  
 機の緩急と運賃の高低とを謀り、之を上海に送るとせん乎、其價の低廉なる爲め、忽  
 ち前きの上海委託品價と衝突を起すに至り、遂に荷主と委託商との間に矛盾を來し、  
 其勢の到る處、一變して不和となり、再變して憤怒となり、三變して貨物滞滯品質損  
 壞、遂に怨恨を以て終るに至る、甚しい哉、情疎濶の弊や、是吾人が常に見聞する所  
 にして、其害勝て言ふべからず之を第二缺點とす。

第三、我國各地方に於て往々見るが如く、在清の日本商人が、同販路に同物貨を以て  
 互に競争する是なり、抑も今日商業の情勢たる、百目整然交通利便、彼の競争に於て  
 衆合力を利用せざれば、勝ち難きと同じく、平時の競争たる貿易に於けるも、亦衆合  
 力の必要なるは、人の能く知る所なり、況んや資本甚だ豊かならざる我國商人の、支  
 那人の如き多資本者に對するをや、古語に曰く矢桿一束勇者も能く之を折ると得ずと、  
 又曰く強弩の末は魯縞を穿つ能はずと、矧んや其未だ強弩ならざるものをや、其失敗  
 する固より數の然るべき所なり、之を第三缺點となす。

支那に於ける貿易の情勢夫れ斯の如し、顧みて我國内實業の形勢を視れば、其支那實

第三缺點

易たる誠に軌近の事に係り、前には沿革の徴して以て則るべきなく、後には慣行の依て以て、恃みとするものなきを以て、殖産興業を事とするものは勿論、老商業家と稱するものと雖も、多くは未だ彼の事情に通達せず、或は稀に少しく其事情を解するものもあるも、皆目前一時の小利に眩惑し、將來永遠の大益を慮らず、其極貿易商は一も生産家に便利を與ふることなく、却て中間奇利を生産家より貪らんと欲し、生産家は過當の侵削を蒙むるを憤り、終に氷炭相容れざるに至り、其極生産家中有力のものは自ら進で開港場又は海外に取引を試み、貨物山堆需供衡を失ひ、遂に同業者の競争を惹起し、不慣の結果一敗地に塗るを致し、其資財に乏しきものは、常に在日本の清商、及我國仲買商の酷縛に遇ふて、徒らに呻吟するを免れず、是れ亦未だ眞成の性能を備ふる貿易者に乏しく、隨て分業の道立たざるに因る、其他團結の實舉らざる、資本の合せざる、亦皆未だ該貿易者の輩出せざるに歸せずんはあらず、然らば則ち我國今日實業社會の衰況を恢復するは、蓋し眞成の性能を備ふる貿易者の出否にあつて存するや知るべきなり。

退て支那商人の形勢を觀察すれば、嘗に其本國の各港に商權を占め居るのみならず、

進で我開港場に蟠居し、蟻來腐聚、日に其數を加へ、多くは妻妾を我女子に娶りて、子孫を育し、以て晏然永住の策を畫し、我國の言語人情風俗より、物産嗜好取引習慣に熟達し、加之ならず連絡を彼の各港に保ち、運輸金融交通を便にし、内外相應じ緩急度を失せず、漸く將に我内地の生産に立入らんとす、其天然の關係を利用し、其人事の經營を盡すこと、亦密なりと云ふべし、宜なる哉我輕舉の商人が、毎戰每敗、終に其商權を舉て一々彼の壟斷に歸し、輸入品は勿論、輸出品と雖も、我商人の直輸出に係るものは實に支那人の十分の一にも及ばざること、豈に長大息の至りならずや。夫れ殖産興業貿易擴張は、我國今日急務中の最急務たり、官民一致奮つて之を振起せざるべからず、然るに前條の形勢に付て之を見れば、我國の實業社會は、孰れの日か能く其位置の製造人たり職工夫たるの實を免るゝを得んや、然らば則ち之を救濟するの術如何、曰く其法他なし、茲に一大日清貿易者養成所を設け、眞成熟達、自ら我國富強の製造に任する、多數の有爲著實なる貿易誘導者を生じ、之をして需要供給の中間に執掌し、或は殖産家には、改良製造の得失利害を指示し、或は低價の原料を他より周旋し來つて、専ら販賣の一途に、其智能を應用し、以て逐次各生産家に便益を興



ふるに在り、然るときは前の第一缺點を矯正し得るは、固より論なく、彼の清國の要港及我國各地方に於ける需要者の、實況不明の爲め、一跌遂に久しく廢絶の姿なりし荷爲替は、再び之を興し得るのみならず、且其歩割を満足に貸與し得べきを以て、從來一時金融逼迫の爲め、仲買の猾商及在日本の清商に、棄賣するの悲境を免かるゝを得て、茲に第二の缺點を消滅するを得べく、又其多年同窓同志親和の輩、四方相提携して、事に此に従ふに及では、第三缺點たる競争の弊の如き、自ら大に救済すべきなり。

只眞成の貿易者出づるも、其數尙少に止り、各地一致の方法を取る能はざるときは、假令其一地のもの能く其價格を保たんとするも、他地同業者の濫賣するものありて、是れ亦遂に物價の權衡を保ち能はざるに歸すべしと雖も、苟も其人充分多數にして、各地に散在し、東西連絡首尾照應するに於ては、始めて久しく外人に壟斷せられし、日清貿易の商權、茲に回復するを得て、漸次我貨標を上位に進むるを得るのみならず、又且つ從來見るが如き、清商限價の注文に羈せられて、自ら懽らざるを合んで、粗製濫賣するの弊消滅し、以て其信用を復するを得べきなり、是に於て貿易殖産興業家各

### 第三項、日清貿易研究所の創立及現況

自其所を得、循環固流其利を成し其用を全うし、以て分業の道確立すべく、又地方の有志或は實業家は、該貿易誘導者を聘し、或は彼にして自ら商社を起し、其資を該地興業殖産家、及其他より募集することゝすれば、其純益は則ち地方一般の潤澤たるは勿論、其事業たる海外貿易なるが故に、一張一弛直に國家經濟に影響し、結果の及ぶ所、管に農工商業家の結合親和するのみならず、同地方舉て團結一致し得るに至り、於是乎始めて分業の道立つ可く、團結の實成るべく、従つて資力合し貿易擴張し物産亦發達すべきなり、眞成貿易者の養成、豈今日の急務と云はざるべけんや、是れ則ち日清貿易研究所の因て起る所以なり。

日清貿易研究所は、前述する所眞成性能の貿易者養成と、兼て我國貿易品試賣買研究の爲に創立する所にして、明治廿三年六月始めて創立事務に着手し、徧く全國に就き、子弟を召募せんと欲し、精自ら五畿各道を巡歴し、到る處官民有志の賛成する所となり、或は地方税を以て有爲の青年を擇むあり、或は市郡費を以て秀逸の子弟を抜くあり、又或は獨力奮つて之に應ずるあり、其數無慮數百名、於是先づ之を東京に集合せ

卒業者八十九名  
眞成貿易者

しめ、志操、身體、學術の三點を試験し、同年九月七日、一同長崎港を出發し、同九日上海に到着す、同月廿日開所式を行ひ、爾來別紙の科程に依り、已に去七月を以て諸學科の卒業を爲せり、而して生徒は入學以來日夜勵精事に茲に従ひしと雖も、元來世間無類の創業に係り多少難駁なる企望を包含せる多衆個人の集團たりしを以て種種の事情に關係して、去廿四年五月迄に退所せしもの四十二名、遂に百難を破り、千苦を排し、將來眞に不屈不撓以て必ず其志を貫かんと盟ひしもの、九十餘名に至り、終に今回諸學科の卒業を遂げしもの實に八十九名なりとす、今や海外異域の境、切磋卓勵、其業に従ふのみならず、親みの積む處因の疊まる處、信義相重じて吉凶相弔ふの狀、實に同胞も雷ならず、就中其前途の責任を重じて、愛國想念の感起に至ては、眞成貿易者の態度に愧づるものなきを信す。

而して其學術進歩の現狀に就ては、別記科程順序の通り、經過し來り、已に滿三年の學科々程を完り、諸學科の卒業を爲せしと雖も、貿易の術たる繁密複雑なるのみならず、殊に營利に機敏なる清商と角逐して輸贏を決するには、實地の鍛練深からざるべからざるを以て、尙二年間今回創立の陳列所及賣買取引所に在て、實際の業務に従事

商品陳列所

陳列所之要領

せしめ、以て諸般の實務に經驗せしむるものなれば、其能く二年の實修を卒ゆるに至らば、始めて志操堅固にして且充分の技倆を備へ、日清貿易上完全の性能ある貿易者を得べきを以て、其實修を卒へし者には、日清貿易技倆證明書を附與するものとす、生徒養成の經過大要斯の如し、而して本年七月研究所の附屬として、日清商品陳列所なるものを、上海英租界九江路に創立せり、其目的たる、廣く日清貿易品の品評及試賣買を行ひ、以て我國各府縣實業家の便益を謀り、傍ら本所生徒實際の練習に充つるに在り。

#### 第四項、商品陳列所業務の要領

其一、抑も支那の國たる、地の廣き三十七萬三千餘方里、人の多き四億一千餘萬、是を以て人情風俗習慣の差、東西南北霄壤懸隔せり、而して其各地異同の如何に精通するは、貿易上最も必要の事なるも、如何せん該國現今の情勢たる、獨り文學哲學を除くの外、百事討究の資料に乏しく、間々泰西人の著書材料ありと雖も、氣候地理書の外、概ね杜撰皮相の判斷にして、取て以て實際講究の資となすに足るものなし、よし假令ひ之ありとするも、百聞は一見に如かず、百見は一體に如かず、商家の務にあ

つて殊に然りとす、況んや其資料に乏しきをや、是故に生徒にして其講究を全からしめんと欲せば、宜しく各要港及内地必要の地點を巡歴し、實地に之を研究せしめざるを得ず、是れ第四第五學年の科程に、旅行練習を加へたる所以なり、乃ち卒業生は、其陳列所及賣買取引所に在て、貿易上の事物大低實地に會得するの後、清國諸要港を巡回せしめ、上海貿易と異同の點、及他日諸種の貿易事業を、經營するに必要な調査を遂げしめ、又清國內地の一部に入り、日本物貨の最も重なる需要地と、支那物貨の日本に向ふべき最も重なる生産地とを、巡視せしめ、其需要生産の實況、及其地と最寄開港場と、金融運輸交通業の實況を精査せしめ、以て後來日清間貿易上の變化、即銀行の新設、汽船汽車の新通、電信の架設、新工業の創立、及天變地異其他の事變等に際し、臨機運籌の素源を蓄へしめ、以て他日清商と輸贏を争ふの際、勝を制するに遺算なからしむるを要し、其結果を我官民に報告して、日清貿易經營の資料に供せんとす、然るに右の必要目的を果すに方り、生徒各自の負擔たる、毎月僅々の學費、到底完全の成果を結び難く、而して本事項の性質たる、後來我日清貿易發達の本源たるべく、其成功の如何は、實に國家民生に關係すべきものなるが故に、冀くは其資の

足らざる所、之が補助を政府に仰ぎ、以て其結果を全うせんと欲するなり。

其二、夫れ殖産興業貿易は、其關係互に密着して離るべからず、是を以て獨り貿易者の熟練の技術を備ふるを要するのみならず、殖産興業家をして、産出製造の活眼經驗を蓄へしむるを要す、蓋し貿易者は殖産興業の用を爲す所以、殖産興業者は貿易者の利を完うする所以にして、二者相倚り相待つて澎然沛然、互に活動發揮すべきものなればなり。

然るに退て我國生産者の情態を察すれば、苟も外國輸出品として言へば、其己れの生産品たる其物貨は、何れの國の何の用途に適するや、如何に改良して可なる可き、何れの貿易地に於て、何れの時期に盛なるや、否、又何れの物品の果して清國に向くべきや否の如き、茫乎として一も之を知らず、夫れ斯の如き情勢を以て、經過し行くは、將た何れの時か能く殖産興業の發達、貿易の隆盛を望むを得んや、故に今日の急務たる、我國各府縣陸海産物及工藝品中何物が、果して清國何地方の需要に適するや、否及其改良の方法如何、並に將來新販路を開くべき方法と、從來の輸出品をして益々増進せしむるの工夫とを、實際に試み、又清國工藝品中、我國何れの地方に於て、何

れの品々を模造し得べきやを確かめ、又特種の商標を附し、精製品の販路を開き以て日本品の信用を恢復する等。

其他清國物産中、我國に輸入して、利益あるものは、其買出の方法、其産地及我國の需要地方とを詳かにし、以て我國實業家の便益を謀るにあり、是れ本所附屬として、日清商品陳列所を設立したる所以にして、創立以來已に各府縣の依頼に應じ、實際件の試賣買を遂げたり、然れども其責任關係の大なる、到底個人負擔の耐ゆる所にあらず、須らく公共の力を藉つて、之を擴張整理、以て其研究を全からしめざるべからず、而して其結果の如何は、直に國家民生利害に影響すべき業務たるが故に、冀くは其資の足らざる所、之が補助を政府に仰ぎ、以て其目的を果さんと欲するなり、今商品陳列所業務の、要領を擧ぐれば左の如し。

第一、同所は、日清貿易研究所の附屬として、先づ其本部を上海に設け、漸次支部を天津漢口廣東等の諸要港に開き、又我國の各要港に出品取扱所を置き、以て日清貿易の機關となし、普く我國各地方の生産物を陳列し、之を清人に媒介して、直輸出を便ならしめ、併せて清國物産の我國に輸入して、利益となるべきものは、之を我國

各地方に媒介して、其直輸入に便ならしむる事。

第二、我國各府縣の諸生産物に對し、彼國何地方の需要に適するや、其需要の多寡買の季節、其物品に付改良すべき要點、荷造の方法、及將來の見込等を詳細に調査研究して、各荷主に報告する事。

第三、日本物品の信用を鞏固にし、又其信用を失ひしものを回復する爲め、精製品には特別の商標を附し、以て新販路を擴張する事。

第四、清國工藝品中我國に於て模造し得べき物品は、其標本を我國各府縣の生産者に媒介して、模造品の輸出を誘導する事。

第五、歐米其他の諸國より、清國に輸入する工藝品中、我國に於て模造し得べき物品は、之を我國製造者に媒介して、他國の輸入を防杜し、我國産の輸出を計る事。

第六、清國の金融運輸交通、其他通商上必要の事項に關し、特に取調の請求ある場合に於ては、其求めに應じて、調査報告する事。

第七、研究所の生徒をして、將來我國實業者の顧問となり、眞成貿易者となるべき眞成貿易者の資格を備へしむる爲め、陳列所及同取引所の助手として、實際の業務に

従事し、以て實地の駈引を修得せしめ、且將來我國に在る商業學校の卒業生にして、日清貿易に従事すべき志願ある青年者に、實地練習の便益を與ふる事。

陳列所は前七項の目的を完うするには、實際賣買の營業を爲さざるべからず、然るに本所の主旨は、日清貿易上單に公共の便益を謀るに在て、自ら營利事業に關係するを好まざるに依り、陳列所内に賣買取引所なる營業部を設け、之を大阪の豪商岡崎榮次郎氏に委託せしが、開業以來大に進歩して、過般二十萬圓の資金を以て、日清貿易株式會社を興し、岡崎榮次郎氏專務取締となり、同會社を以て、陳列所の賣買取引所を任することとなれり、其陳列所及賣買取引所の諸規則は別冊に詳かなり。

#### 第五項 上海日清商品陳列所の創業、

陳列所は、清名瀛華廣懋館、賣買取引所は、日華洋行と稱し、英租界九江路と、漢口路の交角に位置し、本年七月四日を以て開業せり、開業以來、一般に日清兩國貿易の發達を促がす爲め、開設せしものにして、營利事業に非ざるとの故を以て一般に一種の好感情を惹起し來り、従つて税關其他の取扱上、大に便益を得、顧客非常に多く、賣行亦甚速にして、意外の好結果を得たり、嗚呼本所や、地は萬里春申の滬頭に在り

商品陳列所之創業

日清貿易發達之源

境は東洋貿易の中心に屬す、各國人士視線の焦點に屹立して、日清貿易發達の淵源たり、其成功の如何は、實に國家民生の利害に繋る、其影響する所、蓋し亦少小にあらざるなり(明治二十六年秋)

#### 第四章 媾和管見

君既に清國の實勢に精通して、其の善後の策を講せんとす、何ぞ時俗に倣ふて、空論徒議するを爲さんや、君は日清戦後締盟の條件如何は、直に東方の大局に繋るあるを知り、先づ私見を上陳し、又廿七年十月對清意見に依り其一端を公にせり。

戦は國交の和を失ふに由りて宣せられ、和は宣戰の目的の達するに由りて媾せらる、而して所謂終局の勝を制し、勝利の實效を收むる所以は、媾和に伴ふ盟約の如何に由りて存することを思は、他日北京城下に於て、我國が締結せんとする盟約の條款が、如何に國家に重要なかを知らん、蓋し和は常にして戦は變なり、已に戦を宣する、必ず亦和を媾せん、和は誠に戦の局を收むる所以にして、戦勝の効果を完くすると否とは、一に繋りて媾和盟約の上に在り。

戦後締盟之大局

盟約條款

願ふに今度我國が、清國に向ひて戦を宣するや、其主眼とする所は、朝鮮の獨立を安固にして、永く清國の干渉を斷ち、以て東洋の平和を維持するに在り、去れば彼の城下締盟の日に當りて、我國が約款の第一に掲ぐべきものは、實に此目的に外ならず、蓋し清國政府は、一敗地に塗れ、惟命是從の外、奈何ともする能はざるもの、其要求に異議を挿む能はざるや必せり、況や其事たる、公にして義、其心たる仁にして俠なるをや、然りと雖も、清國にして單に再び朝鮮に干渉せずと云ふ、果して深く信するに足るか、清國政府が外交の經驗に富み、狡詐欺騙、以て得たりと爲すは、既往事實の歴々證明する所、交際諸國が夙に聞知する所にして、夫の英魯諸邦の如き、最も外交に歷練を累ぬるものと雖も、往々其詭計に陥ること少からず、去れば此國と盟約を結ぶに當りては、其盟辭如何に完美なるも、其約款如何に充全なるも、之が實行を確むるに足るべき擔保を取りて、之を我掌中に握るにあらずんば、遂に空文虚詞たるに至るの恐なき能はず、特に今回の如きは、我全國の力を擧げ、我多數の人命を犠牲に供せるものなれば、進で北京城下の盟を訂するの日は、必ず宜しく盟約の効果を實にせんが爲め、之が確乎たる擔保を領し、斷じて彼の狡詐欺騙を施すの餘地なからしむるべし、然らずんば我の國財

三大條件  
一曰斷  
二曰清國之干

を糜し民命を捐て以て纔に買ひ得たる戦勝の結果は、徒に空文廢紙を得るに止まり、當に當初の目的を達し得ざるのみならず、適ま以て歐西各國の笑を招くに至らんも亦知るべからず、是れ我媾和締盟の時に當りて、第一に深思熟慮せざるべからざる一大要件なりとす。

宣戰の目的は、已に盟約の條文に之を明載し、此盟約を確實にするが爲めに、其擔保を我に領得すること、せば、既に清國の干渉を杜絶するの效を收めて、又其詐術詭計に陥るの虞なく、朝鮮の獨立は自ら安固にして、我國戦勝の効果は、始めて充全ならん、然れども尙ほ深思熟慮を要するものあり、抑も我國が清に對して戦を宣するの大本旨は、専ら東洋の平和を保たんとするに在り、敢て朝鮮に比周して、清に寇するの意を挾むにあらず、故に清にして果して能く我真意を解し、暴を朝鮮に加へざらんか、我は當に永久彼を仇とせざるのみならず、進で彼の窮厄を救ひ、彼の振興を圖らんこと、猶ほ今の朝鮮を視るが如くならん、何となれば東洋の平和を保ち、唇齒隣佑の誼を全くせんには、固より如此ならざるべからざればなり、獨り憂ふる所は、清政府が一面自國人民の敵愾心を發揮せしめ、一面自家の曲を飾り敗を掩はんが爲め、政略上公報に私報に、中外の

二曰保  
一曰東洋之平

何等之愛  
親切

東洋平和  
之日清之融

新聞紙に、百方虚を傳へ、實を蔽ひ、力を極めて我の彼に對する非理不法を鳴らしたるより、彼國民は毫も其眞意を解するに由なく、漫に我を以て無名不義の師を興せるものと爲し、假令戦ひて非常の敗を取るも、其我を卑しむ我を侮るの念は、既往より甚しく、其和を構じ好を修するの後に至ても、彼は仇讐怨恨の心を挾み、以て我に接し、是より兩國民の感情は永く睽離乖戻して、遂に融合一致の期なきに至らん、果して然らば、我は恩を朝鮮に施して怨を清國に買ひ、彼我の貿易長へに衰へて、隣好の誼竟に修まらず、東洋の平和は却て一大破綻を此に胚胎せん、是豈に我宣戰の本旨ならんや、去れば我國は須く朝鮮の獨立を鞏固にすると、同時に清國民をして徧く我宣戰の眞意を知らしむるの方案を行ひ、假令遽に彼等の敬愛を得るに至らざるも、侮蔑仇怨の念を戦後に留めしめざるべきこと、亦是れ締盟媾和上の一大要件なりとす。

所謂東洋の平和と興隆とを絶對的に、計圖せんには、日清兩國民間の惡感情を一掃して、之を融合するの外、進んで兩國の交誼を厚くし、交通を便にし、貿易を盛にし、以て相互の福利を増進せざるべからず、願みて從來兩國の通商を觀るに、我の彼に於ける最惡均霑の約款なきを以て、歐米各國の商人が、享有する諸般の特例にも、我は獨り與かる

事情精通

三曰要  
日清通  
商條約之  
改訂

を得ず、全國二十五の開港地中、我商人の塵舗を置き、互市に従事し得るは、其十五港に止まり、又歐米諸商人は、隨意に内地各處に行商し得るも、我商人は彼の十五開港場の外、容易に步趨を展ぶるを許されず、加之釐金税と稱し、清國內地に行はるゝ物品通過税の如き其歐米人に於けるや、子口半税と名くる特例あるに拘らず、我國人の輸入に係る物貨は、海關一過の後、直に一般清民の物貨と均しく、内地到處に其苛征暴斂を受くるを以て、同一品質同一原價を有する商貨も、一たび内地に入るに及びて、其我よりすると歐米人よりするに由り、非常に估價に徑庭を見るは、勢已むを得ざるのみ、此他我國人が歐米人に比して、通商上の不便不利を被ふる事情は、枚舉に遑あらず、日清貿易の振はざる、我商貨の彼地に入り易からざる、豈に怪しむに足らんや。

夫れ貿易は互の利に成る、今若し日清の貿易を盛にし、近くは以て彼此の交誼を厚くし、相互の福利を増進し、遠くは以て東洋の平和と興隆とを確實にせんと欲せば、戦勝媾和の時に於て、積極的に日清通商條約を改訂し、我國人をして單に歐米人の既得せる權利特典のみならず、更に進みて未だ歐米人に許與せざる所のものをも享受せしむべきこと、亦我國の最も意を用ゆべき一大要件なりとす。

區々の議は姑く措き、余が徹頭徹尾締盟の上に於て必行を期せざるべからずと信ずるものは、實に以上の三大條件に在り、萬一にも此條件中、一を闕かんか、余は竊に宣戰の本旨貫かず、戰勝の效果收まらずして、遂に或は驚くべく畏るべきの禍根を他日に貽さんことを恐る、若夫れ軍費要償の事の如きは、稱して義戰と云ふと雖も、我國は創業の時代に關し、進んで我天職を盡さん爲には、百般の規模是より大に恢擴せざるべからず、況んや彼清國の財寶に富み、且裕なる、殆んど測知すべからざるが故に、我國が此次和を彼に許すの日は、直接間接に失ひたる利益と受けたる損害とを積算し、以て我瘡痍を癒やし、以て我軍備を盛強ならしむるに足るの金額を要求し、一時又は數回に之を納めしむるは、固より當然の事にして、必しも余の縷々陳辯するを要せざるのみ、故に余は爰に前述せる三大要件の要旨を條列し以て此篇の局を結ばん。

價金正當  
不待三接  
陳、日清

- 第一 朝鮮の獨立を安全にし、東洋の平和を鞏固にするが爲め、清國をして盟約せしめたる條款履行の擔保として、我國は渤海に於ける最要の某軍港を預り置くべし。
- 第二 東洋の平和を維持する爲めに、我國は媾和の成ると同時に、清國政府と協議の上、適當の方法に由り、清國の鄙都人民一般に、我宣戰の主旨を説明し、之をして

徧く我國の眞意を領會せしむべし。

- 第三 日清兩國の福利を増進し、東洋の平和と、興隆とを期する爲めに、從來通商上我國が受けたる不便不利を一掃し、歐米各國に比して、更に優條親切なる通商條約を締結すべし。

東亞之興  
隆、日清  
之提携

君の立論は前數章に既述せる如く、宇内一統の理想に胚胎し、東亞興隆の日清提携に在るを信ずるものなるが故に、常に高處に着眼し、大局より打算して、毫も俗情に驅られず、堂々として王者の師たるの概あり、爰に退嬰萎縮如何にもして兩國の衝突を避け以て一時を糊塗せんとしたる當局者も、一旦戰の利あるを見るや、意忽ち驕り深く思を將來の難局に致さず、遼東割取すべし、山東占領すべし、四百餘州我馬蹄の蹂躪に任すべしと云ふが如き狀況にして、愛國心の一時に激動する所、一唱百和概ね當局に同せざる尠なし、是時に當り君は領土大割讓を求むべからず、價金多額を貪るべからざるを主張して、其論鋒一見甚だ振はす、動もすれば當局より迂腐視され、一世よりは怯懦視されんとするも君更に願みず、廿八年三月我軍遼東山東に連勝し、敵の媾和使、其國都を出づるの日に於て、更に對清辯妄を公にし、世の惑を解かんと欲せり、其中に曰く、

領土之大  
割讓不可  
價金多額  
不可貪



凡そ物には先後の順序あり、時に緩急の機宜あり、領土大割譲の事姑く、其義非義を措て問はずとするも、之を今日に行はんと欲するは、果して順序と機宜とを得たる者ならんや、否や、明治政府が、尙文の風を奨励する二十餘年、朝野官民齊しく泰西の文物を取るに急にして、曾て東亞の事物を顧みず、東亞の安危興亡は、殆ど一に清國の治亂向背に由りて分る可きにも拘らず、我國人の清國を視るや、越人が秦人の肥瘠を視るより冷淡にして、現在干戈相交はるの日に及んでも、猶ほ未だ彼國の實力真相を發見せざるの甚しきに至れり、幸に叙聖神武なる、大元帥陛下の御威徳と、祖宗列聖數千年間陶養あらせられたる忠勇尙武の元氣とに頼り、勝を海陸に制し得たりと雖も、國民が東洋前途の經營に對する、必要の準備と覺悟とは、未だ一として備はるあらず、然り而して泰西列國が東洋に於ける、二十餘年の經營を觀るに、國交に軍備に、貿易工藝の實利に、拮据黽勉至らざる所なく、所謂西方東漸の趨勢は潮の海に涌くが如く、其威を發ひ機を覗ふの情形は虎の嶋を負ふが如く、殊に禹域四百餘州の形勝豐腴は、恰も彼等の涎を垂れ牙を鳴らして、瞬時も視線を轉せざる所也、此時に當り、沿海の一島一嶼を移動するも、忽ち東洋の禍機を發するに足らん、況や今一省又は多省の勝地沃土を擧げ、

著眼卓  
絶有遠  
謀慮深

以て我の版圖に加へんと欲す、是果して時の機宜を得る者と謂ふ可き乎、殊に國民の覺悟と、準備と、未だ整頓せずして、遽に此一大難事を擧げんことを欲す、是果して物の順序を誤らざる者と謂ふ可き乎。

我國は連勝の餘威を以て之を求め、清國は連敗の餘喘を以て之に應ず、求むる所大なりと雖も、應ずる者拒む能はずとは、議者の假想する所ならん、顧ふに清國自身の抗拒力なきに至るは、或は然らん、獨り未だ知らず夫の涎を垂れ牙を鳴らして、環望する諸國は、果して袖手黙坐以て我國の爲すまゝに任かす可き乎、彼英國は、平壤黃海の捷報達するか達せざるかの間に、早くも聯合干涉の議を提起せしに非ずや、當時他の諸強國が其議に同せざりしも、豈に盡く我國の進取を欲して然るならんや、英の提議は一たび敗れたりと雖も、他國の提議は、再び出でざるを保せず、聯合干涉の議は、一たび斥けられたりと雖も、單獨干涉の策は、隱然施されざるを保せず、交戦中の干涉案は暫く頓挫したりと雖も、決戦後の干渉案は、相繼で試みられざるを保せず、一旦干渉四方に起り、紛々擾々復た經理收拾す可からざるに至らば、我國たる者は將に奈何にして其希望を遂げんとするや、名正しく事順にして秋毫無議す可からざるの事と雖も、猶左牴右吾容易に其

三國干渉  
之來何足  
怪哉

目的を遂げざらんことを恐る、而るを況んや名と事と未だ全く正順を得ざる者をや。今一步を退き我國は、能く百難を排して、領土割讓の希望を遂げ得可しと假定するも、彼れ諸國は豈に我をして獨り得る所あらしめて已む者ならんや、曩者英國が協同干涉の議を發したるに當り、他の諸強國が之を斥けたるは、全く英が優先利得を壟斷するを疾忌したるに由れるに非ずや、此心を推して之を思へば、若し一朝我にして清國の一省を取らん乎、則彼等も各一省を取らざれば鑿くまじ、我にして我に利便なる方面を割かん乎、則彼等も各其利便とする所を割かざれば満足すまじ、之を要するに我國が領土割讓を求むるの時は、即列國が禹域分食の素志を行ふの曉にして、我國が一省一郡を領得するの日は、即清國が四分五裂して豺狼の爪牙に掛かるの秋也、夫れ清國は已に四分五裂に終れり、赤毛碧眼の異種族は、中原に跋扈せり、此時に當り一省一島の新領は、我に何の裨益か有る、孤掌鳴らすに由なく、隻手江河を支ふる能はず、東洋の大事遂に爲す可からざる也。

且夫れ至誠至仁の心を體し、拔苦與樂の急に迫り、千萬已まんと欲して已む能はざるの時期に非ずんば、領土割讓の事は、未だ遽に求む可からず、若し徒に戰勝の餘威に任か

せ、敵國の失勢に乗じ、彼の土地人民を奪ふて我の版圖を廣むるを計らば、後患の伏する所、禍根の萌す所、必ず寒心す可き者あらん。

先見之名  
是豈君之志  
君の志ならんや。

今より之を見れば、君の言ふ所鑿々として肯綮に中り、清國內外の形勢明々瞭々火を觀るが如し、當時若し當局をして少しく君の言を聽かしめば、曷ぞ遼東遼附の悔あらん、戦後日清の關係も亦一層の輯睦を來たせしや明かなり、惜しい哉徒に君をして先見の名を成さしめたるを、又君は媾和約款第六條第四款の國家經濟の爲め大患を貽すを慮り、之が善後を策せんとしたるも成らず、終に君をして再び先見の名を贏得せしむ、嗚呼是れ豈に君の志ならんや。

苦其心  
志其心  
筋骨以  
勉于興  
亞問題  
興亞之大  
偉人

之を要するに、君が興亞問題の爲め、其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、斃れて猶ほ止まざらんとせしもの、其根柢深く牢乎として抜くべからざる信念あればなり、故に其隨時發表せし意見、若しくは各般の計畫、皆其揆を一にし、首尾一貫一絲紊れず、卓抜の見超群の識、常に時流に卓絶せるもの一として此の信念の果にあらざるなし、君を稱して興亞の大偉人といふ誰れか異議を其間に夾むものあらんや。

### 三 未成長の英雄

#### 第一章 惜まれたる東方齋

##### 一 人物論の難

前篇既に君の事歴を叙し、中篇已に君の抱負を述べ、而して今や君の人物論に入らんとす、古人曰く人を傳するは易し、其眞を傳ふる難しと、寔に然り、是れ史筆の古來往々にして後人の異議を免れざる所以なり、古人曰蓋棺而論定と、而かも棺を蓋ふも猶ほ定まらざるものあり、人苟くも生れて何事をかなさんと欲す、須らく其爲さんと欲する所を爲すべし、何ぞ其他を顧みるに暇あらんや、吾人の踏まんと欲する大道は、坦々として砥の若く、復た何をか疑ひ何をか恐れん、是と云ひ非と云ふ、竟に何事ぞ、吾は吾たり、汝は汝たり、安んぞ他の是非により喜愛するを爲さん、況んや人死すれば精魂天に上り、形魄地に歸す、後人の毀譽褒貶の如き、痛痒相關せざる、墓所の草を拂ふと拂はざるが如きのみ、而して後人或は其善を掲げ、其冤を雪ぎ、以て世道を益せんとし、或は其幽を闡き、其晦を顯に

し、以て其人の眞價を發表せんとし、各自見る所を以て之を畫く、畫かるゝもの會て輕重損益せざるも、畫くものゝ異なる其顯はるゝ、亦た異ならざるを得ず、是れ正傳の愈々困難なる所以なり。

余が君を傳せんと欲するは、自序中既に述ぶるが如く、一片君を憶ふの至情の迸しりて此に至れるのみ、余は既に君を傳し君の理想を述べたり、更に君の個性を解剖し其人格を評論せんとす、而して余の君を見たるは、年漸く十九歳、最も英雄熱に犯されたる時代にして、親灸の間僅かに一年に過ぎず、故に君の人物評の如きは、之を君と交誼ありし先輩諸氏の談片によりて髣髴せしめ、余は唯だ十四年前君と接觸して直覺せる所を述べて、自ら満足せんとす、而かも余の目的たる一は以て健忘なる世人に依り忘れられんとする未成長の英雄を地下に喚起して、其記憶を新にし、一は以て方今青年子弟が立志の資料たらしむるに於て、足れりとす。

##### 二 追悼の詩文

君の早世は時人に惜まれたり、訃報一たび傳はるや、知ると識らざるに論なく、世擧つ

て之を悲めり而して世に在る僅に三十八年、畢世東奔西走して一處に定住せず、其志す所域外に存せしが爲め、内人に接觸するの機多しとなさず、而かも一旦膝を交へ、其醫咳に接したるものは、内外人を問はず、皆多少の印象を興へられざるなかりき、君の死するや各新聞社争ふて訃報を廣告して、一錢を徴せず、生前君が債を負ひし高利貸すら、君の徳に感じ靈前に供物をなさんことを請ふに至る、弔電弔文弔詩數百通の多きに上り、其範圍遠く清韓人に亘る、今左に其數者を擧げん。

小人感化

島地 默雷

嗚呼志士、荒尾精君、 謫焉逝矣、 訃報所到、 朝野内外、  
聞者驚悼、 莫不慟哭、 君以去月、 病歿臺北、 遺骨載歸、  
輿送東京、 本月本日、 諸友相謀、 盛舉葬典、 本山法主、  
降命默雷、 臨其儀筵、 爲其導師、 捻香誦經、 恭弔英靈、  
嗚呼、 君之所抱、 志望遠大、 才學卓絕、 世皆仰之、 君之所行、  
軼軻困頓、 忍耐不撓、 人皆感之、 有此雄圖、 假以數年、

風雲際會、 必奏偉業、 惜哉不幸、 天不假壽、 二豎爲祟、  
身心失和、 一息遂絕、 現當異境、 功業未央、 忽就幽途、  
遺德猶盛、 澤被後昆、 志操公明、 相應佛心、 行爲正大、  
冥合佛事、 已有盛德、 淨業自具、 加以妙法、 成道何疑、  
明知 彌陀迎接、 往生淨刹、 諸佛圍繞、 坐寶蓮臺、 三明六通、  
頓證菩提、 七覺八聖、 速得涅槃、  
茲證法名曰、不退院勇精居士、伏乞  
三寶照鑑、 哀愍攝受、

悼荒尾精君

釋宗演

雖云秋色屬荒涼、 松菊依稀尙凌霜、 一片精誠葬何處、  
青山無往不靈光、

渺水雲

瑞風山人

嬌々奇才最絕群、

訃者此日世驚聞、

不從朔漠冒冰雪、

巨人荒尾精

二二一

恨向<sub>二</sub>炎方<sub>一</sub>衝<sub>二</sub>瘴氛<sub>一</sub>。 一代英雄孰知己、

暮年身跡我憐君。

英魂彷彿招<sub>二</sub>何處<sub>一</sub>、

腸斷天南渺<sub>二</sub>水雲<sub>一</sub>。

紫海漁夫

積羽沈<sub>二</sub>舟衆口喧<sub>一</sub>。

平心誰爲雪<sub>二</sub>君冤<sub>一</sub>。

深憐碧海齋<sub>二</sub>雄志<sub>一</sub>、

豈向<sub>二</sub>蒼旻<sub>一</sub>訴<sub>二</sub>薄恩<sub>一</sub>。

廿歲轆軻非<sub>二</sub>我志<sub>一</sub>、

一時通譯及<sub>二</sub>其門<sub>一</sub>。

遙思蠻島薯蕷酒、

惆悵臨<sub>二</sub>風灑<sub>二</sub>九原<sub>一</sub>。

有爲才

空々子

雲海茫茫魂不<sub>レ</sub>回。

青山落日獨低徊、

志存<sub>二</sub>朔漠<sub>一</sub>動空在、

骨瘦<sub>二</sub>炎荒<sub>一</sub>命可<sub>レ</sub>哀。

萬古英雄數奇感、

六軍貔虎有爲才。

弔<sub>レ</sub>君欲<sub>レ</sub>醉黃花酒、

慷慨臨<sub>二</sub>風淚灑<sub>レ</sub>苔。

評林子

禹域周游膽亦雄。

從軍子弟各成功。

淒涼一代男兒志、

總付<sub>二</sub>轆軻躑躅中<sub>一</sub>。

同

飄然騎<sub>レ</sub>鶴去何翔。

千里傳聞獨斷腸。

他日招魂何處是、

蕭疎一樹碧桃榔。

同

四海飄零奈<sub>二</sub>異才<sub>一</sub>。

男兒到此亦堪<sub>レ</sub>哀。

生前我豈識<sub>レ</sub>君者、

一接<sub>二</sub>訃音<sub>一</sub>腸九迴。

悲辭

姚文藻

古今來有能負<sub>二</sub>天下之重之才之士、或遇或不過、何可<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>數、一死已矣、悲夫、荒尾精君之

以疫<sub>二</sub>死於臺灣<sub>一</sub>乎、君有能負<sub>二</sub>天下之重之才而不過、雖<sub>レ</sub>遇亦不顯、無<sub>レ</sub>以展<sub>二</sub>其才<sub>一</sub>、遇不顯、才未展、年方

強壯、世際<sub>二</sub>艱難<sub>一</sub>、而君竟死矣、我辱<sub>レ</sub>交<sub>レ</sub>君、年歲相若、意氣相同、世願相似、我既不過屢瀕<sub>二</sub>於死<sub>一</sub>、君又極相憐惜<sub>レ</sub>我者、我不死而君死、君死而我獨悲<sub>レ</sub>君、而益自悲也、亞洲之人、未能<sub>二</sub>盡知<sub>レ</sub>君而悲<sub>レ</sub>君、然而君固心<sub>二</sub>乎亞洲<sub>一</sub>者也、君死而心<sub>二</sub>乎亞洲<sub>一</sub>之人益鮮、亞洲之事且起矣、君胡不<sub>レ</sub>緩<sub>二</sub>須臾死<sub>一</sub>也、嗟呼我亞洲之人也、悲<sub>レ</sub>君自悲、悲<sub>二</sub>亞洲<sub>一</sub>也、悲哉悲哉、

辭曰、

神州萬里。 嘉樹君蕊。 結實累累。 蔚爲國器。 廓清天地。  
紹繼君美。 靈今永慰。 世又奚悲。

弔 詞

佐々友房

東方齋之  
小傳

明治二十九年十一月二十八日、荒尾精君病を以て臺北府に逝く、嗚呼悲哉、君一武人より起り、熱誠軀を抛て東方問題に盡瘁せる十年一日の如く、對清の事業を振興し、腐懲の機密に参畫し、或は後進俊秀の徒を鼓舞訓育して、國事に粉碎せしめしが如き、其功蹟世に赫々として芳名永く朽ちざるべし、其叙勳賜金の榮ある、亦宜なり矣、然れ共天下大に東方の將來を以て君に期し、君も亦以て自ら任じ、抱負頗る大に、經綸固より廣く、東馳西驅席暖なるに遑あらず、以て大成を永遠に期せり、而して處世數奇、加ふるに大功常に速成を得ず、是を以て十年經綸の迹、未だ抱負の半を實行せず、其事業も亦未だ天下の重望に添ふの時に達せざりき、嗚呼昊天無情、何ぞ假すに歲月を以てし、其事業を完成せしめざる、抑亦東洋多事の日、此有爲の人を失ふ、邦家の爲め誰か哀惜せざる者あらんや、況んや予の君に於ける、燕遊一朝の交に非ざるをや、予の始めて君

を識る、實に明治十六年にあり、時に君陸軍少尉を以て、熊本鎮臺に屬し、尋常武官の間において、既に鬱然秀拔の氣を現はせり、後、君の清國より歸るや、共に手を把りて、東亞の大勢を談じ、意氣の投合する所、肝膽相照し、終に互に相提携して東方問題の上に周遊するに至れり、爾來十餘年、君が頭山滿氏と予とに於ける、其交誼恰も兄弟の如く、相對して洒然常に胸襟を披き、規圖する所あれば、必ず之を諮る、予も亦君が休戚を視る自家の休戚に異ならず、而して今や此休戚を同うするの友、溘然逝て還らず、區區の私情、豈に哀悼の切なるに堪へんや、曩に君の臺灣に赴くや、其事業着々緒に就き、吉報頻に至るを以て、遙に慶運を祝して其成功の速ならんとを望めり、何ぞ計らん凶電忽ち南より來り、君が訃音に接せんとは、忡々たる心緒、何の處にか訴へん、南洋の波瀾亦た渤海として恨を語るに似たり、音容尙ほ眼前に髣髴たれども、再び君と相會して東方問題を高論するに由なきか、嗚呼悲哉、予偶病て故郷に在り、葬に會するを得ず、乃ち遙に一篇の弔詞を寄す、庶幾くば君が在天の靈、髣髴として來攫けよ。

## 第二章 名士の東方齋談

南洲以下  
八材

福本日南曾て『日本人』紙上に、一代の人物として南洲以下八材を挙げたる中に、君を加へて、曰く、

若し夫れ志業未だ伸びず、不幸中道にして歿したる者には、荒尾精あり、海内の健兒、今に至り君を思ひて已まざるもの、其器の尋常ならざりしを見るに足らん、吁、臺天の計音達せしより、既に八年、東方齋の墓木拱を及すも、君が日夕口にせし迂直の計、尙は耳に在り、念ふて一たび此に至れば、中夜悵々の情に堪へず。

眞に然り、君を念ふて中夜悵々の情に堪へざるもの、豈に獨り日南のみならんや、君が生前に於て最も親交あり兄弟の義を結びしもの、佐々友房あり、頭山滿あり、根津一あり、養育輔導第二の父母の誼あるは、管井夫妻なり、佐々氏の君を弔ふの詞は載せて前章に在り、乃ち先づ頭山根津管井の談を掲げて順次諸名士に及ばんとす、

(一) 頭山滿氏の談

余は大に荒尾に戀れて居つた、諺に五百年に一度は天偉人を斯世に下すと云ふとあり、當時最も偉人を憶ふの時に荒尾を得たのであるから、此人は天が下せし偉人其人ならんと信せし位に、敬慕して居つた。

天生偉人

大西郷以  
後之人傑

彼の事業は皆其至誠より發し、天下の安危を以て獨り自ら任じ、日夜孜々として其心身を勞し、多大の困難辛苦を嘗め益、其志を勵まし、其信する道を樂しみ、毫も一身一家の私事を顧みず、全力を傾倒して東方大局の爲め盡くせし報公献身の精神に至つては、實に敬服の外なく、感謝に堪へざる所であつて、世の功名利慾を主とし、區々たる小得喪に醒醒する輩と、全く其選を異にし、誠に偉人の器を具へ大西郷以後の人傑たるを失はなかつた。

徳望超  
凡群、見

彼の徳望、識見、容貌、何れも偉人の風格を存し、凜乎たる威風の裡に、一種云ふ可からざる柔和にして、且つ能く人を安んじ、人を魅するの魔力を持つて居つた、此人ならば必然東亞の大計を定め、醉乎として其主義を世界に普及し、頗る後世を益するの鴻業を成し遂げ得べしと信じて居つた、然るに絶大の抱負經綸を有し、徳望識見共に超凡絶群なる斯人にして、中途に逝去せんとは、實に思ひ設けざる所であつた、彼の死するや、根津は余に書を送り、此時に於て此英傑を奪ひ去るとは、天は何の意ぞと、非常に痛恨の意を洩したが、余も畢生の恨事として眞に同情に堪へなかつた、余荒尾を信じ且つ敬慕したるは、實に此位であつた。

荒尾が上海にて事業を經營せる時分、非常に金策に困り三千圓なくば進退ならぬ境遇となり、急に余に訴へたが、余は固より金銭の貯なきを以て、如何ともすると出来なかつたが、其後今田主税が来て曰ふには荒尾の爲め高利貸より三千圓を借る約成りしも信用ある人の連印を要するを以て、鳥尾得庵に之を依頼せんと欲す、君請ふ之を謀れとて、余偶々京都に赴くの要あり、得庵熱海に閑居せるに依り、今田及金貸を伴ひ之に赴かんとせしに、途中にて得庵に出會ひたれば、路側の茶屋の二階へ得庵を引き上げ、他人を去らしめ膝を接して捺印の件を相談したるに、得庵曰く、高利貸より借金するに捺印することは出来兼ねるが、事急迫に屬するを以て、余に於て金策す可し、而して某氏に交渉すべきに依り人に嫌なきかと、余は曰く金さへ得れば何人たりとも敢て問ふ所に非らずと、因つて某氏より借用の事を荒尾に告げたるに、荒尾は大に閉口し、折角の御盡方なれ共某氏の金は斷じて借用致さぬと云ふを以て、然らば余が借りて君に貸す事とせんと謂ひしに、荒尾は既に某氏より借用の事を聞きたる以上は、借に忍びずと主張するより、遂に鳥尾に斷ることにした、斯の如き所は餘程激しいものであつた。

荒尾の崇敬して居つた人物は、三代頃の人物では夏の禹王杯を慕ひ、日本では南洲を敬

崇尙

慕して居つた。

碁なども少しは打つた、人の碁とは打方が變つて、一種の荒尾式で、真中のみを固めるに力め、中々氣根強く勝つ迄は打つ、それで相手が氣根負することが常習であつた。

國碁

余が道樂をして濱の家へ泊り込める時分、荒尾と佐々の二人、非常に之を氣にして、轉宿を迫まる、それでは二三千圓なければ出られないから、其中始末して出ると云ふと、兩人が兎も角出て貰いたい、然らば二三千圓は如何にか金策して始末するとて切りに勧める、然らば余は出ると云へば、必ず出る故に、金を持來れと云ひしに、金を取つて後に出ると云ふは險呑だとして、頻りに危む故、遂に出ないことにした事があるが、荒尾も佐々も中々親切な心掛の届く人であつた、今や兩人とも亡し、遺憾の極である。

友誼

(二) 根津一氏の談

君は智仁勇の三徳を具へた人で、幼より倜儻にして大志あり、其度量の宏濶にして、氣宇の悠大なる、實に非常のものであつた、一旦事を企つるや熱心、且つ大膽にして、必ず仕遂げねば已まぬ精神を持つて居つた、缺點と云へば君は情に最も脆い人で、論語に所謂溫にして厲の、厲と云ふ所を見はさなかつた、故に小事に於て往々にして情に制せ

智仁勇



氣品高尚  
容貌雄大  
辭令端莊  
容體雄大  
辭令端莊  
容體雄大  
容體雄大

られた様であるが、固より大局に關しては此失に陥らなかつた、是は君の度量の大なる  
と、仁の美性より來れるものにて、所謂人の過や各其黨に於てす、過を觀て斯に仁を知  
るものにて、寧ろ尊むべき資質と云はねばならぬ、君は氣品高く容貌雄大、且つ言語動  
作に極めて落付きあり、人に接する極めて温和にして、辭令端莊、座作儀を失はず、事  
理を見る甚だ明晰にして、事を處する從容、而し其機を過たず、尊むべく親しむべきも  
のがあつた、晩年に至り修鍊益々其功を積み、所謂聰明敏知にして、以て臨有るに足  
る也、寛裕溫柔にして以て容る有るに足る也、發強剛毅にして以て執る有るに足る也、  
齊莊中正にして敬する有るに足る也、文理密察にして以て別つ有るに足る也、との古語  
は君に於て其體性の概を見るの感があつた。

君の最も絶倫なりしは、其感化力と、莊重の辯を以て理を説き情を説き、利害を説きて  
諄々として至誠面に溢れ、何人をも之れを感化し、之を説破するの天才があつて、支那  
人の如きは一見直ちに偉人として衷心君に推服した。

讀書は好める方なりしも、年少より國事に奔走したる爲め、若王子閑居時の外、始終愆  
忙に取紛れ、靜養耽讀の隙が少なかつたから、學問は餘り深くはない、然し間あれば書

大西郷  
國體

見するの心掛あり、又書物を確實に選擇すると、聰明卓抜の天稟とを以て讀下すから、  
讀めば必ず多少自得する所あつて、之を實地に應用した、武術は君の最も嗜みし所で、  
上達の早き性で、撃劍も相應に使ひ、居合術は殊に名人であつた。

特に大西郷を慕ひ、支那人にては曾國藩を敬し、常に其等の言行録杯を手にして居つ  
たが、晩年には藤樹先生をも崇んで居た、禪學が好であつたが充分に鍊る隙なく、陽明  
をも學び傳習録や藤樹全集等を座右に置いて居つた。

君は武人の出に似ず事物に興味の多かりし男にて、書を能くし基も上手で、骨董美術の  
類をも好み、刀劍の鑑定も上手であつた、青年士官の頃には同僚は大抵下宿屋生活を爲  
し旗亭に上り酒食を恣にするに云ふ風なりしに、君は下宿屋生活を忌み、必ず何地に往  
ても小ながらも一戸を持ち、婢僕を雇ふて上品に靜に生活するを好んで居つた。

君は又社會經濟萬般の事物に、細心の注意を拂ひ博覽會、展覽會の如き事を觀るを好  
み、製造品、農産、林産、水産、其他美術品等を見る鑑識を有し往々専門家を凌ぐ程で  
あつた。

(三) 菅井誠美氏夫妻の談

豪胆

親切

孝悌

操守嚴正

巨人荒尾精

三三二

余は鹿兒島出身なるが荒尾君は、普通の鹿兒島人の如く外觀のみの豪膽にあらずして、眞の豪膽なる人なりし、君は父母に對して孝行で、妹に對して慈愛深く、又あらゆる階級の人に叮嚀且つ親切にして、余等夫妻に對しては、特に心を用ひて居られた、君が熊本又は支那に居らるゝ時でも、常に音信を怠らず、計畫ある毎に、必ず余に相談せざる事無かりし。

君の起居動作は、極めて嚴正にして、余が一週に一度午後七時に出勤し午前二三時に帰宅するに、君は決して床に就くとなくして、余の歸るを待てり、又降雪等の爲め、明日歸宅するともあるも、寢に就けるを見ず、以て君が守る所の嚴正なるを知るべし。

君幼少の時、即ち明治七八年頃陸海の少壯軍人等、余の宅に集り、盛に征韓論の氣焰を吐き、征韓に際し、若し支那の之を妨害するあらば、如何なる事を爲すも、是非兵を韓土に上陸せしめざるべからず、上陸さへすれば事必ず成らんのみ、而して韓を征したる後は支那を征し、之を四分すべしと云ふが如き激論屢々起りしとあり、青年時代に於ける君の支那四分説も、此等より胚胎せしに非ざるか、而して幼少時代に此等の談話を聞き志を支那に向けられたるに依りて考ふるも、國家を思ひ國家を愛ふるの念は、既に幼

夙興夜寐

最初俸給  
建父母  
之墓碑

時に發せりと謂ふ可く、到底今日の少年輩の夢想だも及ぶ能はざる所にして實に感服の外なし。

菅井夫人曰、君の勤勉なりしとは、通常人の及ぶ所に非らず、朝は拂曉より夜は二時に至る迄勉強するを常とし、断へず袴を着し又食後庭園を散歩する際にも、暗誦を爲す爲め讀書しつゝ散歩せり、隣人其狀を見て、大に君の將來に囑望せり。

君は居常、其成業の期迄は双親の健在を祈り居りしが、不幸にして君が教導團を終へたる年に父君歿し、せめて母君のみにも健在ならんとを祈りしも、君の士官學校在學中に母君も亦白玉樓中の人となれり、君は士官學校を卒へ少尉に任官するや、最初に得たる俸給にて両親の墓碑を建設し、以て報恩の誠意を致されたり。  
君は寒中足袋を穿たず、又火鉢をも用ひざりし。

#### (四) 大隈重信氏の談

君とは親交ありしと云ふにあらねば、其詳を知らざるも、頗る愉快なる男子にして、將來東洋に於ける支那の位地の重大なる關係あるを思ひ、上海に學校を設け有爲の青年を率ゐて、支那の研究を爲す、此研究をするに語學が必要である、そこで向ふに學校を

巨人荒尾精

三三三

興し有爲の青年を教育すると同時に、支那人と接して支那の語學を研究させる、支那で學校を設けると、日本人に支那語を教へるに大なる利益である、又上海は殆んど支那に於ける中立地の如き、一種不思議の都會で、支那にして支那に非らず、或は英國の如き、佛蘭西の如き、亞米利加の如き、專管居留地を持つて、而して總ての居留地經營が、領事館共同の下に行はれて居る、居留地の行政は、列國々際會議に依ると云ふやうな不思議な、先づ世界にア、云ふ土地は珍らしいと思ふ、支那の主權の下に、各國が共同して行政權を有つて居る、さう云ふ所に學校を設れば、支那を研究するに便利が宜いと同時に、支那に於て最も勢力ある言葉は、英語である、其英語を學ぶにも便利である、而して支那の最も優勢なる内地の貿易の咽喉は、上海である、長江に依つて内地の交通が便利を得て居る、そこで支那に於ける貿易若くは列國の支那に於ける國際間の状態を見るにも便利である、上海に學校を造らうと云ふ者は、君が創意か否かは知らないが、君が異常の忍耐と、異常の勉強とを以て、興した所の學校、其學校から出た所の學生が、日清間の政治貿易其他平和を保つ上にも、大に用を爲すの人材となつたと思ふのである、是は全く荒尾君の方である。

異常之忍  
耐之勉強  
養之成人  
材用之有

東亞之先  
覺

未だ君等の學校を造る時には、日本人も或は世界も支那をそれ程に思つて居なかつたが、僅かの間に、支那の問題が全世界に擴つて、毎年米國大統領の下す教書にも、支那の問題のないことはない位に、世界が支那の問題に重きを措て居る、而して世界の四分の一以上の人口を有つて居る、大帝國である、又無限の富を有つて居る、此國が盛んになれば、世界の商業上に此程利益などはないと認めて居る、是に於て商業市場として餘程重きを措て居る、一度平和が破るれば、商業が衰へる故に、門戶開放機會均等と云ふとは如何なる野心を有つて居らうとも、列國が同意せざるを得ない、此は世界の平和を保つに最も有力なる共通の根本主義になつて居る、さう云ふ様に世界が支那に注意する、其支那の最も主要なる咽喉は上海、其上海に於て學校を興したのは、今日まで非常に有効なるのみならず、將來に於て永遠荒尾君の爲したる事業、荒尾君の興したる事業、荒尾君の精神と云ふものは、益、光輝を放つものである、彼の同文會は全く君の衣鉢を繼いで興つたものである。

君は立派な體格を有つて、人望んで畏敬する様な人で、何でも強硬な意志の人の様に記憶に存して居る。

先見扼  
咽喉

同文會之  
淵源

人望而畏  
敬之

(五) 大迫尙敏氏の談

荒尾君の小さい時分に、顔丈は知つて居たが、年の違ふた爲め、親しく話したともなく、又自分は田舎師團を回つて居たから、親しく話す機会もなかつたが、二十三年の頃自分が參謀本部に勤務して居る時、初めて談話を交ふるに至つた、君は直接軍人として支那の内情探索をなさずして、貿易とか商業とか云ふ方面より、着手されたるを以て、大に便利を得られた、今日では支那語を克く知つて居る人も多いが、日清戦争當時は少ないものであつた、君が支那に着眼されたのも、餘程早いもので、日清戦役のみならず、我對清貿易にも偉大なる功績を樹てられた。

余が近衛の大隊長をして居る時に、士官を集め、東洋語學校教師の弟、長氏を師とし、廣部精氏が支那語を幾分解して居られたから、通譯として夜間支那語を學んだ、其時分語學に關する書籍なかりし爲め、士官連中で醜金して、亞細亞言語集なるものを、廣部氏に編ましめた、此時に支那語を學んだ人々が、支那に渡り、旅順其他の見取圖を取りたる爲、後日日清戦役に大に便利を得た、我々の支那語を研究した時分、君は未だ若くて士官生徒であつたから、此仲間には加はらなかつたが、其後軍人としていなく、商人

功績偉大

征清大捷  
之原因  
在君及  
同志門人  
之貢獻  
誠實之人

として研究されたから、大に成功された、實に日清戦役に於て大捷を獲たる重なる原因は、君及其同志門下の人々の働きである。君の性格は、熱心な意思の強い人で、自己の目的を貫徹するの勇氣に至つては、感心であつた、人に依つては君を批評して豪傑の風をする人と悪口する者もあつたが、之は誤りで決して豪傑風を衒ふ様な人ではなかつた、實は誠實なる人であつて、其早世は誠に惜しむべきことである。

(六) 川村景明氏の談

余が荒尾君を知つたのは、十六七年頃、熊本師團の參謀長を勤めて居た時で、君は少尉であつた、其時分の青年士官は、皆短褐粗衣、勇壯活潑なものであつた、君も其一人で其時分から前途有望の士と思ふて居た、君は早くから支那に志して居られて、日清貿易研究所を設立されたに依り、余の伴が近視眼で、身體も丈夫でなく、軍人とする譯に行かなかつたので、又伴自身も異國の土と爲りたいから支那に遣て呉れよと、荐りに願ふ故、研究所に入れた、長い間上海に居て、君の世話になつた、伴に何も得意のものは無かつたが支那語が出来たから、日清戦争には第一軍の通譯官をして御奉公をした、自分

前途有望  
之士



せる際なりし爲め、同地滞在中は、終に君の聲咳に接することが出来なかつたが、君と志を同うして相集れる幾多の志士と交り、略々當時の状況を知り得たるのみならず、君の一生中最も趣味多きは恐らく漢口時代であると思ふから、聊か見聞する所を述べて見よう。

當時漢口に於ける日本人は、樂善堂同人と領事館員のみで、樂善堂は西洋式と支那風の折衷建二層樓で、結構裝飾餘り見苦しからぬ建物であつた、君の不在中此舖を預りしは中野二郎にして、店員日人七八名、清人五六名にて販賣に従事せしも、商賣は餘り振はなかつた、此舖の特色は、店員外なる有志團にして、余の滞留當時身を此團中に寄せたるは、中野二郎、浦敬一、中西正樹、宗方小太郎、山内巖、白井新太郎、高橋謙、石川伍一、山崎憲三郎、片山敏彦、緒方二三、井深彦三郎、井手三郎、荒賀直順、藤島武彦、北御門松二郎、廣岡安太等の諸士であつて、此等諸士は、大抵己が風雲の氣に驅られ、混沌たる支那の状態を以て、非常の功を樹つるに便なりとし、單獨に支那に航せしものが、期せずして茲に相會したのである、故に當時の諸士は皆な一騎當千の士にして實に意氣冲天の概あり、能く艱苦に堪へ、途を分つて廣く四方を跋渉し、四百餘州殆ん

ど有志團足跡の到らざる所なく、各地の風俗人情を察し、山河の險要を踏査し、以て他日の用に供せんとしたのである。

當時此等の事業の困難なる、今日より想像も及ばざる程で、新聞もなく調査の機關もなく、加ふるに支那内地は、殆んど鎖國の状態で、官民共猜疑心強く、外人に對しては何事をも隠蔽せんとするの風があり、且つ開港場を距る數里の處にても、外人の旅行は往往危険を生ずることあるの有様であつて、此等旅行者は、一は調査の便宜よりと、一は多く經費を要せざるよりと、危険豫防の點とより、何れも支那人に假裝したのである、而して其足溜りとして最も重要な地點には、樂善堂の支店、又は出張所を設けた、即ち北京、長沙、重慶等である、余が行つた時漢口に居たのは、中野、白井、山崎、片山數士などで中西、井深二士は君に隨つて日本に歸り、宗方、井手氏等は北京に在り、高橋石川氏等は白川に居たが、余の滞在中漢口に歸來した、又山内氏は上海に、藤島、荒賀諸氏は歸朝中で、浦氏は余の到着前一箇月伊犁に向け出發したので、遂に相見るの機を得なかつた。

其時君は僅に一中尉で、給料とても言ふに足らざるのに、如何にして此等の費用を支へ

節儉力行

たかと云ふに、別に後援者ありしは勿論なれど、主として行商の方法に據つたのである、即ち有志團の士が旅行するには、必ず藥種又は書籍を携帯し、之を賣りながら旅費を支辨し行くのである、尤も此等旅行は極端に質素で一人一日十錢か十五錢で足りたのである、然し元と營利の目的を以て商賣するものに非ざれば、到底收支相償ふの理なく、結局少なからざる損失となつた様である。

品性高潔

余が有志團と交り、心に感せしは其品性の非常に高潔な事であつた、諸士は何れも二十歳より二十六七の青年なるも、曾て花柳の風に染みしものなく、其旅行商賣の際の如きも、之を以て私囊を肥さんとの考を抱きしもの一人もなく、最も質素なる旅費を支辨することが出来れば、夫を以て満足したのである、余は其後幾多の名士に交を結びたれど、終に諸士の如きを見ず、其品性の時流に卓出するや遠し。

眼中無一  
賊魁一  
百感

有志團の旅行中には水滸傳的逸話多し、或時藤島武彦氏が書籍を船に積み旅行したる際、船頭の手引で、一夜數十人の強盜に襲はれ、書籍は盡く陸上に運び去られたことがあつた、當時氏は尙二十歳許りの少年なりしが、膽力人に秀でしかば、敢て騒がず平然として賊魁に見へ、筆談を試みて曰く、公等の状態を見るに、一方の豪傑なり、何ぞ百萬の

豪富を掠めずして、余が如き小賈を劫かすや、余は公等の爲めに之を惜むと、賊魁如何に感じたものか、盗品を再び送り返したと云ふ。

漢口樂善堂は豪傑連集合ゆる、其志望單に支那經路にありたるを以て、研究所設立には多少反對ありしも、支那人側にありては、何れも口を極めて君を讚歎し、中心より推服せるもの、如くであつた、是れ君の從容として迫らず、威重ありて激烈ならず、濃厚にして福氣の溢れたる風采態度の然らしめしもので、君の卓出して風采態度は、日本人間に勢力を得るにも有力なる助となりたるは疑ふべからざれ共、別して之に重を置く支那人を動かすに力があつたのである、後年君が一有志家を以て從來何等の因縁なき臺灣に入るや、忽ちにして支那人間に於ける聲望の、時の總督を凌ぐに至りしもの亦之が爲めである。

容貌動作  
服三活人

余は二十三年九月、一旦歸朝し、熊本、久留米、福岡等に往いたが、丁度君が九州各縣を遊説して程なきこととて、到る處君の評判を聞いた、久留米には林田守隆氏に遇ひしに林田は曰、舉世政論に熱せるの際、偶、君が支那貿易の急務を絶叫して來たから、自分等は恰かも義兵の起來れるが如き感をしたと、林田は筑後西郷と呼ばれた人である、又福

岡なる某有志は、殆んど君に魅せられたるもの、如く、其演説筆記を切抜きて家に藏し、客ある毎に朗讀して歎賞した、後年佐々友房氏余に談りて曰く、荒尾とは熊本にて知り居たれ共、支那より歸りし時は別人の如く、人物を上げ居たりと。

明治廿四年夏、余は日清貿易研究所の囑托を受け、上海に赴き、始めて君と相見るを得、其より三年間同地に留つて居たから、善く君の人と爲りと事業を知ることが出来た、當時研究所には九十餘名の學生あり、全國各府縣より募集したるもので、中には縣費若しくは郡費にて來れる者も少なくなかつた、所長は勿論君で、教頭には猪飼麻二郎、教員は御幡雅文、草場謙次郎、清人桂某、英人アストル等の諸氏である、漢口有志團の山内巖、中西正樹、高橋謙等の諸氏は、設立當初は何れも皆幹旋の勞を取つたが、余が往きし時は、已に辭し去り、唯宗方小太郎氏と片山敏彦氏とが居たのみであつた、又根津一、小山秋作、西村忠一、宗方小太郎の四氏は君を輔佐して學校の幹部を形成して居た、研究所が一種の特色を帯び、其學生が愛國的精神に富みしものは、全く此數氏の献身的感化を受けたものと謂はざるを得ない、根津氏の君に於ける、殆んど兄弟の如く形影相伴へり、此時世人は唯君のみを知り居たれど、裏面に於ては根津氏に負ふ所多く、根津、小山諸

惡衣惡履  
志在  
國家  
士道  
感化  
進後

氏が此學校の爲めに傾注した赤誠は、實に人を動かすものがあつた。

同時代には、君を初め根津、小山、宗方、西村諸氏、何れも無妻であつたが、曾て狹斜の巷に足を入れしことなく、粗食敝衣に甘んじ、心は常に天下國家に在り、談する所は悉く士道を砥礪するの言ならざるはなかつた、是を以て全校九十餘の學生も、自ら其風に習ひ、内地の青年に有勝なる不品行の噂を、曾て耳にしたることなく、淫猥の風盛んなる上海居留民間に、全く別天地を爲して居つた、本來此學校は、其名の示す如く一箇の商業學校なれど幹部の人々の武士的性格は、學生の氣風を感化し、日清戦争の起るに當ては、終に幾多の殉難者を出すに至つたので、寔に尊むべき氣風が満ちて居た。

君は半は上海に留り、半は内地に歸ると云ふ有様で、不在の時は根津氏其代理をして居つた、其上海に在るや訪問の客常に絶えなかつたが、君は如何なる人にも、自ら應接し、特に青年を愛し、諄々として訓諭するを常として居つた、君は校務の傍ら、此等の客に應接し、内地の知友及學生の父母と書簡を往復する等にて、終日忙はしく、夜十二時一時頃迄、事務を執ることが常であつた、然れ共君が最も心を苦しめたのは、實に經濟問題であつて、惜む可し此英雄男兒半世の心血は、此學校の維持の爲めに灑ぎ盡くされた、

英雄男兒  
心血  
半世



英雄心血  
生烈士

廿七年征  
露軍得慶  
島尾武太  
屋神武太  
平策武太  
移山民長  
白建東長  
地方瑞東  
國偉西人  
所見如人  
合符如人  
可謂奇

巨人荒尾精

君は如何なる困難の際にも憂愁の色を顯はせしことなく、肥大なる其體量も減せしを見なかつた、研究所は第一期生八十九名を卒業せしめて閉鎖することゝ爲つたが、卒業生は實地練習の爲め設けられたる商品陳列所に入り練習したものである、後程なく日清戦争となつたが爲め、其内の十餘名は、奮然身を犠へにして國難に盡瘁せんことを誓ひ變装して深く敵地に入り敵情偵察に従ひ、幾多の殉難者を出だせしことは、世人の普く知る所である。

君は學生の卒業後、程なく内地に歸つたが、朝鮮の風雲漸く急ならんとするや、頭山滿氏等と謀り、立洋社の壯士二百餘人を率ひ、朝鮮に侵入する計畫を爲し、已に其準備を整へたが、形勢の變化は、終に此計畫を中止せざるを得ざるに至らしめた、此時の事に付後君が語りし所に據れば、長白山の南北に一國を立てんと志を抱ひて居つた様である。君は炯々たる功名心を有し、且つ之を遂行するに相當なる膽勇、智略、度量を備へて居つた、君には高遠なる道念なく、又宗教心と云ふべき宗教心もなく、死生靈魂等の問題には何等の疑問も趣味も有つて居なかつた、唯現世に一大事業を爲し、英名を後世に傳へんと一念にて、萬事を處理し、夢寐之を忘るゝ能はざるもの、如くであつた、君は

容貌風采  
宛然南洲  
之壯時

大匠用  
心旁人  
不知

俗人を籠罩するの識量もあり、平地に波を起すの機略もあり、其辭は莊重にして善く人を動かし、其容貌風采は人をして坐に西郷南洲の壯時を偲はしめた、余は後に多く當世知名の士を見たるも、風雲兒として英雄漢として終に君の右に出づるものを見なかつた。君は何處迄も世間的の人で、若王子閑居中君を慕ふて同地に集りし青年少年なからざりしが此等の守るべき訓戒として、君が書して與へたる條規中、佛教又は老莊の書を讀むべからずとの一箇條があつた、又或時客に耶蘇教の事を語り、不當の批評を加へしより、其坐に連りし余(余は耶蘇教徒に非ざれ共)が、強く其論を駁撃したるに、君も其時は多く言はなかつたが、翌日に至り昨日は耶教の御説法を承り云々との書面に、ビールを添へ贈り、程なく自ら訪ね來たことがある、又以て君の面目を窺ふ可しである。君は質朴直截なる種類の俊傑に非ずして、名開好の俊傑であつた、それは研究所の財政最も困難にして根津、小山諸友が、粗衣粗食苦心慘憺たる時と雖も、其内地に歸るや、堂々として大臣の様であつた、或時小山氏が今少しく身邊の事を質素にせんことを忠言せしに、是許りは出來ぬとて拒みしと、蓋し如斯虚榮心は君の功名心と相伴ふて離るべからざるものであつた。

巨人荒尾精

或時余君を訪ひしに、偶片岡健吉氏來り相對して談せり、君の堂々として鷹揚なる態度と片岡の質素謙讓なる舉動は、恰かも長官と屬僚の様にありて、異様の感を催ふたのである。

研究所設立の初、農商務省の補助に信頼し、已に各縣にて募りたる學生は陸續上京せる際、右の補助は中止せられたるより、君進退維れ谷り、一夜人定つて自殺せんとせしに、不思議なる哉、臺所に在りたる釜が、異様の響音を發して鳴出したれば、君は忽然感ずる所あり終に自殺を思止まつたといふ、人の一心凝りたる時は、妙なことがあるものなりとは、君の屢人に話したことで、此一事は君の自信心に大なる強味を加へた様である、蓋し君は天の冥助あるものと信じて居た。

(九) 黒瀬義門氏の談

余が大阪師團に中隊長たりし頃、荒尾君は下士官であつたから、餘り多く交際もせず、又同じ中隊に居つたとも短かゝりし爲め、精しくは知らないが、餘程隊務に勤勉な人であつた、性質は敏活豪邁にして、邊幅を飾らず、名古屋生れと云ふも、少しも名古屋人の様に見えない、其姿勢と言ひ、言語と云ひ、鹿兒島人としか見へなかつた、日清戦役

に偉大の戦捷を得たのも、君の力に依ると多大である、又國家の爲め有益なる事業を経營せられた人であるから、成る丈け材料を多く蒐めて故人の真相を傳へたいものである。

(十) 山内巖氏の談

余が荒尾君と識つたのは、君が士官學校時代宗泰院に居た時で、常に君と擊劍を試みたが、君の擊劍は、遺憾なく君の人格を發揮し、小手、胴坏に向はず、渾身の力を以て敵の面のみを狙ひ、其撃方亦非常に鋭かりしかば、余は其時既に君が尋常一般の人に非らずして、有爲の人傑たるを認めた。

君は好んで古英雄の事蹟、其他歴史上の適切なる疑問を提出し、自己の意見を開陳して、他人の見解を徵するを常として居つた、又談古今の聖賢英雄忠臣義士の事に及ぶや、一言一句總て熱誠を以て語り、時としては之に感じて涙を流す程の熱血漢にて、當時意見相投合して、早朝寺庭に擊劍を試み、夕刻卓を圍んで議論を圍はしたる連中は、少くも十名以上であつた。

交際振りは、頗る嚴正にして、時間、約束等を嚴守し、又人の不善を假借する能はず、其面前にて詰責したことも稀れならざりしが、詰責されし者も、之を恨むことなく、却

至誠接人

巨人荒尾精

二四〇

つて心よく感ずるに至つたのは、君が誠心誠意の然らしむる所であつたのである。君の士官學校時代は、君の純粹なる眞面目を發揮せる時代にて、研究所設立後日清戰役迄東京大阪等にて種々奔走を爲せし頃は、必要上己むを得ず、多少の權數を用ひし様であつたが、京都退隱時代は大に克己の工夫に力を致し、再び本來の純粹なる性行に立戻りたるやうに感ぜられた。

理解力

君の學問は深き素養ありしと云ふこと出來がないが、理解力強大にして、其れが爲め事物を判斷するに極めて切實なる、斷案を下す力を有つて居つた。

衆生緣

君は非常に衆生緣の厚かつた人で、一種の溫味ある引力を有し、今少しく年を假し研究と修養とを積まば、偉大なる人物となりしに相違なかつたのに、中道にして逝き、其天稟の偉才を發揮することの出來なかつたのは、寔に邦家の爲め惜しむべしである。

感化力

君は能辯の人に非らざりしも、達辯の人にて、言々力あり、嚴正にして而かも溫和なる君の舉動態度は、大に其辯を助け、人を魅し人を感動せしむるの力を有つて居た、時に不合理の言なきに非らざるも猶ほ聞く者をして感心せしめた、君には多くの有爲の人士が感化せられしのみならず、宿屋の主婦車夫馬丁の微賤に至る迄、其徳を敬慕したのである。

氣宇大

器宇の何んとなく大なりしことは、東洋學問の賜ならん、ナポレオンの如く切迫したる所なく、自ら悠々たる所があつた。

志望大

君の爲したる事業に就ては、批評すべき點あれども、君は死に到る迄自己の爲にせずして、總て國家の爲め天下の爲めなる奉公心より働いたのは、大人物の大人物たる所以にして、敬服の外はない、若し缺點と云へば名譽心の非常に強大であつたことであるが、是れは年壯にして志望大なる君として、蓋し免かれない所であらう。

抱負大

大抵の人は、君に遇へば同化さるゝに至る、是れ生來大人物たるの素質を有つて居たので、天品と云ふて宜からう、随分失敗蹉跎して殆んど其日の生活に困するの窮境に在ても、悠然として毫も之を辭色に顯はさざりしは、其抱負の大なるを窺ふ可きである。

(十一) 前田正名氏の談

荒尾君と余とは、精神常に相通して居つた、東洋の事情に精通すると此人の右に出づるものなしと信じ、東洋の事に關し、國家は此人に委ぬるも敢て差支ないと思つて居た、明治廿二三年の頃、農商務省で各局の官吏を集め、君を請して支那東洋事情の演説を請

巨人荒尾精

二四一

政府聘  
處士爲  
演說以  
君爲感  
矢

ふたどがあつたが、當時在野の士を政府に招聘し演説を請ふが如きは、全く絶無にして君を以て嚆矢となす、而して余微力にして君に充分なる助力を爲し得なかつたのは、今に遺憾とする所である、君が研究所設立の爲め、各地を遊説するや、地方廳に於て或は山師ならざるやと疑ひ、問合せ來る向もありしが、君が熱誠の人を感せしむる所、衆をして眞に愛國の士たるを感せしむるに至つた。

屢思ひ浮べ人にも語る所であるが、彼の日清、日露の兩役に於ける君の功績の偉大なりしは言はずもがな、余をして特に感を深ふせしむるは、學生を薰陶し支那の事情を研究せしめ、以て兩役に貢献せしめしむるにて、其功は實に砲烟彈雨の間に出入せし將校の能く及ぶ所でないのである、彼の研究所出身者の行動は、實に君の精神の發露せしものにして、此等の人を世に表彰せずして止むは遺憾の次第で、宜しく此等の志士を祭り、其功績を不朽に傳へん爲め招魂社を建設するの必要を認むるのである。

(十二) 福島安正氏の談

自分は君とは親しく交際はして居たもの、日本に居ると少なりし爲め、君の事業に就き能く記憶して居らぬ、それで自分は間違たり、不安心な事を御話するは死者に對す

兩役實  
之功  
在戰  
之上

忘己利  
告舉全  
身以實  
獻國家

る禮でないと思ふ故に、結論だけを御話する、即ち唯一言自分に於て決して、間違ひないと確信するを言ふて置く。  
荒尾君は自己の利害を度外にし、顧慮するもなく、全身全力を献じて、國家の爲め盡くした人である。

(十三) 小山秋作氏の談

根津君は己を空ふして荒尾君の事業を助けられた、本當の相談相手は根津君であつた、根津君は常に表面に立つことなく、陰にありて荒尾君の短所を補ひ、其間に在りて毫も自ら名を博せんとするが如きことがなかつた、兎角事業が苦境に陥る時には、双方とも紛紜の起り勝ちのものなるに、終始一貫荒尾君を助けられたのは、誠に感服の外はない、大に謝せねばならんと思ふ、獨り根津君のみならず、荒尾君の仲間同志は、互に激論杯すること會てなかつた、是れ畢竟總ての人が自己を空ふし、専心邦家の爲め事に従つたからである、故に他の仲間では激論すべき等の事柄でも、常に談笑の間に爲したのであつた。

同志之誠

空己以  
奉國家

研究所の創立に當り、君は政府の補助金を財源として計畫し、全國を遊説して學生を集

苦心操勞

めたるに、農相交渉の爲め、補助金を得る能はざるに至りしかば、一時苦境に陥り、進退谷まりしも、生徒の出金と根津氏や余等の旅費及手當迄をも、事業費に投じ、尙ほ不足の分は、川上將軍より出金を請ひ、遂に君の不屈不撓の精神により、活路を開くに至つた、其の上海到着後も常に資金に缺乏したれば、余等は食料其他一切の費用を、一箇月六圓にて支辨するの有様で、甚しきは余が家兄より士官學校卒業の際與へられし銀時計を、三回も典質した位であつた、然るに此窮境を生徒等に知らしむれば、不安の念を生ずるのみならず延て瓦解の悲運を招くやも知れざるを以て、飽く迄有力なる後援あることを示すの必要あり、其苦しみ一方でなかつた、當時毎月の拂は千二百圓で、冬季に至り冬服を生徒に支給する時分には一萬圓近くも拂つたともあつた、常に金銭に缺乏せる爲め、生徒等に支給する食物も、粗末であつたが、幸に教職員の誠心誠意で教鞭を執られた爲め、生徒等も之に感激し、あるべき筈の不平も至つて尠なかつたが、中には堪へ切れずして中途退學せしもあり、結局八十九名を卒業せしめた、君は其間に於て資金調達の道を講ずる爲め、内地に歸りて奔走したるが、時々内地よりする君の手紙に接する毎に、上海に於ける苦しみを感めて居た、以上は廿四五年頃に最も苦境に陥いつた

誠心誠意

逆境

時代のとである。

廿六年川上大將の來滬を機として、卒業式を挙げ、其より實踐部を起す爲め、七間に九間の二階建の洋館を英人より借り、余の擔當の下に、貨物を陳列し、役員及卒業生は支那風の長屋に住して、日々陳列場へ通勤したるが、事務の分擔等の編成は、理想通りで至極好況を呈し、西洋人も來れば支那人も來り、今の三越よりも猶ほ雜鬧する位の有様であつて、一日の賣上高千五六百圓に上つたともあつた、客の方でも店の性質を知りて、値切るともなかつた然し試賣場と云ふ立場より、商賣せる爲め、賣れない品は、全く賣れず、其の爲め破産した商店もあつた、斯く實踐を繼續しつゝある間に日清戦争が始まりかけ、間もなく領事等は引上げ、陸軍省及荒尾君よりの詳細の通知に接したるを以て、之を生徒に讀み聞かせ、暗號電報を定めて余は一旦歸朝するに至つた。

順境

逆境

偉人知  
偉人

川上大將は君を非常に信任し、終始君を提擧し扶掖せられた、君が少中尉時代に於ても大將が他の將官連と談話中、君の來るあらば、席を避けしめ、以て君と面談し、又大將が君と對談中に他の將軍の來るあるも、君との談を終るに非ざれば、面會せざりし位であつた、又廿四年の末研究所が財政に苦しむと甚しかりしとき、一日余は君の依頼

使哉々々

傳談可

昔時生  
大人物  
今堂不  
生巨人

巨人荒尾緒  
二四六  
を受け大將を訪ふて、助勢を交渉したるに、生憎好方便なく急を救ふ能はざる旨を告げられたる爲め、非常に失望して邸を辭せんとするや、大將余を呼止めて曰く、明日更に來るべしと、余は曰く、御融通の道なければ再訪の要なしとて辭し去りたり、然るに翌日に至り大將より使を以て來訪を促がされたるに依り、直に至れば大將は曰く、邸宅を擔保として、四千圓を調達したり、之を以て荒尾の急を救へとのことであつた、如何に大將が君を信じ君の事業を助けられたかの一端を窺ふに足るのである。

(十三) 三宅雄二郎氏の談

君と相識るに至りしは研究所創立當時よりなるを以て、餘り詳などは知らない、君は寡言にして何んとなく人を引付ける所があつた、名古屋の地は、昔時信長秀吉の如き大人物を出したが、今日は振はない、前臺灣民政長官の水野氏や、今の長官大島氏等が出て居るが、人物が小さい、君は此等の人々よりも輪廓が大きく、もつと人物が大きく出来て居たと思ふ、昔し大人物の出た地の人であるから、其影響を受けたのかも知れぬ、君は計畫あり之を行ふに熱心であつた、能くわからぬが西郷流で、大きくなる機會に遭遇すれば大きくなるが出来るが、然らざれば無爲にして化するかとも思はれる、半途にして充

其人既大  
其事亦大

興士卒  
快飲得  
意可想  
荒爾對  
醉客大  
品可飲  
正行方  
權化佛

分天稟を發揮せず亡くなつたけれども、知人等に深く印象を與へたのによりて考ふれば、大なる器らしかつた、漠然ではあるが人に何等かの感じを残して居る、西郷の様に大きく伸びる事は出来なかつたとしても、普通の人の如く醒醒たることなく、遠大の事業を志して居たに相違ない、二十七八年役に多くの通譯官を出して、大なる仕事の爲めに、研究所を設けたのであつたらう、兎に角君は大きくやらうとし、又大きく人を動かさうとした人である。

(十四) 白川一來氏の談

君は十四五年頃敝院(宗泰院)に來り自炊生活をせられた、食物等極めて質素で何んでも好き嫌なく食して居つた、豚と豆腐に醬油をかけたのが好物であつた、誰人にも平等に交際し、兵卒杯の來る時は、豚や酒を以て之を饗し、其後で餅を御馳走するを常とし、酒は冷で坐の中央に甕を据へ、杓子にて茶碗に汲んで共に飲を樂しむとし、又親切で難儀の人を救ひ、常に莞爾として人に接し、人が酒に酔ふて亂暴するも怒る如きことなく笑つて居られ、實に腹の大きい人で、又寡言の人であつた、品行方正、まるで禪坊主の如く、否な君自身が既に神や佛同様になつていた、夜は大抵十二時頃就寝し、讀書しては

大志不遂、君終而逝矣

先見之明

財散則民散、財聚則民聚、財散則國弱、財聚則國強、財散則國危、財聚則國安、財散則國亂、財聚則國治、財散則國衰、財聚則國盛、財散則國窮、財聚則國富、財散則國弱、財聚則國強、財散則國危、財聚則國安、財散則國亂、財聚則國治、財散則國衰、財聚則國盛、財散則國窮、財聚則國富

巨人荒尾精

二四八

冥想し、毎夜坐禪の稽古をせられた、朝は未明に起き寒暑の別なく、墓所の椎木を相手に木刀を揮ひ、又日曜祭日には友人等と擊剣を試みられた、君曾て余に向つて曰く、人は皆少尉になれば其祝を爲すが、自分は國家の爲め大事業を爲したる時、始めて祝するのだと。

(十五) 森清右衛門氏の談

荒尾君は、實に先見の明ある人であつた、君曾て余に向つて曰く、日清戦争後清國は借金支拂後の政策として、鐵道政策を採ることが必要であると思ふ、李鴻章も必ず此政策を取るに相違なく、列強も鐵道布設權に競争すべし、而して交通機關の普及するに至らば、支那の形勢は一變する、君は土木に關係するから、今より此方面に着眼するが可いと、成程今日になつて見ると、君の言ふ如くなつたのである、又清國人は清朝建國の初より財散すれば民散すと云ふことを教へられて居る、故に清國人は金錢以外に何物もなく、何よりも金を作らぬばならぬ様に教へられて居る、故に彼等に對するには、外交にても商業にても、總て此考を以て懸引せねば必ず失敗すると云ふて居られた。君は豪傑風に見えたから、實業や經濟の頭腦に乏しい様に想つて居た人もあつたらうが

抱負經濟之大策

經濟之眼、光服之豪商

日本興業會社之前身

大度如南洲

決してそうでない、實は大なる經濟的頭腦の人であつて、君の目的は支那を我國第一の得意とし、經濟的に開發する積りであつた、君が晩年臺灣に行かれたのも、勿論善後の大業に就き、抱負があつたに相違ないが、樟腦事業の經營も、僅に一の重なる目的であつたと思ふ、彼の頭の堅く容易に他の説に雷同せざる江州の豪商十數名も、君の經濟的卓見に感服して、遂に臺灣にて樟腦事業を起すことを賛同したが、是は全く君の發意であつた、余は江州人に非らざるも君の經濟的眼光に推服した一人で、共に樟腦事業に加はり其社長に選ばれた、後の日本興業會社の前身である。一言にして君の人物を評せんか、大西郷が君の如き人物であつたらうと思はれる、齷齪せず腹の極めて大なる人であつた、君が存命せば日清間も、餘程今日より融和し、圓滿に進むであらうと思ふ。

第三章 逸事逸話

君の大阪鎮臺に在るや、眞性コレラに罹り避病院に送らる、當時避病院に送らるゝ者生還すること殆んど稀なるに、君は療養數日にして全快したり、君を治療せし醫官某曰く、君

巨人荒尾精

二四九

體格力壯  
氣力旺盛

英姿颯爽

の全快するを得しは全く體格の壯健なると氣力の旺盛なるが爲めなりしと(根津一氏談)  
明治十五年冬士官學校の卒業後撮影せし寫眞は外套を被ふり肩を怒らし劍を按せり、英姿の風爽たるを見るこれ恒吉少將(忠道)に贈りたるもの、其裏に題して曰く、

古人曰以義制事以禮制心。驚雖恐一世履行之。

舟中結義

明治二十七年の頃、君頭山滿佐々友房と一日舟を墨江に浮べ、痛飲快談の後、兄弟の約を結ぶ、而かも誰れを以て兄とすべきかに就て議論あり、年齢よりせば佐々頭山荒尾の順序なるも、君服せしめて曰く佐々君は三百頭願中の一人にして、頭山君は石炭掘の親分なり、而して余は支那を吞下せんとする者なれば、事業上の優劣よりして、余は長兄たらざる可からずと三人手を拍ちて大笑す。(白岩龍平氏談)

異相

君一日武昌の黃鶴樓に登る觀相者あり、君の袂を扣へ熟視して曰く停府豐滿、公は王者の相あり、鳳眼波長くして貴自ら成る。(緒方二三氏談)

石龍子相  
三豪傑

石龍子觀相を以て鳴る、君曾て佐々友房頭山滿と相伴ふて石龍子に至る、三子皆一世の雄霸氣自から眉宇に溢る、石龍子熟視して曰く右は日本の豪傑、中は朝鮮の豪傑、左は亞細亞の豪傑なりと、時に佐々右に、頭山中央に、而して君は左方に坐せりと云ふ。(同)

服唐衣、  
戴孔明冠

不爲疾  
冒速色

君の清國に在るや好んで唐衣を服し、孔明冠を戴き、夏時は羽扇を持す、奇偉の風、痛く清人の注目する所となり、非凡の偉人として衆俗敬虔の念を深うす。(同)  
君寛厚の長者曾て疾言速色せず、車夫婢僕に至るまで一言半句の叱咤を加へしを見ず、鶴然として座上春常に滿つ。(同)

笑談服  
諸豪

君の清國にあるや、土曜日の定例會議後は、豚の鋤焼に紹興酒を酌み交はして、同志週日の積勞を慰するを常とす、酒酣に耳漸く熱せば、議論沸騰し果ては組打に杯盤を蹴飛ばすなど、狼籍することあるも、君は曾て辭色を動かさず、徐に兩雄を宥めて曰く、何れも議論の歸著點は同じちやと、流石の豪傑連も此一語に拍子抜けして、風雲忽ち收まるを例とす。(同)

包容衆  
論

宏量如  
海人能感

君は何に限らず、苟くも自説を吐かず、常に衆論を調和して之れを包容せり。(同)  
君は輪廓大にして、宏量海の如く、且つ熱誠事を謀るの風あり、事の成ると成らざるとは寧ろ問ふ所に非ざるが如し、而かも其感化力の大なる天稟に出で、一たび君に接するものは何人も欽仰の念を起さるもの莫かりき。(同)

私淑

君は常に曾文正公西郷南洲に私淑し、寡慾にして駐在武官時代の俸給手當の如きは、舉げ



恩人

て之れを同志に投げ出し、其中より小使錢を仰ぐ始末なりし。(同)  
川上將軍は君の忘るべからざる恩人にして松方侯爵も絶えず君の爲めに斡旋の勞を取られ  
たり。(同)

嗜好

君は何等の嗜好と性癖なかりし、唯だ酒間古今の英雄を品臨し、興到れば、紫電一閃居合  
の技を演じ、以て英氣を養ふ。(同)

叔姪

君の支那に在る、岸田吟香と相得て遂に叔姪の誼を結ぶ往復の書にも叔姪の語を用ひ、通  
商總覽第二編の跋文にも吟香は我姪荒尾精云々と特書せるを見る、君の支那事業に於ける  
吟香の援助に依る多大なりしと。(同)

參拜

君の京都に寓するや、建仁寺默雷和尚に就き參禪す、余一日君を訪ひ悟道の如何を問ひし  
に微笑しつゝ曰く、僕の方が理窟が善き様なれども、言下に痛棒を喰ふには聊か閉口せざ  
るを得ずと。(同)

濃情

二十七年後余が陳列所の帳簿を持って京都に至り先生を訪問したる時、土産として松菌豚  
のラカン等を携へたるに、先生自から之れを料理して膳に上し共に酒杯を傾けたり、其温  
乎たる態度は師弟の關係よりも、寧ろ父子の親あるが如し、此の如きは獨り余に對しての

大量

みならず他門下生に對しても皆な然らざるなし。(三谷末次郎氏談)

二十八年の暮一夕酔ふて先生の門を叩き、其説を聴く、睡氣切りに至り覺えず坐眠す、程  
經て目覺めたるに先生は端然として坐を崩さず、余を見てエヘンと咳して笑はる、若し常  
人なりせば必ず怒りて直ちに訓誡を加ふる所なるに、先生は唯莞爾たるのみ、此の如きは  
自ら勉めてせらるゝに非らず、天性温雅にして大量の人たればなり。(同)

訓誡

先生は尋常人が其子弟に向つて訓誡するが如きことなく、談話動作の裡に、無限なる訓誡  
を與へらる。(同)

鑑識

先生の人を観る全く人の意表に出でたり、常に曰く人を観るに平生相接する時は却つて觀  
難し、瑕を抜き去つて觀る時は能く顯はると。(同)

篤行

君常に觀音經の軸を懐にす、彼の木曾山中にて猪と見誤られ狙撃せられたる時に危き一命  
を拾ひ得たるも此の一軸の庇蔭なりとて、其後は一層之れを信せられたり。(白川一來氏談)  
二十二年五月宗泰院改築に着手し十月竣工するや、君偶來訪せられ、曰く自分共が墨を惡  
しくしたからとて、本堂の墨四十枚を寄附せらる、信徒等大に其篤行に感じ、益々尊敬を  
加へたり。(同)

君平素立案若しくは計畫を立てんと欲するや、暗室に端座して、數時間の考慮を費し、遺漏なく順序方法等を組織して之れを記し、一旦其立案せし事を遂行せんとするや、迅雷耳を掩ふの暇なく、直ちに猛進す、而して最も人と異なりしは、頭腦の極めて數理的思慮に富みしにあり。(山内巖氏談)

長崎の旅館縁屋の主婦非常に君に信服し、君の長崎を過ぎるや、必ず種々の斡旋を爲し、其研究所を設立し生徒を率ゐて上海に赴きし時の如き、主婦は態々上海迄君を見送れり、主婦常に曰く、荒尾さんはあらくならず、貴下等も出来るだけ御助けなさい、自分も金が出来たら加勢しますと、主婦は毎年暮に必ず四斗入の清酒數樽を上海なる君に贈り、君の正月の飲料に供するを例とせり、又た主婦は君を大黒さんと呼べり、常に君が笑顔なりしが爲めなり。(同)

君最も青年を愛し、常に之を集めて酒を飲むを無上の樂となし、酔へば則ち居合を抜き興到ればオヤセセドウドウト云ふ歌を面白可笑しく謠ふて人の願を解きしと。(同)  
君の幼時、漁村にて漁夫の子弟等と衝突し、君の一行は之れに襲撃され這々の體にて逃れ去りたるも、君は從容として怒り狂ふ彼等を諄々として説破し、微傷たも受けずして無事

に歸來せり、如何に君が幼時より威服の力を有せしかを知るに足る。(菅井誠美氏談)  
學校時代及其後も君は木綿の白衣を着し、羽織は九一の紋を附せり、支那に赴きし後は多少身邊を飾るの必要あるを以て、絹布を着用するに至れり。(小山秋作氏談)

#### 第四章 東方齋と著者

##### 一 相遇の奇縁

明治二十八年三月四日、余は新たに海軍學校を辭し、東都に遊學せんとするや、途偶、京都を過ぎり、夙に風采を想望せる、君が鴨東鹿ヶ谷に高臥せるを聞き、其聲咳に接せんと欲し、相國寺僧堂に參禪しつゝありし、小林全信師に就て、紹介狀を得、潜庵遺稿を携へて若王子山麓に君の閑居を訪ひ、志を東方に抱きて海軍を辭し、之より東上専ら政治經濟の學を修め、徐に爲すあらんと欲する所以を語り、教を請ひたるに、君は一見舊の如く、大に余の志を賛して曰く、吾れ士官學校生徒たるの日より、渡清の念止む能はざりしも、容れられずして業を終へ、居ること三年、漸く其目的を達するを得たるに反し、君は幸に早く籠中を脱するを得たり、寔に邦家の爲め慶賀する所なり、須らく翼を鼓して萬里鵬搏を

試む可し、然れども物に本末あり、事に先後あり、君既に志を決し東方の興隆を以て自任す、即ち立志の根本義に悟入し、男兒世に處する所以の道を窮め、略、東方の大勢に通ずるを急務とす、然る後必要の政治經濟を學び、以て體用を兩全し國士の素養を積む可きなり余も暫らく當山に隱遯して道を修め、前途の大計を按じ、旁ら興亞學院の如きものを設けて、天下の俊才と共に相研鑽するの意あり、現に高橋、頭山等に協議中なり、君の志余に同じ、願くは相携へて東方の變理に任せられよと、年少の余を麾いて、懇に宇内の趨勢より、東方の現状に説き及び、而して丈夫の此間に處する所以をも詳述せられ、且つ東上を延期して、余と共に起臥せば如何と、余も亦學問の時弊に鑑み、志立たず道明かならずして、漫に泰西形而下の學を修むるの本末を顛倒せるを思ひ、斷然君の教に従ふに決し、翌日君の幹旋によりて、隣家なる川越某の二階に僦居し、日夕君に親炙して、指導砥礪を受けたるが、大學の三綱領八條目の如き、靜坐默思して最も工夫を力めしめられたり、前に書を飛ばして、三四友人を招集したるに、四月初に至り木下國明信山より來る、乃ち君の居を距る北數町なる鹿ヶ谷に一屋を僦し、共に之に移り住む、君之を東方齋別院と命名し曾國藩の家訓を經とし、君が獨得の見を緯とし、修身課程を定め、研究の規律を設け、

同好の在洛學生高宮謙、田野橋次、立花凜太郎、佐々木頼母等とも語らひ、毎日君に就き心學及支那語の研究をなせり、二十四貫に餘る大兵肥滿の君が阿々の聲を其硬勁なる舌端に依つて發音する所、正に是れ一場の喜劇にして、相顧み覺えず失笑を禁じ得ざりしなり、五月に入り宮坂九郎、曾根原千代三、大原信亦來り加はる、次で月の中旬更に若王子山中の延年臺に移居せり。

修身課程

主敬、 威儀要<sub>三</sub>齊肅、言語要<sub>三</sub>簡明、行步要<sub>三</sub>靜定、行爲要<sub>三</sub>丁重、正<sub>三</sub>視聽言動、思之不<sub>レ</sub>中、節者<sub>二</sub>而要<sub>一</sub>身心須臾至<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>離、良知、此是化<sub>レ</sub>凡入<sub>レ</sub>聖之正路、出入之活機、換骨之靈方、願神之妙術也、若不<sub>三</sub>於<sub>レ</sub>此下<sub>レ</sub>手、則或人<sub>レ</sub>霸入<sub>レ</sub>僞、或歸<sub>レ</sub>仙歸<sub>レ</sub>佛、學者宜<sub>三</sub>體察<sub>一</sub>。

靜坐、 毎日不<sub>レ</sub>拘<sub>三</sub>何時<sub>一</sub>靜坐一回、正位凝<sub>レ</sub>命、如<sub>三</sub>鼎之鎮、體驗靜極生<sub>三</sub>一陽來復之仁心<sub>一</sub>、早起、 黎明即起。

養氣、 刻々留<sub>レ</sub>心須<sub>三</sub>吞<sub>三</sub>吐四海<sub>一</sub>、

學經、 毎日不<sub>レ</sub>間斷、

讀史、 毎日不<sub>レ</sub>下<sub>三</sub>二十葉<sub>一</sub>、

寫日記、毎日所感及身過口過心過、以楷書皆記書、

右掲吾人切磋之要目、事未來不可邀、事已往不可追、學必諸躬、問必諸心、以須勤現  
在也、

若王子は、洛東の名區にして、其飛瀑は夏季に宜しく、其楓葉は秋時に佳、又櫻花あり風  
光頗る閑雅、幽邃、筈を曳くもの四時絶えざるも、臺は幸に山の中腹に倚り、池塘の上に  
在りて、俗客の到る稀なり、若し夫れ日暮るれば四隣寂寥、唯松濤の颯々たるを聞くのみ、  
間もなく前田清哉、達藤留吉來泊し、田鍋、白岩等の諸士亦之に假寓し、同勢一時十名に上  
りしことあり、兩三の鍋釜十數の椀具、所謂君は溪流を汲み我は薪を拾ふて、自炊生活を  
爲し、櫃底時に空を告ぐれば、燒芋に肚を飽かしむ、或は夜半戸外に出で、天を仰いで高  
吟するあり、未明に山中を馳て、麋鹿を侶とするあり、徹宵讀書するあり、相戒め相規し  
て、刻苦勉勵須臾も怠らず、余句あり以て當時の風尙と志氣の旺盛とを髣髴せしむ。

結盟壯士鹿溪中。

意氣投來昆季同。

短褐携瓢探景勝、

終宵剪燭罵英雄、

乾坤有待書生策、

廊廟無聞宰相功。

千歲一機何日是、

片帆破浪五洲風。

而して君は余等の仰いで以て秦斗とせし所、當時恰かも大本營は廣島より京都に遷り、大  
纛を駐めさせらるゝあり、加ふるに勸業博覽會の舉あり、洛中洛外の雜聞空前絶後にして、  
君の閑居を叩く朝野の名士、日に跡を絶たず、君が同志及門下の士の來り訪ふ者頗る多  
く、而して我梁山泊も亦常に友人の寄寓する者數名、夏季に至つて海軍舊同窓の來往甚し  
く、梁山泊亦た盛大を極めたり、斯くて三月より約半ヶ年日夕君に親炙して、略々大勢に  
通じたるを以て、一旦親しく大陸に遊び、其風土に接して豪宕の氣を養はんと欲し、君に  
請ふて渡航の機を得るに力めしが、十月二十六日に至り君余を招きて曰、君等の志を達す  
るの秋到れり、余曩に君等を東京に推選したるに、頃日返翰あり君等を上京せしむべしと  
の事なりと、余輒ち宮坂、曾根原の二友と、其夕刻上京の途に就き、十一月四日陸軍省の  
關係を以て臺灣行に決し、十日歸洛君に謁して恩を謝し、南溟萬里の舟に上りぬ、余等去  
つて同志の徒相前後して山を出で茲に延年臺の閉鎖を見るに至る。

君と余との關係斯の如きのみ、而かも相遇ふて一見肺肝を披瀝し、忽ちにして起居を共に  
するに至れるは、君が青年を愛するの性癖に出づるものなる可しと雖も、亦以て相遇の奇

縁と謂はざるべからず、鹿ヶ谷梁山泊は、實に君が一夕の傾談に其端を發したるものにして、起居を共にする僅に一年に滿たざりしも、余が君に受けし感化は、頗る大なるものあり、當年を回顧すれば、猶ほ其狀況の眼前に髣髴たるを覺ゆ、本春韓京より東上の途、京都を過ぎり若王子に到る、風光依然故の如きも、人事幾變遷して復た舊盟を討ぬるに由なし、乃ち社前の旗亭川越に憩ひ、主婦と會して當年を語る、會遊の跡歴々心頭に浮び、感慨無量なり、君の舊居は爾來四代の持主を更め、門外寂寥人聲なく、庭前の藤樹一株古色を帯びて蜿蜒屋背を掩ひ、瀟洒なる内門、庭中の奇石、さては彼の堂、此の櫓悉く是れ當年を語らざるなし、更に山を登り奮延年臺邊を逍遙するに、既に毀たれて年久しきが如く墟址に草木の繁茂せるを見るのみ、俯仰豈に多少の感慨なからん、乃ち君の舊居延年臺の墟址、及君建つる所九烈士の碑を撮影し、沈思に耽りつゝ薄暮漸く下山せり、時を經る僅に十四年、人事の變亦急ならずや。

感慨無量

九烈士之碑

二 余の見たる東方齋

三宅雪嶺、曾て君を以て未成長の豪傑となし、其志を伸ぶる能はずして早生せられたるを

哀悼せり。

日南福本氏は、君を評し英雄の資を抱いて、英雄の運命を缺けるものとせり。

余も亦思ふ、君は所謂未成長の英雄にして、即ち英雄の資あつて英雄の運命を缺けるものなりと。

著者之東方齋評

明治太平の聖世に人と爲り、三十有八の短生涯、其間に偉業を建つるが如きは不可能なり、其間に徳器を大成するが如きも亦不可能なり、君の事業は悉く未來に存し、君の人格は唯未來の修養を俟ちしなり、君の若王子山居時代は、則ち君が前途の經綸と克己の工夫に専念せし時代にして、君の將來は山を出でたるの後に在りしなり、看よ、戦後一たび清國に航するや、内外貴紳争ふて君に聞き、一たび臺灣に渡るや、一布衣を以て其勢望忽ち全臺を掩ふに至れるを、君の進境以て察すべからずや、經綸の策既に胸中に成り、人格亦大に圓熟して、此より將に大に雄飛を試みんとするに當り、旻天何等の無情ぞ、忽焉として其生を奪ふ、余が君に冠して未成長の英雄と云ふ所以、之が爲めなり、英雄の資あつて英雄の運命を缺くと云ふ所以、之が爲めなり、是れ世人の君を惜しみ余の最も君を惜しむ所以なり。

## 附 殉難十二烈士略傳

### 九烈士

九烈士傳

日清戦役の發端に於ける、九烈士功績の偉大なるは、常人の與り知るに及ばざるものあり、所謂赫々の功無しと雖ども、其隱微の間に於て國家に貢獻せし勳功は、遙に斬將奪旗の功に勝るものあり、和成るの後、朝廷其功を録し叙勳賜金の事あり、且つ其英靈を靖國神社に合祀し、歳時典祭千秋に廟食せしむ、死して餘榮ありと謂ふ可し、然れども諸士轍軻零丁滿腔の經綸を施す能はず、大志を齎して一朝難に殉するに至つては、余豈に之を悲衰悼惜せざるを得んや、是れ余の東方齊の傳後に附傳し、永く世に表彰せんと欲する所以なり、九烈士を誰とかする、曰く山崎羔三郎、曰く鐘崎三郎、曰く藤崎秀、曰く藤島武彦、曰く大熊鵬、曰く猪田正吉、曰く楠内友次郎、曰く福原林平、曰く石川伍一是なり。

### 一 山崎羔三郎傳

山崎羔三郎傳

君は筑前國鞍手郡山口村の人、舊福岡藩士白水清八の第三子にして、出で、山崎氏を襲ぐ、幼にして双親を喪ひ、祖母によりて保育せられ、福岡中學、鞍手學校藤雲館等に學び、又漢籍を海妻某筒井某に學ぶ、人となり沈毅豪邁、氣宇瀾達、夙に四方の志を懷き、廣く天下の士と交る。

此時に當り、朝野の政客内黨争を事とし、敢て東方の大計を顧みる者なし、君深く之を慨嘆し、其東京にあるやハットン氏に就て英語を學ぶの餘暇、都下の名士論客を訪ふて東方政策の急を説く、君が荒尾氏に邂逅して、其知遇を得るに至りしも、實に其際に在りしなり。

東方政策

君東洋の形勢轉た危急なるを觀、他日必ず爆發の機あるを察し、先づ清國に根據地を定め、我國人をして清國の地理、人情、風俗を考察せしめ、平時は殖民及び貿易の業に當たらしむるときは、一舉兩得の良策なるを以て、遂に渡清の志を決するに至る。

是に於て有爲の青年を招かんが爲め、百方奔走し僅かに十餘名の同志を得たるも、經費に支障を生じ、屢々謀りて屢々破れしかば、暫く奈良縣に至りて英學會を創立し、學生を教授し時機の至るを待つ、幾くもなくして、歸縣して家兄及び縣内有力の士に謀りしも、終

招有爲青年

に賛同を得る能はず、君依て断然同志の士と共に渡清するに至れり、時に明治二十一年九月三十日なり、發するに臨み國風一首を咏す。

蚊やり火の身は鋸木屑コウソクとなるとても

國の爲めには何か惜しまむ

獻身報國  
之誠意

以て其獻身報國の誠意を窺ふるに足る。

豪語強  
人意

君の清國に至るや、荒尾氏と共に漢口に在り、辨髮漸く長く、言語も亦熟するに至りしかば、遂に孤劍飄然内地探檢の途に上りぬ、將に發せんとするや、諸友を顧みて曰く、斗の如き膽と鐵の如き脚とは、吾財産なり、而して今や此新しき扮装と三寸不爛の舌とあり、前途何の難きことかあらん、諸君幸に意を安んせよと、これより君は常致誠由子羔と稱し藥商となり醫者となり、或は賣卜者となり、甚しきは乞食となりて山野に露宿し飲食を絶つこと數日に及ぶことあり、或は清吏に逮捕せられ札問を受けしことあり、其間雲南貴州の蠻地を探檢し、瘴癘の境に出入して備さに辛酸を嘗め、不撓不屈能く難に耐へ、四百餘州の大、君の足跡を印せざる所僅かに數省あるのみ、斯くて在清前後七年、語學に熟達し、風俗を知悉する、同志中多く其匹を見ず、明治二十三年南部地方探檢の爲め漢口を發する

四百餘州  
不印足  
跡僅數  
者

寄家兄  
書

前、家兄に寄せたる一書は、最も君が意氣の壯と抱負の大とを見るべし。

去る十一月漢口より、鎮口及び揚州の旅行中無事、甚だ愉快の旅行仕、一昨二十九日歸堂仕候、途中別に支那人に見顯はさるゝ事無之、拙弟の姓名は常致誠字子羔と稱し候、住所は或は福建人と曰ひ、或は廣東人と呼べり、却說拙弟等の事業も、實に至難至艱の業にして、前古未だ有らざる大事を圖りたること故、非常の辛苦艱難は甘んじて受くる覺悟に候得共、兎角其端緒に就くこと甚だ困難にして、一進一退未だ望を付ける場合に立至らず、誠に焦心至極皆々千思萬慮の淵に沈み居候、拙弟豫て心中に決する所あり到底我が同志者の事を成就するには、第一着の目的、即ち之が根據地を得るに在ることを感定仕候、然るに此根據地、即ち割據地を得ること、實に至難にして、支那天地廣しと雖も、甚だ得難き事に候、雖然邊境政化の洽からざる地を周遊して、一心に搜索することあらば、又地肥風土の便に依るべき處なきにしもあらざるべし、若し之を得之を占むることを得るに至つては、其地に割據して普く世の志士壯夫を集め、生養訓練以て世機に乗せば、大事豈亦何の難きことかあらん、方さに腐敗の清廷を壓することを得らるべきなりと、常に思慮を定め居候、然るに未だ時機を得ず、又南北何れを擇ばんや、未決

抱負何大

なり、然るに豫て申上置きたる北邊の事、來年初夏に大抵決行可致、北方は、土肥へ機應、便を得ると雖も、本朝滿廷の基業地にして、政化兵機隨分密に行届候に付、其地に潜伏して根據地を築くこと甚だ困難なり、因て南邊の安きに如かざるべしと確案仕候故、來年北行の期に至るまで南邊に周遊して、其地勢を窺ひ、其地利を審査せんと欲し用意略整ひ、本年中に孤劍飄然南邊に飛遊せんと決心仕候、昨二十九日歸堂したれども、本年も只一日の餘日あるのみ、故に來年一月四日を以て發程の起算に候、これより南、雲烟萬里湖南の水、貴州の山、雲南の野、廣西の森、福建の郊、虎狼豺豹の窟に入り、猛獠(之れ貴州雲南廣西に住する野蠻人)の苗蠻の巢に遊び、瘴癘毒霧の間を彷徨して、以て決志を達することを務むべし、前途渺茫、無事なるを保せず、若し幸ひ神明の加護を得、旻天の祐を受れば、本年中に再び上海に達することを得べく、男子の事を成す、豈に容易ならんや、方に粉骨碎身を甘んず、此行實に自から壯なりと存候、愉快雀躍の至りに御坐候、別に臨み再言す、家兄乞ふ自愛せよ、拙弟も誓て艱難に打勝ち、凱歌を奏して歸るべし、若し志を達し好根據地を得る時は、直ちに上海に歸り、之に處する準備を爲すべし、亦南邊志を得ざれば、來年方に北胡に向ふべし、秘密を乞ふ。

意氣何壯

十二月三十日

常 致 誠

白水家兄大人

研究所

幾くもなくして、日清貿易研究所の設立せらるゝや、君入りて其庶務を處理し、大に勉むる所ありしが、將來擴張の計畫に就き、有力なる實業家の助力を得んが爲め、二十四年五月を以て、一旦歸朝し、九州京阪及常總の間を奔走せしも、當時議會紛擾して、朝野の有志他を顧みるものなかりしかば、君の企畫は遂に水泡に歸するに至れり、是に於て郷里鞍手郡に歸り、犬鳴谷に閑居し、悠悠自適筆硯に親み、行水日記の著述に力を致せり。

然るに荒尾氏書を寄せて、君の渡清を促がすこと頻なりしかば、二十六年六月廿六日再び起て清國に航し、漢鎮熊家巷に寫眞舖を開き、漸次に宿望を達するの階梯を作らんとし、大に劃策する所あり、越て廿七年六月朝鮮の變報に接するや、君時に上海に在り、踴躍して曰く、國恩に酬ゆるの機至れりと、直ちに起つて朝鮮に赴き、當路者に謁して、具さに方略を開陳し、其容るゝ所となりしかば、清人に份し、牙山の敵營に紛れ入り居ること數日、悉く敵情を探知し、終に敵兵の怪しむ所となり拘禁せられしも、能く奇智を以て彼等を欺き、敵營を脱出し、晝夜兼行して京城の我軍に復命しぬ、我軍の作戰計畫は、多く君

巨人荒尾精

二六七

二十七年六月  
起東學黨亂

份清人  
入營探  
敵營  
知敵情  
奇智脱



が探知せし報告によりて定められしと云ふ。

七月二十三日、我軍朝鮮王城外に戦ふや、君は大院君の邸宅守護として、大に盡力し、後第九混成旅團の成歎牙山を攻撃するの際は、司令部に屬して戦争に勤め、京城に凱旋するや、龍山兵站部附となり、専ら通譯の任に當れり、牙山より凱旋後戦報を家郷に寄せたるの書あり、左に掲ぐ。

大暑の侯、益御清適奉賀候、降而小生事も、無恙奔走罷在候條、乍憚御放神可被下候、當朝鮮國の形勢は、既に諸新聞紙等にて御見聞被成たるならん存候條、詳細は贅報たるべく、荒増し記載仕候、終に已むを得ず砲聲刀光の威を示し處置せざるべからざる時機に立至りたるは、去る二十三日にして、其前夜中に朝鮮に政府の改革と、清兵撤回の請求をなせし決答を催促し、若し遷延するに於ては、決然たる處置に出でざるべからざることを兼て申込たりしが、此夜の決答満足すること能はず、故に夜半より夫々仕度致し、我兵も漸々と城内に繰込み、王城の周圍に近づき、二十三日味爽三門を押開き、王城に入込めり、於是王城護衛の韓兵抵抗を始めたり、吾兵三回の吶喊と共に銃聲は響けり、戦ふこと廿分許りにして、銃響漸々疎稀となり、久之戦は停止し、王城は吾兵の占

牙山戦捷  
全因君  
功察之

自牙山  
寄家郷

當時状況  
如見

領する所となり、四つの門樓悉日本兵の護衛するを見たり、次で國王を擁して事大黨を斥け、大院君を擁して王城に入れ、攝政となし、校正廳を開き、日を逐ふて弊政を改正せんことを期せり、始め韓兵は王城の後山に據りて發銃し、それより退きて、其後側の一村落内に據り、終に兵器を悉く放棄して、北漢山地方に逃れり、吾兵それより西門の兵營東門内の營兵武庫屯營等、京城内に在る總ての營兵を撃散し、軍器は悉く奪取し、一銃一丸を遺さず、數百の人夫及輪卒を以て、萬里倉旅團本部の倉庫に運べり、大砲は殆んど二十門に及ぶべく、小銃は二千挺を越へ、彈藥米糧等は擧て數ふべからず、(中略)斯くて城内は再び靜謐に歸し、悉く吾兵の保護の下に歸したりしが、支那人は凡て逃走せり、朝鮮政府の改革は、略緒に就けりと雖も、牙山の清兵を打拂ふに非ざれば、到底完全なるものと云ふ可からず、因て朝鮮政府より牙山清兵の撤回は、都合好く處置せられたしと云ふ依頼狀を取り、二十五日より吾が旅團は、牙山に向け出發せり、旅團長は大島少將、參謀は長岡少佐、福島中佐、上原中佐、中原副官、河野副官等にして、歩兵廿一聯隊、十一聯隊、砲兵一大隊、及騎兵工兵電信隊衛生隊輜重兵各若干、午前十一時發足、漢江を渡り果川縣に至り露宿す、行程三里許り、吾が全軍は茲に吶喊の聲を揚げ

全線突進す、敵の諸岩相續で陥り、兵器彈藥遺棄途に滿つ、始め吾全軍の吶喊するや、敵八門の砲を發射し間斷なく遮撃せしが、其の多くは吾軍の後方に爆裂せり、次で吾が騎兵の襲撃に會し、大砲凡て吾軍に奪はる。(併し悉く其要を抜去り用なきをいらしめたり)斯く頻りに進みて頻りに陥れ、全營六七個、皆な吾が占領する所となり、敵は建昌縣地方に向て退却せり、死するもの一百有餘人、吾軍三十餘人を失へり、天幕三百張を奪ひ、旗幟二十餘旒を取る、旗幟凡て營將の姓を記せり、魏、徐、葉、憑、聶等なり、皆一營の守將たり、次で走敵を追撃し、午前八時頃吾軍を集め、直ちに牙山に向つて出發せり、東隊は、迂路を取りて牙山の南面に出でんとし、一隊は直路を取り牙山東面より入る、成敵牙山を距る三里許り、途中敵の散卒を捕へ殺すこと算なし、大雷風に逢ひ、午後五時頃東路の一軍牙山に入る、牙山は敵の乘る所となり一兵卒をも駐めず、直ちに入りて其倉庫を奪へり、聞く牙山には孫某なるものを留め、兵五十人を以て守れりと、(中路)予は昨日戰場にあり、輿に乗じて黙過すること能はず、敵銃を奪ひ發銃することを悦べり、終に旅團本部と失し、此日前衛と共に牙山に入れり、然るに旅團司令部は迂路を取れるを以て、此日迄未だ牙山に着せず、時下大暑凌ぎ難く、兵士の疲憊するもの少なからず、第一困難なるは

居民日本人來攻のことを聞き、悉く逃亡して薪水を給するものさへもなく、殊に途中の如き兵士渴して田水を汲み飲むに至れり、予は旅團本部の未だ來らざるを以て、此夜は市中に露臥し、糲を食ふて僅かに飢を止め、殊に可笑きは、先日予支那衣裝をなして牙山に忍び入り、殆んど一週間敵情探索に従事せしとき、宿とせし韓旅屋の主人に出會せしことなり、彼は能く予が面を知れり、彼は能く予が清兵と一處に飲酒し、談話せしことを知れり、予が此度日本兵に従ひ銃槍を肩にして來りたるを見て、彼は予が顔を見て苦笑せり、彼は予が裝束を見て驚けり、彼は予が先きに穩かにして今暴なるを見て怪めり、彼は劈頭に予に向て激言を放てり、予は惜い哉彼が言語を解すること能はず、直ちに袖を別てり、三十日予は旅團本部を尋ねんと欲し、再び來路を回れり、未だ一里ならずして給養隊の屯浦より來れるに逢へり、彼等は今朝速かに牙山に入るべしとの本部よりの命令に接せりと云ふ、予以爲らく然らば本部も亦將さに今朝牙山に入るべしと、因て歸れば、既に牙山の南路より、本部は來着せり、直ちに本部に到りしに、少將及參謀等皆な予の來るを見て、大笑して曰く、昨日予を戰場に失す、予が銃を肩にして進撃するを見たり、而して予に似たる支那人の死屍を見たり、恐らくは戰場の露となりたるなら

んと思惟せり、而して今志なきを見たり、可慶可慶と、予再三罪を謝し退く、此日牙山に宿す、成歡及牙山の戦利品は、此地より白石浦(即ち清兵)に泊せる汽船に牽引せしめ仁川港より龍山の本營に送付せり、(下略)

八月十二日

山崎 羔三郎

白 水 致様

井上 保次 郎様

中和平壤  
功勳亦多

特別秘密  
之重任

吾軍益々北進するに及び、君は第九旅團司令部附となり、八月二十一日京城を發し、途中病に罹りしかば、開城に留まり療養數日にして、黃州に至り、始めて軍隊に追及し、夫より中利に平壤に或は偵察斥候となり、或は郷導となり、或は物品徵發俘虜訊問に當り、人民鎮撫に任じ、勤勉以て吾軍の便益を圖れり、其功尠ならず、平壤陥落の後第五師團司令部附に轉じ、一旦廣島なる大本營に歸りぬ。

十月四日大本營に伺候し、間もなく第二軍司令部附通譯官を命せられ、拔んでられて特別秘密偵察の重任を授けられ、十月十六日を以て軍司令官大山大將以下幕僚と共に、清國盛京省に向つて出發せしが、發するに臨み、家兄に書を送りて訣別の意を漏らせり、其書家

此行不  
期生還

何等之決  
心

郷に達するや、家兄は令弟と共に廣島に赴き、君の行を送れり、此時君懇ろに語りて曰く、此行素より生還を期せず、出發の日は即ち其命日なり、成敗は天にあり、唯潔く死して國を辱しめず、以て 皇恩に報ゆるのみと、此語竟に讖を爲す。

十月二十三日第二軍大同江碇泊中、我陸兵の上陸に先ち竊に花園口附近に上陸し、夫より普蘭店を経、遼陽方面の敵情偵察の重任を受け、明くる二十四日夜支那服の旅装を整へ、水雷艇に搭じ暗に乗じ出發せり、別るゝに際し參謀官等と懇懇に握手の禮を爲し、訣別して曰く、此行奇功を建てずんば、再び生きて閣下等に見えずと、飄然として深く虎穴に進入せしが、爾來者として其踪跡を絶ちぬ。

後十一月六日我軍金州城を占領するに及び、衙内の簿書を検して初めて君の十月二十六日清國巡邏兵の爲めに碧流河の邊りなる渡船場にて捕へられ、鐘崎三郎、藤崎秀の二士と共に金州海防分府第二獄に繋囚せられたる證跡を得しも、其顛末秘密にして知ること能はざりしが二十八年二月六日偶々我民政廳雇清人王某の言に依り、始めて其詳を知るを得たり。當時君は鐘崎藤崎の二士と共に、獄に繋かれ、日夜慘酷なる鞭笞苛責を受け、我軍情を糺問せられしが君は、言語の通せざる風を爲して隻辭を發せざりしも、其竟に免かる可から

壯烈  
一

東向拜  
聖天子

神州男子  
之典型  
年三十有

異敷之盛  
典  
忠死之三  
字

巨人荒尾精

二七四

ざるを見るや大聲呼んで曰く、我は大日本帝國臣民福岡縣士族山崎羔三郎なり速に我頭を斬れ我何ぞ死を畏れんやと、神色自若として毫も平日と異ならず、獄吏舌を巻きて其豪膽に驚く、陰曆十月三日、鐘崎藤崎の兩士と共に、金州西門外の刑場に護送せらる、清國の法囚徒を刑するや、皇帝を拜せしむ、依りて三士に命じ西南に向ひ清國皇帝を拜せしむ、三士大に怒り罵て曰く、日出の國 聖天子の在るあり何んぞ蠻主を拜せんやと、東向して動かす、僧手怒て刀を以て其面を亂打す、流血淋漓、爛膾眼鼻を分たざるに至るも、三士終に屈せず從容として死に就けり、時に君年三十有一、屍を城の西南二丁餘、旅順口街道の右側に埋む。

三士の知友向野某澤本某王某、を伴ふて之を檢し、之を司令部及民政廳に報す、因て翌日司令部副官醫師憲兵及譯官僧侶等と共に赴き發掘すれば、果して三屍あり身首處を異にし、頭面處々刀痕を存し、嚴寒の爲め凍結して其慘狀實に見るに忍びず、衆相顧みて熱淚潸然たり、乃ち僧侶をして讀經せしめ、之れを茶毘に附し各遺骨を二分し師團長山路將軍忠死の二字を墓標に書し盛典を設け、同九日を以て廳外の招魂社内に改葬し、其一半は各之を郷里に函送せしむ、嗚呼將軍智勇絶倫、勢望六軍に冠たり、而して今や英斷以て三士の忠節

捨生取  
義之碑

三崎山

後話可  
レ

義士之墓  
側建三  
烈士之碑  
一得其處  
其處一説

を表彰し仁愛枯骨に及ぶ、三士死して餘榮ありと謂ふべし。

次で根津一、三士の忠烈を長へに傳へんが爲め、碑を金州城北門前の山上に建て、題して『大日本志士、山崎羔三郎君、鐘崎三郎君、藤崎秀君、捨生取義之碑』と云ふ、其山無名にして海中に突出し岬をなす、而して三士の姓崎字を冒すを以て、之れを三崎山と命名す、其岩燧石の大磐石にして、容易に刻字する能はず、已むなく其の岩石の中央に朱桐油を以て三崎山の三字を大書し、能く雨露に耐へて永く洗滅するなからしむ、支那の俗、義を尙ぶ故に志士が生を捐て、義を取るを見れば、自他を問はず、齊しく之を尊敬し、敵人たるの故を以て忠義の士を辱しめず、因て山麓の民家をして將來此の碑に詣づる日本人あらば、必ず花と水とを供すべきを以てし、銀十兩を與へ去りしが、後ち日本人の此碑に參詣するものあるときは、彼れ招かすして花水を携へ來り、參詣者も亦多少の勞儀を與ふるにより、益々悦び會て之を忽にせざりしと云ふ。

占領地守備軍の撤去するに際し、我が軍は鄭重なる保護を加へ、此の碑を日本に送還せり、碑の海外より來りしは、之を以て嚆矢とす、乃ち捨生取義の意に基き、泉岳寺に謀りて之を四十七義士の墓側に建つ、義士の墓に詣づるもの、必ず三烈士の盤を吊ふと云ふ、碑の

裏面に文あり、曰く、

征清之役、第二軍譯官、山崎鐘崎藤崎三氏、銜上將之命、變服深入敵地、不幸覺寤、毒刃、余建此碑於金州城北之山頂、以表其義烈、既而朝議還地撤兵、有司收此齋歸、乃更立于泉岳寺、傳諸不朽云、

明治丙申年四月

知人 根津一識

### 二 鐘崎三郎傳

鐘崎三郎傳

君筑前國三浦郡青木村大字青木の人、父を寛吾といふ、母は小野氏、君其第二子、明治二年一月二日を以て父の寓居、同國鞍手郡八尋村に生る、幼にして父を喪ひ、十一歳にして從兄福岡市勝立寺住職加藤日龍の徒弟となる、人となり豪膽不羈、勇悍敏捷にして、殊に快辯を有し、文才に長ず、赭顔威容、其中蕩然たる和氣あり、佛書を學ぶこと九年、謂へらく方今文物日に進む、何ぞ方外を以て一生を終らん、宜しく國家有爲の人才となり、一世の智勇を推倒すべしと、遂に陸軍人たらし、之を日龍及び親戚に謀る、屢々謀りて屢々斥けらる、是に於て普通學を修むるに托し、同地の私立養銳學校に入る、明治十九年二月

立志卓然  
在報國

幼年學校生徒募集に應じ合格す、日龍之を聞き大に怒り、懲戒して遠く他寺に移さんとす、然れども君の志奪ふべからず再度上京するに至る、當時山縣監軍部長に呈したる具申書左の如し。

具 申 書

三 郎 儀

家素と貧賤、且つ幼時父を喪ひ、稍長じて母兄の命に依り、從兄勝立寺住職加藤日龍なる者の徒弟と相成り、佛學修業罷在候、然るに三郎儀平素陸軍出身志望にて、屢々日龍及び親族の者へ右素志相談し候得共、孰れも佛門の身妄りに他志を抱く可らずとて、一人も賛成するもの無之に依て、乃ち佛學の傍ら普通學研究致度旨を以て、日龍に請ひ、私立養銳學校へ通學致し候、此校は津田信秀の創設せるものにして、士官學校豫備科を授くる所なり、依て専ら幼年學校入學検査課目修學致候、然るに昨十九年二月幼年學校生徒募集有之候に付、該校々長信秀と謀り、密かに入學願書差出し候、同年四月検査官派出に相成り福岡にて検査有之候に付、直に應試仕候、然る處日龍間もなく三郎が幼年學校に志願したることを聞知し、急に養銳學校を退校せしめ、切りに懲戒の上將さに遠

呈山縣  
監軍部  
長書

く他寺へ預け置かんとする折柄、在京の友人より幼年學校學科検査に合格したる旨、豫報致呉れ候、依て自ら思ふに、若し逡巡不斷、機會を失せば、終身素志を達するの期無かる可しと、遂に意を決し日龍所有の金六十二圓餘を黙借し、多年養育の恩を受けながら、妄りに命に違ひ、家を出るの罪を謝するの書と、該金を成業の日迄借用致すとの證書とを残し置き、直に上京致候、着京の上書状を以て在郷の知家より、日龍許へ謝罪致候、然るに日龍は已に三郎が脱走せる即日、裁判所に告訴致、疊に残し置きたる書類を以て證據と致候由、然るに三郎事、未だ此事を知らず、再審査も猶日數有之候故、宿所等幼年學校検査掛に届け置、牛込成城學校へ入學致し居候處、同警察署より拘引に相成り國許警察署へ傳遞護送に相成り、福岡監獄未決監に於て缺席の儘、裁判言渡相成り候に依り、故障申立候處、直ちに御採用の上、前裁判を取消し、更に別紙の通り無罪宣告相成候、依て右に關する事件は双方に於て和議相調、全く結了仕候、右保證人相立事實具申に及候也。

明治二十年 月 日

本人 鐘 崎 三 郎

保證人 河 村 隆 實

浮屠氏何無慈悲

真情可憐

盛軍部々長 山 縣 有 朋 殿

情 憂天何無

然れども不幸にして家兄の重忠に罹れるを以て、再び歸國せざるべからざるの悲運に會し歸れば即ち家兄は既に逝く、依つて前志を中止し家兄の後を繼承し、三潯郡役所雇となる、數月にして辭して長崎に遊び、御幡雅文氏に就て、支那語を研究す。當時荒尾精氏、日清貿易研究所設立主意書を世に公にし、各地の新紙争ふて之を掲載す、君其知友に語つて曰く、荒尾精なる人、清國上海に於て、日清貿易研究所なるものを設け大に我國青年を奨勵し、東亞の貿易を擴張せんとす、之れを熟思するに、歐米の天地、今や大に定まる、而して殖民貿易の事業は、文明と共に一日も忽にす可からず、我國に於ても亦之と其勢を同ふす、然らば中原の鹿は歐米に非ずして、東亞に在り而して支那帝國今や老朽腐敗せり、十年を出でずして必ず變あるべし、此時に當り不肖三郎皇恩の萬一に酬いんことを期すと、直に東上し荒尾氏を訪ふ、氏君の奇才を愛し、之を厚遇して慰め歸らしむ是れ君が荒尾氏の知遇を受るの始なり、既にして長崎に歸り、復た御幡氏に従ひ刻苦勉勵す、已にして鎮西日報社に入り、編輯に従事し、顯敏奇才を以て推さる。

廿四年春上海に渡航す、居ること半歳、同地日本青年會に入會し、後聘に應じ安徽省蕪湖

男兒報國  
在二今日  
苦心慘憤

の日本商店に入る、二十六年六月歸朝、翌二十七年三月再び渡清し、南北地方を視察す、會々東學黨の亂起り、日清の關係將に不穩ならんとす、君謂らく男兒國に盡す今日にありと、因つて山東直隸の間に在りて敵情探查に従ひ、又た旅順に渡り、海軍大尉瀧川具和を助け、渤海灣の測量に従事し、支那人に份装し大に盡す所あり、熱河に於て洪水の爲め、船破れ錨其他機械を流失す、よりて新調修理の爲め上陸し、天津に到るや、半島の風雲愈々急に海洋島沖の戦報既に傳はり、荒川天津領事は、四十一人の居留民と共に將に歸國せんとす、而して君は同志石川伍一と止まりて、諸方面の情況を偵察して、本國に報知し彼の李鴻章をして我半島出師の運動機敏なりしに一驚を喫せしめたるもの、亦君等が夙に清國の計畫を探知し、以て之れを本國に諜報したるに由らずんばあらず、既にして清國政府は君等の行動に疑を抱くに至りしかば、已むなく小村公使の一行と共に歸國せんとしたるも、敵國の軍情を偵察すると否とは、我進撃軍の利害に關する至大なるものあるを以て、君は石川伍一と共に奮然身を挺し其任に當るに決し、暗夜に乗じて船を出で、漸く天津を脱出するを得たるも、敵の探索終始君等の四圍を離れず、石川伍一は敵手に斃るゝに至る、君は天津を去り、同地より山海關に至る、沿道の敵の軍情を探查し、屢々危地に陥りしも

辛ふじて虎口を脱し、九死に一生を得て歸朝し、大本營に復命し、大に賞賛を博し、直ちに大本營附通譯官となる、時に廿七年九月十二日なり、當時君の親友某氏に送りし書簡能く君の面目を傳ふるものあり、特に之を左に掲ぐ、

拜呈時下益御多祥奉賀候、降て小生も昨日電報致候通、九死に一生を得て、一と先づ歸朝、本日午前八時半着京致候間、御安神被下度候、抑も今回日清事件に就ては、固より國論のあるあり、敢て生等の一議を要せず候、唯生は實に千歳一週の好機會にして、一死以て國に酬い、家を興し名を揚げ、平素の志望を達せんことを熱望致候、是れ蓋し生が一己の功名心の然るに非ず、實に兄等數年來、三郎が不肖を捨てず、常に表裏庇護せられたる知己の恩に酬いんとの情、轉た切なるに依てなり。

予の向に盛家を退身したるが如き、家名を繁太郎に譲り退隱して、家名の斷絶せざらんことを計りたるが如き、皆今日あるを期したるなり、大事に臨み決死に躊躇せんことを避けたるに外ならず、若し三郎にして今日潔よく死する能はず、亦一の功名をも樹つる能はざらんか、上國家に對し不忠不義の臣たり、下は父兄に對して不孝不弟の賊子たり、亦知己者を欺き義者を害する惡魔たらんのみ、三郎不肖と雖も天下に志望を負ふの

千歳一週  
報國一死  
用意何周  
到  
此、  
不感  
泣

一血性兒なり、豈何を苦んで此愚を爲さんや。

士氣全廢  
大丈夫不  
建功于  
當世當  
世遺芳于  
百世

故に事の漸く急なるに及びて、天津北京在留の國民、皆悉く去り一の留るものなし、而して敵國の軍情を偵察するの周到なると否とは、我進撃軍の利害に關するや頗る大なり、然れども此要地に一の日本人の忍んで偵察する者なきは、嗚呼士氣全く廢る矣、尙此時余及外同志一人奮て止まるに決し、苦心の未漸く天津を脱出するを得たるも、敵の探察は始終余等の四圍を窺ひ、事甚だ迫れり、而して三郎命未だ盡きず、此等の輩を捲き上げ、徐々進んで内地の偵察を遂げたり、而して外一人の同志は不幸にも敵の捕ふる所となり、慘刑に處せられ、終に斷頭場裡の露と消えたり、今日暫く其名を記せざるも、三郎豈一步を彼に譲らんや、彼同志は實に國家の爲に死せり、彼は芳名を萬世に残せり、而して其芳魂は、永く國祭の榮を享て、笑て日本の進撃を先導すべし。人間幸に當世に生る、大功名を樹つる能はずんば、一死正に芳名を百世に残すべきなり、三郎幸にも

皇祖威烈の擁護に依りて、未だ彼の捕ふる所とならず、去月廿六日天津を發し直隸各地を探查し上海を経て歸國復命するを得たり、草莽の微臣三郎が名は辱くも

烈士苦行  
達天聽  
格賜諡  
萬死有餘榮

辭令一

大元帥陛下の御聞に達せり、一家の面目一身の榮譽不過之候、御喜び被下度候、不日從軍の資格も相定候に付、其節は詳細に申送り候間、右様御承知被下度候、而して小生は更に〇〇地方へ出張致す筈に御座候、然し今回は口にくそ容易なる様に申居候得共、九死一生を得候事も無覺束御座候、併し非常なる危険を冒さざれば、非常の功を奏することも難し、一死以て此目的を遂ぐる決心に御座候故、出發の際は、大總督宮殿下に拜謁の儀内達有之候次第に付、三郎が生前後共に最早思ひ置くこと更に無之候。(中略)幸にして三郎が命盡きず、凱旋の日は三郎が胸間には榮譽なる帝國勳章の輝々たる事を記憶せよ、然らざれば永く靖國神社に國祭の榮を享けん、俱に是れ男子終生の大面目、兄請ふ弟が爲めに祝せよ。

君廣島に在る凡そ二箇月、其間君の冒險的奇功は、畏れ多くも 大元帥陛下の御聞に達し遂に破格を以て特に當時所用の支那服裝及物品を携帶し、拜謁の榮を辱うするに至れり、是れ實に君が萬死すと雖も、猶餘榮ありとする所、其辭令の寫左の如し。

明四日午前九時、貴下の支那服裝にて軍事探偵を爲せし事を奏聞する事と相成候に付、當時所用の物品一切携帶當本營に於て、着裝可致旨被達候條、此段及通知候也。



巨人荒尾精

明治廿七年十月三日

鐘崎三郎殿

大本營陸軍副官部

二八四

侍從職に於て御用有之候條、袴羽織にて至急當營に出頭可有之候也。

明治廿七年十月四日

大本營陸軍副官部

鐘崎三郎殿

擲三律給  
養二成士  
官候補生  
二人

斯くて君は前二通の辭令と、天賜の酒肴料茶菓及衣類等を郷里の姉婿に送附して訣別の意を表し、十月中旬第二軍司令官大山大將に従ひて渡滿せり、是より先、君通譯官となり、特に若干の手當を受るや、其手當を擧げて稻垣滿次郎氏に托し、士官候補生二人を養成せんことを乞ふ、稻垣其義氣に感し、直に之を諾し斡旋の勞を執りしと云ふ。

一死報  
國、年僅  
二十有六

第二軍の進んで大同江に碇泊するや、水雷艇を派して漁人を捕へ、其衣服を剝取し、君をして之を着せしめ、暗夜水雷艇に搭じ花園口附近未詳の地に上陸し、夫より進んで碧流河方面より旅順敵情を探查せしむ、途中遂に敵兵の捕ふる所となり、別路を取りし山崎藤崎の二士と共に金州の獄に繋囚せられ、二士と同じ運命に遭遇し、鞭撻慘酷なる苦を受け遂に恨を飲んで、金州城外の露と消えぬ、時に年二十有六。

藤崎秀傳

### 三 藤崎秀傳

十三折  
節攻學

君名は秀字は實夫、雲岬と號す、大隅始良郡柘城の人、明治四年三月十八日を以て生る、父を威志といふ母は米良氏君は其長子なり、明治十五年始めて郷校に入りしも、桀驁不羈にして課業を事とせず、常に山海に獵漁し、往々晨に出で月を戴いて歸る、而して父君措て問はず、母君深く之れを憂ひ、屢々戒諭すれども聽かず、乃ち朝に天滿宮に詣り、夕に精予廟に拜して、兒の改悛以て學に志ざし、他日偉器たらんことを祈る、年十三轉然悟る所あり、其より節を折り學を攻め、日夜孜々として懈たらず、母君欣然每嘗自ら餅を作りて之れを與ふ、君之を食し睡魔を驅り、刻苦勉勵往々寢を廢し、燈火耿然として曉に徹することあり、偶々同郷の有志郁文館を開設して、士風の振作を計る、君乃ち行て學ぶ、君人と爲り眞率豪宕、邊幅を飾らず、能く友を愛し衆を容る、事を謀り難に臨むや、誠心敢行す、館中爭論起る毎に、君の調停を得て始めて安んず、是を以て人皆推して長者と爲し、大事を成すの偉材とせり。

人推爲  
長者

幾くもなくして鹿兒島造士館に入る、君常に人に語て曰く、天下の快事豈海軍將校となり

巨人荒尾精

二八五

艦隊を率ゐて五大洋を横行し、以て神州の武威を輝かすより大なるものあらんやと、依つて海軍學校受験の素を養はんと欲す、不幸二豎の侵す所となり、空しく病床に呻吟するものや、一日醫に就き、其體格を檢せしめ、其の軍人の資格なきを知り遂に志を改め良賢となり、國家富強の道を講せんと欲し、郷を辭し長崎に出づ。

時に荒尾精氏、日清貿易研究所を上海に創設せんとし、來つて長崎にあり、官民間に遊説す、君其説を傾聴し、荒尾氏に見え告ぐるに素志を以てし、且つ深く前途を託す、荒尾氏も亦君の熱誠を喜び、直に之を諾す、茲に於て君歸郷し双親の同意を請ふ、而して當時對清の思想未だ僻陬の人を動かすに至らず、且つ從來屢々其志尙を變せしが故に、父君盛怒して之を聽許せず、次で荒尾氏の鹿兒島に到り對清の演説をなすや、莊重の辯、熱誠の態、百二都城の人士を驚倒して、人心靡然として荒尾氏に向ふ、君乃ち荒尾氏に見え、詳に歸郷後の窮狀を告げしに、氏大に同情を表し、學資の一半を補助することを約せられ、更に君をして兩親に謀らしむ、兩親遂に之を許容せり、此に於て二十三年五月召募に應じて、上京、入所の試験を受けて無事合格するを得たり。

想得  
意可

企圖遠大

日清啓

志士之境  
酸鼻、使人

是歲九月同窓と共に、上海に航し、二十六年六月業を卒へ歸朝す、君の歸朝するや知友に語つて曰く、予他日機に乗じて四百餘洲を跋渉し、城塞の險要、民物の豊否を察し、又古英雄の遺跡を弔ひ、以て國家有事の日を待たんと欲すと、意氣自から昂然たるものありしと、斯くて二十七年四月、上海商品陳列所に入る、君常に曰く、余曩きに半費生として研究所の科程を終るを得たるは、全く荒尾先生の力なり、禽獸尙且つ恩を知る、況んや人をやと、故に陳列所の事務に従ひ、萬一の報恩を期せしが、幾くもなくして同年七月東學黨の亂起り、延て日清の釁端を啓くに至る、君乃ち上海に在つて、竊かに清國の動靜を窺ひ、軍國の爲めに奔走する所あり、既にして藤島楠内二士清人の爲めに捕へられ、偵察頗る急なり、因つて大熊鵬向野堅一二士と共に長崎に歸る、時に君は父君の家郷にありて病に臥するあるも、奉公の念止む能はず、偶々同郷の士成田某の郷里に歸るあるや、君書を家君に致し、又成田に托するに己に代り父の病を看護せしむ、志士の境遇亦憐むに堪へたり。既にして急電に接し大本營に到る、時に廿七年九月廿四日なり、大熊向野兩士と共に擧げられて陸軍通譯官と爲り、第一師團附を命ぜらる、參謀總長有栖川熾仁親王殿下、殊に君等を延見して謁を給ふ、三士夙に辨髮を善へ清語を善する者、乃ち十月十六日第二軍に従

ひ、廣島を發し、全軍大同江に碇泊す、二十四日暗夜に乘じ水雷艇に搭じ、竊に盛京省花園河口に上陸し、直ちに敵情探索の密旨を受け、清人に扮し、道を分つて深く敵地に入らんとす、發するに臨み、大寺參謀長、懇に握手の禮を爲し、慨然として其壯行を送る、寔に風蕭々として易水寒く、壯士一たび去つて復た還らざるの概あり。

此時に當り清兵大に行路を戒嚴し、重賞を懸けて日本探偵の士を物色し、旅券を携へざる者は、悉く逮捕せしむ、此間に出入して能く奇功を樹んとす、君の任務も亦至難と謂ふべし、終に清兵の捕ふる所となり、金州の獄に送らる、到れば則ち山崎三郎、鐘崎三郎の二士先づ在り、獄吏三士に問ふに我軍情を以てす、三士答へず、叱して曰く、我輩生命鴻毛に齊し、何んぞ嗷々するを爲さん、早く吾頭を斬れと、拷問鞭撻頻りに至り、肉裂け骨砕くるも、復た一言を發せず、清國の法、人を刑するとき囚人をして皇帝を拜せしむ、因て三士をして西南に向はしむ、三士肯せずして曰く日出の邦 聖天子の在るあり何んぞ虜主を拜せんやとて、東向堅坐して動かさず、死に至る迄罵りて口に絶えず、時に年二十有三。

### 四 藤島武彦傳

三烈士  
殉節

新羅王食  
二肉

年二十有  
三

藤島武彦  
傳

鹿兒島書  
生中之最  
少年

膽氣吞牛

孤劍入  
禹城

容貌如  
婦人  
氣似猛  
虎

君鹿兒島縣士族藤島良士の嫡子、郷里造士館に學び、年十六に至り士官學校に入らんとて、上京し、同人社に入學す、君鹿兒島書生中の最少年なりしを以て、之れを輕侮するものあり、君之を知り一日同縣學生を伴ひて、日比谷練兵場に至り、器械體操を爲し高足駄を穿ち最高梁木の上を濶歩し、半途に至り跳つて地上に飛下す、足駄爲めに兩折するに至るも、君直立毫も顔色を動かさず、學生等之れより、深く君の膽勇に服し、之れを推重すといふ。

同人社に在ること約一年、一朝大に感ずる所あり、支那に入りて爲す所あらんとし、明治十八年、年甫めて十七孤劍禹城に入り、先づ上海に航す、時に荒尾氏漢口にありて、志士を集むと聞き、遂に揚子江を遡りて、之れに加はる、當時同所に集まるもの凡十數名、皆志を支那經營に抱き、大事を爲さんとする有志家にして、所謂豪傑の集合團なりき、然るに君は齡未だ弱冠ならず、容貌恰も婦人の如き美男子なりしが、其志の堅固なると、膽氣の絶倫なるとは、同志間の畏敬重視する所なりき。

君血氣少壯、最も猛烈の事を好み、萬死の危地に入出して、更に意に介せず、或時（當時荒尾氏樂善堂の名を借り、漢口に書籍賣藥の販賣店を開設し、同志の士をして或は其書籍賣藥を携帶販賣して、各地を旅行調査せしめ、或は數箇所支店を設け、漢口本店と連絡

往復せしめたり。君同志一名と共に、漢口より民船を雇ひ書籍を搭載し、漢水に由り甘肅蘭州府に至るの途中、一夜海賊の襲ふ所となり、頭目趙某兩三名の小賊を引率して、船内に入り、君に迫り貨物及金を出さしむ。君渡清日猶淺く、未だ支那語に熟せざりしを以て福建人と稱して、頭目と筆談を交ふ。曰く余公の状貌を見るに、必ず一方の豪傑ならむ。何んぞ富豪を掠めずして、余が如き小賈を劫すや、余公の爲めに之を措むと、頭目は君が一見婦人の如き容貌を以て、僅かに二十歳前後の少年なるに拘はらず、平然何等恐怖の態なく従容として、筆談するに感じて、曰く、予數年海賊を業とし、多數の人士に會せしも、膽氣未だ子の如きを見ず、敬服の外なし、子の貨物は、一切之れを奪はざるべければ、請ふ記念として携帶品中の一を與へよと、君乃ち帶ぶる所の拳銃を出して與へしかば、頭目大に喜び謝して曰く、此江岸一帯予の配下數千あり、到る所に散在して旅客を俟てり、故に予は命を傳へて今後決して子の貨物を奪はしめじ、幸に意を安んじて前途に進まれよと、誓約して去る、同行せし同志某、嘗て人に語つて曰く、予當時氣縮み膽怖れて爲す所を知らざりし、想ふて此に至れば、冷汗背に冷く、實に慚愧に堪へずと、後賊魁趙某捕へられて襄陽の獄に繋がる、君之を聞かや、往日の義氣を思ひ、彼れを獄中より救はんとし、晝夜

膽氣感

與拳銃所置赤心於腹中者

宛然水濱傳中之人

年少豪傑

膽氣異常

兼行、彼地に到れば、前日既に斬に處せられ、獄門に梟せらる、君乃ち其首を奪うて馳せ走る、守兵追來り漢水の濱に迫る、君首を腰に結び、身を躍らして漢水に投じ、泳いで前岸に達せんとせしも、中途にして疲勞甚しく人事不省となり、波に従ひ浮沈し岸に觸れ蘇生し、漸く首を埋め、幸うじて漢口に歸來せしといふ。君嘗て河南に入り、八百屋となり、有志と交り、土情民俗を探る、其地一武辨あり、最勇悍にして、暴橫良民を凌辱す、君之れに向つて争鬪を挑み、捧を揮つて亂打し、以て其不逞を懲らす、爾後彼れ萎縮し敢て暴橫を爲さず、土民君を徳とし稱して年少豪傑と云ふ。君會て江西省廬山附近を旅行す、日暮て道を失し、山中に入り、宿を求むれども得ず、忽ち火光を認め、其所に至れば、三人の山賊粥を炊くあり、君突然其側に至り、濕衣を乾かせしに、山賊等は、其容貌婦人に似たる美少年なるを以て大に怪しみ且驚き、茫然爲す所を知らず、君猿臂を延して、會釋もなく其炊ける粥を取りて食ひしが、應て身體の温まると共に、疲勞漸く生じ、遂に火傍に横臥し覺へず眠に就けり、然るに彼等山賊は、君が大金を所持せるを見て、相謀て睡眠に乘じ之を奪はんとす、君奮起し短刀を抜いて之を叱咤睥睨せしかば、彼等懼れて逃散じたり、大膽極まる君は、其儘更に眠に就けり、然るに一

時逃げ去りし山賊等は里閭に至り、軍人に告ぐるに山中一人の盜賊あるを以てし、軍人を導いて來りぬ、君奮起健闘の際懐中せし短刀、鞘を迸り君の右前額を傷け、其血流れて目に入り、遂に彼等の爲に捕へられ、知縣衙門に送られ獄に投せらる、審問を受くるに及び君飽くまで日本人たるを秘し、琉球人にして福建に住し、支那各地を旅行しつゝあるものと稱せり、而して官憲遂に君を山賊と認め、數日の後將に斬に處せんとす、偶々前の山賊一人捕へらる、其罪狀中君を山賊なりと誣ひ捕へしめしとの言ありしを以て、君の冤漸く解け、宥されて支那兵卒二名の護る所となりて、漢口に歸る、以て君が膽氣の異常なりしを見るべし。

君は其後續いて漢口にありて、支那の實情を研究しつゝ、ありしが、荒尾氏同志の士と上海に日清貿易研究所を開きしも、資金に乏しく經營甚だ困難なるを見るや、君は其郷家の資産家なるを以て資を得て實業を営み、以て荒尾氏の事業を助けんと欲し、歸朝して大坂に紙革製造所を興して、其經營に當る。

二十七年東學黨亂起り、延て日清間の紛議となり、大島旅團仁川に上陸し、清兵亦牙山に上陸して、兩軍對抗の勢を取るや、君は兩國徒に相對峙し、他列國をして漁夫の利を收

めしめんことを憂ひ、當路に上書し和戰の速決せざるべからざるを説き、一朝開戰するに於ては、自ら一身を致して國家に盡すべきの意を以てせり。

斯くて君は支那に渡りて、同志を糾合し、國家の爲めに大に盡す所あらんとし、長崎に至れば既に牙山の攻撃、豊島海戰の報ありて、最早日本船の、清國に航すべきものなし、よりて獨逸船に搭じて、上海に航し、同志を集めて、深く支那各地に入り、其國情を探查し、種々の方法により、調査の結果を其筋に報じ、大に我軍の作戰計畫に便益を與へたり其後朝鮮方面の作戰進行するに従ひ、君は先づ南清の情況を請査し、其より直隸を経て滿州に出で、鴨綠江方面に至り、將に滿州に侵入せんとする第一軍と會し、之れに南清直隸滿州の情況を告げ、其軍の案内者たらんとし、上海より船に搭じて、寧波に到らんとす、然るに船中同乗者の怪しむ所となり、君終に逃るべからざるを知り將に身を跳らして浦江に投せんとし、衆の捕ふる所となり、道臺衙門に送らる、而して君の風貌優秀舉止堂々たるを見て士官なりと認め、巡撫自から審問することとなり、浙江省杭州に護送せられ、巡撫審問する所となるや、日本軍に有利なる事柄のみを供述し、更に實狀を吐かず、よりて獄に投せられ、慘酷なる拷問に遭ふ、幾くもなくして破獄を企て、牢舎を破り了り、獄外

年二十有六

に出でしも、長日月の入牢と、過酷なる拷問の爲め身體の疲勞甚だしく、遂に人事不省に陥り、再び巡吏の捕ふる所となり、終に斬らる年二十有六、平和克復するや、清國禮を備へ遺骸を送致す、因つて横濱に於て之れを茶毘し、遺骨を郷里に送る、朝廷其功を賞して大尉相當の待遇を以て金三千圓を賜ふ。

上智之資

君幼より倜儻にして大志あり、膽氣絶倫、屢々虎穴に入る故に一見無謀馮河の如しと雖とも、上智の資にして聰明英敏事理を見、機微を察する甚だ明瞭にして、文章を作るや會つて稿を起さず、千言立どころに成るの概あり。

### 五大熊鵬傳

大熊鵬傳

君幼名常太郎、後鵬と改む、筑後國浮羽郡船越村の人、家世農、父を高次郎といひ、母は某氏、明治二十三年三月久留米中學明善校を卒業す。

沈着剛毅

時恰も荒尾氏の日清貿易研究所を創立せんとするの際なりしかば、君其慕に應じ、九月東京に來りて考試登第し、同窓生と共に上海に航し、研究所に入る、君資性卒直、寡言温厚、忠愛人と争はず、沈着剛毅を以て同學中に稱せらる、夏暇友人數名と共に、上海附

香爐面

近を遍歴し十日許にして歸來す、炎熱の旅行笠を用ひず、日光に直射せられ面皮皆剝げ、紅紫の斑點となり、其狀宛がら古香爐の綠青を生せしに似たり、同窓紳名して香爐面といふ。

冒九死探敵情

君研究所を卒へ瀛華廣懋館に入り、實習を爲すこと一年、二十七年七月日清干戈を交ゆるに當り、北京天津の公使領事を始め、居留日本人悉く歸來し、上海其他各港領事居留民も亦悉く退去し、清國事情を日本に報知せしむるに由なし、是に於て君慨然一身を擲ち國家に盡さんことを誓ひ、二三の同志と共に支那人に份し、上海に潜み、九死を冒し敵勢を探り、之を本國に報告し、大本營の參考に供す。

變服偵察敵情

十月大山大將第二軍を引率して將に出征せんとするに際し、君は上海より歸りて同軍附通譯官となる、同軍は廣島を發船し、朝鮮大同江漁隱洞に至り、先づ海軍をして花園河口なる上陸地點を偵察せしめ、水雷艇に命じ、山東角近海の、漁舟を捕へ其漁父を司令部の乗船長門丸に伴ひ來り、着する所の支那服を剝ぎ、君及猪田正吉二氏をして之を纏ひ、支那人に變裝して、夜に乗じ花園河口附近に上陸し、大孤山方面の敵情を偵察せしむ、其後杳として其消息を聞くなし。

當時支那の名將たる提督宋慶は、平壤作戰應援の爲め、旅順金州の駐軍歩兵七千砲七十門の大軍を率ゐて、義州に到着したるも、平壤の敗報を聞き、退いて九連城を拒守し、遂に第一軍の破る所となり、砲の全部を遺棄し、殘餘の歩兵を率ゐて大孤山方面に退却し、偶第二軍花園河口上陸の報を聞き、大孤山を燒拂ひて、岫巖街道より旅順に退軍せる際に、恰かも大熊猪田兩士が彼の方面に到着すべき頃なりしを以て、宋軍の爲めに捕虜若しくは殺戮されしならんかとは、是れ當時第二軍司令部に於て推測せし所たりき。

其後宋軍の田庄臺方面に在るや、我使用せる支那人間諜の報告によるに、宋慶の傍ら二人の日本少年ありて、宋將軍頗る之れを愛護寵遇せりと、其れ或は大熊猪田二士に非ざるなきか、果して然らば如何にもして二士を救はんものと、我軍に於ても大に苦心したり、當時我軍滿洲方面の守備は、奥師團に一任し、他師團は悉く大連灣に引上げ、一齊に直隸平野に進軍するの作戰計畫なりしを以て、營口方面の軍は大連に向ひ、一時退却をなさざる可からず、其際若し敵軍の尾撃を蒙らば、甚だ不利なるを以て、一先づ敵軍を猛烈に擊破して之を恐怖せしめ、敵と隔離して退軍するの必要ありしかば、我軍の田庄臺を攻撃するや、餘力を殘さず、桂師團は遼河左岸に展開し、全砲兵を加へて牽制に任じ、山路師團と

年二十有五

野津師團とは、遼河水を渡つて左右より田庄臺を迂迴して、滿洲作戰中最も猛烈なる攻撃を試み、殊に四面より火攻を加へしを以て、宋軍は殆んど全滅し、宋慶纒かに身を以て免かれしが如き事情なるを以て、二士若し敵軍中に在りたりとするも、此時清軍と同じく命を殞し、なるべく、其平和克復後遂に歸來する能はざりしもの、其れ或は之れが爲めならんか、朝廷其功を賞し大尉の待遇を以て、特に遺族に金三千圓を賜ひ、之れを追賞す年二十有五。

## 六 猪田正吉傳

猪田正吉傳

君筑後國久留米市櫛原町の人、舊久留米藩士猪田重秀の長子にして、明治三年二月十六日を以て久留米に生る、五歳にして父を喪ひ、一姉三弟と共に母氏の鞠育する所となる、苦學勉勵十一歳にして小學の業を畢ふ、而して家政日に困しむ、外舅佐竹某資を投じて久留米中學に入らしむ、業を卒へ高等小學の教員となり、後ち大阪に赴き志を得ざること數年、會々荒尾氏日清貿易研究所を上海に興し、學徒を東京に募る、君之れを聞き慨然起つて東上し、考試に合格して校費生と爲り、一行に従ひ上海に赴き、苦學力行三年にして業を

卒へ、日清商品陳列所に在り、幾くもなくして征清の役起る、君商品陳列所經營の傍ら、清兵の動靜、軍艦の出入等を査察し之れを本國に報導するの任に當る、八月末召されて歸朝し、大本營に詣り、陸軍通譯官を拜命し、九月第二軍に従ひ出征し、朝鮮を経て遼東に至り、花園河口より上陸す、時に二十七年十月なり。

自遣當三士變服、間夜上、岸

是より先き軍議先づ沿岸の敵情を探らんと欲し、而して其人を難んず、君山崎大熊等の諸士と共に自から進んで其任に當たらんことを請ふ、是に於て水雷艇を潜放して漁舟を拿捕し、漁父の衣服を剽取し、三士をして清人に佯装し、一夜闇に乗じて岸に上らしむ、此時に當り我軍未だ一兵をも上陸せしめず、敵軍の警防最も嚴密にして所在の津浦、周ねく戍兵を配置し、行旅を査察し、又懸くるに重賞を以てして我諜者を捕縛せしむ、且つ豫め研究所各員の照影を頒布し、以て物色に便ならしむ、三士既に上陸し、君乃ち獨り大孤山方面に向ひ敵地の情形を偵視し、遂に終る所を知らず、時に年二十有六。

六年二十有

君資性濃厚、志氣堅忍、其研究所にあるや、課餘を以て雜役に服し、事ある毎に輒ち自から難を擇び、易きを人に譲る、而して學業優秀、操行端正、大に師友の愛重して望を屬する所たり、我軍既に遼東一帯の地を占領し、山崎鐘崎藤崎三士の遺骸を得て之れを葬りしひ、其功烈を追賞せらる、君死して餘榮ありと謂ふべし。

二士爲軍所

### 七 楠内友次郎傳

楠内友次郎傳

君舊嚴原藩學官青木文造の第二子、母は橋本氏、慶應元年二月十六日、肥前國三養基郡田代街頭鳥栖に生る、父の學官たるや、移りて藩學東明館の官舎に居る、館は演武場に接す、故に君幼時の嬉戲、亦文武の二道を出でず、常に城廓又は武者繪を寫し、群兒を部署して、野外に健闘するを以て唯一の娛樂とす、明治二年東明館に學び、傍々家訓を受く、同四年父君暴に病歿し、家兄亦大患に罹る、君時に七歳、能く母を省し、兄を慰むること、殆んど成人の如し、同年天本氏を冒す、瓜生野町日新小學校に入學し、常に學績衆を抜き、行爲卓拔嶄然として頭角を露はし、屢々縣廳の賞する所となる、卒業の後、師に就き經史を修め書法を學ぶ。



後ち故ありて養家を去る、時に家兄教職を鹿兒島に奉ず、因つて君を任地に召し、勤學せしむること四年、十七年四月、兄の友鹿兒島士楠元直矢、同籍楠内氏の附籍ありて、承繼者なきに苦しみ、君を請ふて其家を嗣がしむ、是れ君の楠内を稱する所以なり、而して尙ほ家兄の寓に在りて、英漢數の諸科を各専門家に就き研鑽す、其志身を軍籍に寄するに在り、是を以て勤學の餘暇、大に筋骨を鍛鍊するに努め、庭内に柱木を樹て、毎曉棒を揮ひて之れを擊ち、憂々の音、四隣の夢を破る。

十八年二月士官學校生徒を募集す、君踴躍之れに應ず、視力足らざるの故を以て、合格せず、遂に軍人たる志望を擲たざるを得ざるに至り、笈を負ふて東上し、東京専門學校に入り、邦語法律科を學び、後ち英語法律科に轉ず。

二十三年日清貿易研究所の設立さるゝや、會々家兄東京にあり、君乃ち研究所に入らんことを請ふ、家兄之れを賛し、荒尾所長に就き其意を致す、所長既に募集人員の滿つるを告げしも、其熱望を察し、特に入學試験を行ひ、特待生に加へらる、君母君を鹿兒島に省し、長崎に出で、一行と共に上海に航して研究所に入り、二十六年業を卒へ鹿兒島に歸省し、九州の海産物を調査し、更に中國及び大阪の海産物等を調査し、且つ各地の商況を視察し、

講文學

省母君

翌廿七年一月再び上海に航す。

東洋風雲  
方急

日清交  
干戈

隱身探  
敵情  
犧牲一  
身欲報  
國家

同年初夏の候、偶々横濱貿易新聞社長某、清國內地視察の途次上海を過ぐるに會ひ、其懇請により、相携て深く内地に入り、其状態を觀察し、數月を経て上海に還り、赤痢病に罹る、當時書を家兄に寄せて曰く、方今東洋の風雲轉た急なり、請ふ若干の資を得て病を療し、時機の到來を待たんと、家兄之れを見て、金を送り、且つ誠めて曰く、身體壯健ならざれば、識見僻み易し、故に一たび歸朝して、保養を加へ、更に謀る所あれと、既にして日清干戈を交ゆ、君更に家兄及び姉弟に書を送て曰く、今日の事國家安危の岐るゝ所、皇運の隆なる、素より疑ふ可からずと雖も、苟も臣民たるもの偷安の隻影だもあらんか、異日の事復た知る可からず、弟幸に聊か敵情に通する所あれば、一時身を隠し、以て國家の爲めに謀る所あらんと欲す、然れども輕舉は動もすれば忠孝の大義を誤る虞あれば、慎重を旨とし、一時音問を缺くべし、宜しく容赦ある可し、故に此書に返翰なからんことを請ふと、斯くて君は一身を犠牲にして、國家に報ゆるあらんと欲し、支那人に份し、上海に潜伏して、南清の情形を本國に報告し、大本營の參考に資せり、己にして福原林平と謀り共に與に遼陽奉天の地境に於ける敵情偵察の任務を帯び、同年八月十日福原林平と共に

湖北商賈と稱し、支那客棧に投じ、翌十一日營口行の便船に搭じて、目的地に赴かんとす然るに發船俄かに延期して、十四日となり、客棧の滞在數日に涉りたるが爲め、其舉動の怪むべきを認められ、終に清國領事の捕縛する所となる、而して其地佛租界に屬するを以て、佛國領事に轉致され、爾來同館内にありしも、九月初旬に至り遂に同領事より上海道臺衙門に送致せられ、道臺の鞠審に附せられしが、清官君の態度風采の優秀なるを見て、必ず日本の將校ならんと思惟し、特に糺問して我軍情を知得せんと欲し、依て南京に轉送され、總督自ら之れを糺問するに至り、久しく慘酷なる拷問を受け、遂に慘刑の下に殺害せらる、時に年三十。

### 八 福原林平傳

君諱は林平洞巖と號す、美作國東北條郡加茂村の人、父は喜作、母は花谷氏、君は其長子なり幼にして學を好み馬場不知也翁に就て學ぶ、後西薇山翁の監する備の閑谷巖に入り、勉學大に勉め、嶄然として群生に拔んず、人となり豪邁卓絶滿身總て是れ膽、常に曰く丈夫寧ろ玉碎すべし、何ぞ能く瓦全をなさんやと、慷慨國を憂へ意氣軒昂、熱涙の下るを覺へず、

福原林平傳

不可玉碎、全不可瓦

時年三十

夙に東洋の大勢に着眼し、雄心勃々抑へんと欲して抑ゆる能はざるものあり。

荒尾氏の、日清貿易研究所を上海に創立するや、君躍然清國に航し、研究所に入り、明治二十三年夏業を卒へ歸朝、親を省し、幾くもなく高見武夫と共に再遊の途に上らんとす、發するに臨み、國清禪寺海晏老師に謁す、老師二士の壯圖を知るもの、其行李中一劍を藏むるを見、之を奪ふて曰く、是れ鈍力なり、予は二子の行を饒する更らに利劍を以てす可し、此の劍や陸に犀角を斬り、水に蛟龍を斬り、光芒閃々紫電の進るが如しと、言終つて水晶の珠數兩連を與ふ、君等欣然として曰く、無比の日本刀なりと、即ち之れを首に桂けて去る、薇山翁亦其尋常汗漫の遊に非ざるを知り、諸生を講堂に集め、其行を送つて曰く、今や福原生高見生と遠く清國に遊ばんとす、福原生父母堂に在り、祖父九十に垂んとせり、余其行を贊せん乎、祖父父母の在るを奈何せん、其行を留めん乎、三軍の帥奪ふ可きも君等の志凜乎として奪ふ可からず、且君等此行恰かも虎穴に入るが如し、前途茫茫際涯あるなく、之を如何すべき、然りと雖も天下の志士は天下の志士を知る、荒尾氏は天下の志士なり、君等其知る所と爲る、語に曰く士は己を知る者の爲めに死すと、死生命あり、窮達天に在り、君等の進退は惟だ義の在る所に従ふ、父母膝下の孝養は、兄弟の在るあり、往け矣

海晏老師贈利劍爲贈

薇山翁送別之辭

匹夫不可奪志

惟義之從

壯なる哉、此行と。

二士之を聽て感慨歎禁する能はず、滿堂の生徒皆涙を揮はざるなし。

斯くて同年十一月上海に至り、商品陳列所に入る、越へて廿七年日清戦端を啓くや。君は一身を獻じて邦家の爲めに盡さんと欲し、支那人に扮装し、上海に潜伏して、南清の敵情を探查し之を本國に報告して、大本營の参考に資せり、又楠内友次部と共に、遼陽奉天の地境に於ける敵情探索の重任を帯び、八月十日竊かに陳列所を出で、湖北の商人と詐稱し支那客棧に投宿し、翌十一日營口行の便船に搭じて目的地に赴かんとしたるも、不幸にして出帆俄かに十四日に延期せられ、滞在數日、其舉動を疑はれ終に支那偵吏の捕縛する所となり、道臺衙門に引致せられんとせしも、其地域の佛租界に屬するの故を以て、佛國領事に轉致せられ、爾後同館内に在りしも、遂に九月初旬に至り、同領事より上海道臺衙門に送られ鐵窓の下に呻吟し、道臺の鞠審に附せられ後南京に護送せられ、總督の糾問する所となり、遂に斬らるる時に年二十有七。

縛に就くの前數日、上海より家大人に送りし書翰は、實に其絶筆にして、讀み去り讀み來りて至誠惻々人を動かすものあり。

前略

天皇陛下には、伊勢の御大廟大神宮様に御告げ被遊候て支那を御征伐なさるゝとの事を承り感涙の至りであります。

御陛下には恐れ多くも、此度はたとひ日本神州の焦土となるとも、朕が子孫必ず振起するものあるより、外國の手をからず征伐するとの御事、かゝる場合であります、誠に涙の外はありません、日本志士たるもの、大君のため神州のため、刻苦しまするは、此時と存じます。

それで林平事は、物の數ならぬ身なれども、深く覺悟しましたから、今日よりは、暫くの間は手紙は出しません、支那の内地に入り込みます、大日本が支那を服する様に致します、此の際一度歸朝仕り度も、豫て御國の爲めに一身をささげ居る我身に御坐候得ば、此度となりて、一片の赤き真心は、とめてとまりません、及ぶ丈の力を盡します。御許被下度候、萬一若しやの事御座候とも、御心配被下まじく候、萬一の事御座候得ば、假令兒が身體たをれても、兒が真心は神となり、佛となり、天となり、地となり、日となり、月となり、山となり、川となり、風となり、雨となり神州大日本國を守護します、

生爲人忠  
死爲人忠  
義之爲人  
威之爲人  
守之爲人  
州之爲人  
今同職古

情孝子之至

巨人死尾緒

三〇六

威靈は千歳の下にあります、かく迄の覺悟をして居ますから、御安心被成下候。  
乍去左様な運氣のない兒ではありません、神佛の守りある事必ず無事で御目にかゝる事  
であります。

豪膽英邁の御父上様、何卒此覺悟は、御喜び御許被下度候、黒木村御氏神様、木山神社、  
八幡神社へ宜敷御傳へ被成下度候、申上度事は山々なるも、少しせわしく、もはや思ふ  
心も此外にありません、白山石神御歸り、御聞取可被下候。

上海より

皇明治廿七年八月八日

兒 林 平

父上様膝下

烈士之神  
靈、現道  
靈衛門

平和克復後參謀本部より、委員を南京に派して、楠内福原兩士に關する、始末を取調べし  
めたるに其復命報告書中に曰く、兩士刑死後數日、其神靈道臺衛門に現出す、官民大に之  
を恐怖し、更に棺衣を莊麗にして改葬す、此事當時南京に於て、人口に膾炙せり云々。  
其遺屍を日本に還送するに方り、日本の忠臣義士なりとて、數多の儀仗兵を附し、特に招  
商局輪船に塔載して、上海に送り、日本の官憲に交附せり、後横濱に於て茶毘に附するの

石川伍一  
傳

慨東洋  
之時事、  
決波清  
之志

際之を検するに、果して其棺衣共に莊麗善美を盡せりと、嗚呼眞心神となり、威靈千歳神  
州を守護するもの、是に於て乎驗あり矣。

### 九 石川伍一傳

君秋田縣陸中國鹿角郡毛馬内町の人、舊南部藩士石川儀平の長子なり、慶應元年を以て生  
る、九歳にして學に就き、後笈を負ふて東都に遊び、攻玉社に入り、刻苦數年、年十八九  
にして東洋の時事日に非なるを慨し、其頹勢を挽回せんことを期し、遂に渡清の志を決す。  
斯くて明治十七年長崎を経て上海に航し、曾根海軍大尉の寓に居りしが、後荒尾氏漢口に  
樂善堂を興すに至るや、君行いて其事業を助く、已にして松田滿雄と共に四川に入り、全  
蜀を一周し、苗蠻の巢窟に入り、幾度か危難を冒し山川の形勢と、人情風俗を視察し、其  
調査する所、龐然冊を爲す、附する處の繪圖、亦精密を極むといふ、廿四年歸朝更に天津  
に至り、大に畫策するあらんとし、山東直隸盛京の地を精査し、時の海軍駐在武官を輔け  
て、邦家の爲め盡す所尠ならず、左の書翰は君が天津領事館に在りて、日清戦争前清國  
財政調査に關し、北京公使館の中島書記官(雄)に寄せたるもの、而して中島書記官も亦坎

調査龐然  
爲冊

巨人死尾緒

三〇七

軻不遇、有爲の器を抱いて、今や不歸の客となる、故に特に掲げて兩士を追懷す。  
一昨夜御願申せし、清國財政一件に付、意志未だ盡さざる所ありと存じ、之を筆にして貴下に呈す、亦公務の妨をなすを避け、口舌の及ばざる所を補するのみ。

清國財政現況調査のことは、先年積氏當地駐在の節、多少材料を蒐集し、其後井上海軍少佐、(少將敏夫)之を繼續し、現に調査に従事せるも、戸部事務の浩繁にして、款項の混淆錯雜なるが爲めと、成書少く、尤も戸部則例あれども、以て現況を査知する能はざるにより、容易に下筆の緒に就かず、爾來京報摺の財政上に關するものを抄録すること一年、之により歳出入の概況を知らんと欲せしも、各省の奏報齊一ならず、此にあつて彼になきものあり、或は款項の接續せざる等のことありて、充分の結果を見る能はず、且つ蒐集の材料未だ以て書を編するに足らず、是に於て清國に在勤する、尤も久しく、其内外の文物制度に精通し、注意周密材料に豊富なる貴下の補助を仰がざるを得ざるに至れり。

財政編纂  
之主意

抑も該財政編纂の主意は、南北洋海軍經費、海防費、東北邊防費、鎮邊軍餉、甘肅新餉等、兵費軍器製造及新事業に係る、經費の財源は、何等の款項より支出し、其財源の果して

金力之所  
在、強弱  
之分處

非敢私  
之以欲  
報國家

確實にして渴綯の患なきや、否や、又其經費を如何に分配支出するやを査定し、兵力の消長伸縮に關する根源を知らんと欲するにあり、而して有事の日に當り、政府の採用すべき財源は、何れの邊にあるべき歟、現今如何に財政を理しつゝあるかを查明し、猶ほ文明の利器を輸入するに餘あるや否やを知らんと欲せり、是に於て財政全般に亘る調査の必要を感じ、近世財政上の沿革より、戰爭河決等の事變に際し、是迄如何なる救濟策を採用したりしやを略叙し、現今實收の地祖と其調定額との差如何、海關厘金鹽茶稅等の歳入より、諸俸給並に鑿に列舉せし兵費新事業費、旗綠營の兵費等、一切の歳出を調査し、其支出入款項の混淆錯雜せる形況と、挪移流用財政の困難なる情狀を事實上より證せんと欲するに在り。

現今の時勢、金力の在る所、即ち強弱の分るゝ所にして、中乾以て外強を示すべからず一國財政の張弛を見て、其盛衰消長の機を豫卜すべきなり、而して我邦未だ隣邦清國の財政に係る、成書あるを見ず、此れ僕が大に憾とする所にして、命を受け不肖を顧みず進んで其任に當りし所以なり、幸に不棄の榮を蒙るを得ば、乞ふ秘篋を開き、其財政に關するものを示されんことを、僕敢て私に世に公にして自から功とせんには非ず、少佐

の命を受け之を編するに止まり、寸毫も自から爲めにする所なし、若し不棄の榮を賜はば少佐の感謝措く能はざる所にして、後日其惠を報ずるの材料なからんや、公使館報告の差支なきもの、供覽は、己に小村書記官(壽太郎伯)にも稟明したれば、是亦た拜覽の榮を與へられんことを乞ふ。

明治二十六年十一月廿二日

石川 伍一

中島 大人

次で日清の役起るに及び、君は鐘崎三郎と共に天津に在り、諸方面に於ける敵情を偵察して本國に密報し、我軍の行動に資する所頗る大なり、而して君等の行動、早くも彼國官憲の探知する所となり、止むなく小村公使等と共に歸國せんとしたるも、敵情を偵察するの最も須要なるを想ひ、一身を犠牲にし後に留まるに決し、暗夜に乗じて船を出づ、時に敵の探偵終始君等の四周に纏ひ、危険身邊に迫りて、九死に一生を得ること難し、斯くて鐘崎君は、幸に虎口を脱し得たれども、君は遂に城内支那客棧に於て、敵兵の拿捕する所となり天津城外に銃殺せらる、時に年二十有九、君臨刑の時神色自若、從容として刑場に立ち、三彈を受けて始めて斃る、一彈は鼻下を貫通し、一彈は胸腹を穿てりといふ、諸同士の之を

偵察敵情

年二十有九

烈士、死、自若、始、三、九、二、而

聞き、哀悼せざるもの無し、越へて二年其遺骸を收め、東京音羽護國寺に改葬す、君人となり謹厚純朴、氣宇洒然、和氣人を薫す、生平篤學勤勉、細事と雖ども苟くもせず、交友に敦くして、名利に淡なり、常に曰く予他の嗜好なし、只杯中の物を愛す、君亦夙に英學の素あり、文筆に長じ、支那時文は、特に其得意とする所、又識見に富み、同志中の俊才なりしと云ふ。諸士没して後一年、明治廿八年荒尾東方齋根津山洲と謀り、九烈士の碑を若王子畔東方齋閑居の山莊下に建て、其父の名を併刻して、家門の光榮と共に、殉國の遺烈を不朽に傳へらる、碑文は山洲の撰ぶ所にして、書は東方齋の筆に係るといふ。

碑 正 面

山崎 志三郎  
石川 武彦  
藤島 友次  
楠原 三林  
福原 三郎  
鐘崎 三郎  
大藤 三郎  
猪田 正吉

君表紹之碑

征清殉難九烈士

九烈士之碑

嗚呼王事至、茲、請、纒、身、而、後、後世、嗟乎此諸君起時之言、思之憶之、夢寐豈能得、

巨人荒尾精

忘焉哉、

碑裏面

嗚呼我夙知之此九氏者、眞是東洋之志士也、嘗有見國家之前途、孤劍獨行、奮跋涉禹域者數年、具嘗艱難、而詳通其國情焉、征清役、慨然自起、有大所決、或體大本營之意、或啣上將之命、變服深入敵地、不幸覺遂斃於苦節矣、其始從事也、都十有五員、而其能生還者、實不過六人而已、若其經營苦心之情況、與進止慘澹之光景、則世已膾炙人口、故今省焉、茲特揭嚴君諸氏之芳名、共傳于不朽云、

- 山崎氏者、筑前國福岡養子町之人、白水清八君三子、年三十一、死遼東金州、
- 石川氏者、陸中國鹿角郡毛馬内町之人、石川儀平君長子、年二十九、死直隸天津、
- 藤島氏者、薩摩國鹿兒島池上町之人、藤島良士君長子、年二十六、死浙江杭州、
- 楠内氏者、肥前國三養基郡田代村之人、青木文造君次子、年三十、死江蘇南京、
- 福原氏者、美作國北條郡加茂村之人、福原喜作君長子、年二十七、死江蘇南京、
- 鐘崎氏者、筑後國三潯郡青木村之人、鐘崎寛吾君次子、年二十六、死遼東金州、
- 藤崎氏者、大隅國始良郡加治村之人、藤崎廣志君長子、年二十四、死遼東金州、

大熊氏者、筑後國浮羽郡船越村之人、大熊萬次郎君三子、年二十四、死盛京之地、  
 猪田氏者、筑後國久留米櫛原町之人、猪田重秀君長子、年二十六、死盛京之地、

三烈士

浦敬一、廣岡安太、高見武夫、之れを三烈士といふ、三士偉勳の見るべき無しと雖も其志常に興亞に存し、寤寐國家を忘れず、之をして九烈士の地に處らしめば、豈に寸歩を譲らんや、余其志を齎して歿するを悼み、三烈士傳を著し、九烈士と併せて、十二烈士と稱す。

一 浦敬一傳

君初め敬三郎又省三と稱し、後敬一と改め、子和と號す、父は坂本琢、舊平戸藩士たり、母は田村氏君萬延元年四月四日を以て生る、同藩士浦貞元養ふて嗣子と爲す、幼にして學を好み藩學寮に入り、後楠本端山翁に學び、刻苦勉勵、經史子集を讀み、略々大義に通じ、復た章句に屑々たらず、常に人に語つて曰く、平戸先輩、多く因循姑息、大有爲の機に乗

慨先輩  
之同類

師表自任

慨時勢  
起四方  
之志  
自任清  
略之經

じ挺然時局の難に任ずる者なしと、心竊かに先輩の覆轍を避けて、大に爲すあらんとを期す、明治七年君年甫めて十五、舊藩主松浦公君を擢んで、世子(厚仁)の侍伴たらしむ、君の淺草松浦邸に在るや、常に世子の師表を以て自ら任じ、侃々諤々、敢て忌憚する所なかりしと云ふ、在京三年、期満ちて歸郷す、時に君年十八、家道豊かならず、十二年二月職を警邏に奉せしも、固より其志に非らず、十三年冬之を辭し、十四年四月上京して同人社に入り、七月更に専修學校に轉ず、翌春養父大患の報に接し、即時歸郷し、晝夜看護盡さるる所なし、既にして養父病大に怠るに及び、君をして田村成三の長女と婚儀を舉げしむ、次で君再び上京、十六年七月を以て業を卒ふ、君大に喜び謂て曰く、聊か以て父母を養ふに足ると、而して君は遂に學ぶ處を以て父母を養ふ能はず、時勢に慨し、奮然四方の志を起し、交を志士に結び、以て國家の安危に任せんとす、是に於て九州に、中國に、浪華に往來し、内外新報社に入り、一筆の筆を以て、天下を警覺せん事を期す、是より先き君の熊本に遊ぶや、佐々友房熊谷直亮等諸士と交り、殊に宗方小太郎と相善し、時事を痛論し、奮つて清國の經略に任せんと欲し、心竊かに決する所あるものゝ如し。

二十年十月君の將に清國に向ひ、帝都を發せんとするや、人あり數百金を與へ、君の志を

孝子之至  
情

稱甫敬  
一

對露策

孤劍向  
朔北

助く、君之を受けて西下し、長崎に至り其金を鎮西日報社に托して曰く、僕の生還必ずべからず、而して家に老親の門に倚るあり、僕去るの後、家計窮迫の状あらば、幸に之を以て奉養の一端に充てよと、飄然として西航す、時に荒尾氏、同憂の志士と、共に漢口に在るに會し、其群に入り清語を學び辨髪を蓄へ、名を甫敬一と稱して、宛然一個の支那人と化す、當時恰かも露國が西比利亞鐵道敷設の計畫を發表して、列國の注意を喚起せし際なるを以て、對露策は同志間懊惱の問題となり、北邊踏査の急を感ず、是に於て君衆望に依り此重任に膺ることとなり、二十一年五月、孤劍朔北に向ふ、當時の消息は同志の一人たる山崎羔三郎の家兄に寄せたる書翰略々之を盡くすものあり、左に録す。

前略浦氏は、昨年五月末、北御門河原二氏と漢口を發し、西北伊犁に向ひ進みたり、此地は露西亞の國境に接し、現今已に露國より北國境まで鐵道を敷設せり、先年一度露西亞の侵略を蒙りしも、其後清露談判の上回復することを得たる土地にて、境土守護の要區に御座候、抑も吾黨事を中土に熾起し、内亂争離の日に當りて、隣邦島嶼、其の隙に乗じ、其慾心を逞ふせんと欲するは、必然の事にして、火を觀るよりも明かならん、然らば今日に際し、豫め之が備を爲すに非ずんば、曾に鵝蚌漁獲の災に陥るのみならず、



毒を百世に流し、東洋の大勢を誤ると必せり、而して中原逐鹿天下紛々擾々の時、手を分ち勢を殺きて、其防禦をなすは、到底爲す能はざるなり、故に今日より之に處する策を講せずんばあらず、浦氏此行蓋し其意に出でたるものにして、外は専ら露國侵入の衝を障りし、内は傍ら機に臨み變に應じ、中原逐鹿の業を助けんと欲するに在り、然りと雖も八千里外の異域に入り、此事を爲し、此務に服するは、實に誠に至難なり、而して彼等奮つて之が衝區に當る、其精神の壯烈爽雄なるは、嘉賞するに堪たり、又浦等三人出發するに先ち、藤島大屋の兩氏は、甘肅省蘭州府に至り、書肆を開かんと欲し、千圓餘の書籍を携へ發程せり、(此處にて後より來る浦氏等と會合し、右書籍より得たる價金を浦氏等に渡し、其費用となし、藤島氏は浦氏等の一行に加はり、大屋氏は其報告の爲め漢口に歸る約束なりき)。

斯くて浦氏等は、炎天を冒し、千辛萬苦蘭州府に達し、大屋氏等の書店を百方搜索するも見出すと能はず、依て一小屋を借り、之に託居し、兩氏の來るを待つと三十日餘、(三人共言語未だ通せず、故に旅行券を所持せり、而して猶來らず、因て謂へらく途中必ず變あり恐らく賊手に仆れしならんと、相談して浦氏一人漢口に歸り、事業費を整へ再來らん

而して北地寒冷將に堆雪に及ばんとす、以て北行すべからず、正に明年(即ち本年)を期し、再び此府に相會せん、其期に至るまで離散せんと、北御門氏は北京に向ひ、河原氏は之く所を知らず、斯くて十月二十九日夜、浦氏は漢口樂善堂に來着、北御門氏も北京に着したる由、頃日聞及べり、又大屋藤島二氏は、浦氏等に先だち出發せしが、途中旅費缺乏進退谷まり暫らく襄陽に止まり開塵、漸く費用の資を得て、九月某日蘭州府へ出發せしも、此れ浦氏等蘭州府退散の二三日後なり、兩氏夫より蘭州府にあり、本月(即一月)四日の夕相共に漢口に歸れり、此等の齟齬より、終に昨年は西北邊に手を伸ぶること能はず、空しく經過せり、浦氏大抵舊正月蘭州府に向ふ豫定なり云々。

發するに臨み、君の賦せし留別の長古は、真情流露、槍々悽々、人をして卒讀に勝へざらしむるものあり、而して宗方小太郎の送別の詩、亦慷慨淋漓丈夫兒の真情を看るべく、共に余の愛誦措かざる所、今荒尾氏の別歌と并せて之を左に掲ぐ。

臨發漢江賦

浦敬一

不能<sub>レ</sub>拖<sub>レ</sub>紳垂<sub>レ</sub>帶顯<sub>二</sub>令名<sub>一</sub>。又不能<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>分亨<sub>レ</sub>樂答<sub>三</sub>慈情<sub>一</sub>。疎狂漫懷蓬桑志。落魄江湖何所<sub>レ</sub>成。堂上年高髮如<sub>レ</sub>雪。依々只恃兒長成。一痕紅淚纒<sub>レ</sub>裳夜。萬般愁思作<sub>レ</sub>書晨。兒也茲

去千萬里。漂跡恰似水上萍。茫茫天涯雁書絕。不知何時侍双親。仰訴天今天不應。伏訴地  
兮地無聲。彷徨回首何所見。陰雲漠々漢々濱。

送浦敬一之伊犁

宗方小太郎

世事如亂絲。紛々不可解。舉世聞奇巧。國事日沈淪。強鄰竊朶頤。危機如累卵。誰能  
挺身定鴻基。獨有我黨當此責。君鞭白馬走天涯。我掉扁舟入渤海。時勢變遷難  
豫知。把臂交膝豈復期。想君西出邊關時。天山草木盡秋聲。萬里平沙連天處。無限客  
路多辛酸。胸間靜蓄十萬師。腰下斜掛斬蛇劍。事成應并吞北陲。不成沙漠埋其骨。  
大道與君相追隨。鬼神此時泣壯烈。君不見大厦一傾難復支。良匠祇能防未然。哲人  
獨悲天下悲。靜者只知微妙機。送行遠到漢水湄。長天無雲月光冷。

浦君の伊犁に行くを送りて

荒尾精

もろともに、あすの命も、はからねば、

けふを限りの別れとやせん。

斯くて雄心勃々孤劍遠く邊外に向へる君は、山崎羔三郎の書翰に記せる如く、故ありて閩  
州府より引返したるが、更に準備を整へ、翌二十二年三月二十五日を以て、藤島武彦を伴

踪跡杳然  
三十一時年

至誠貫日  
然起備夫

ひ漢口を發し、七月西安を経て、九日蘭州に着し、更に進んで嘉谷關を越へんとし、藤島  
は故ありて中途より歸來せしも、君は蹶然獨行萬里絕漠を度りて、伊犁に向ひ、踪跡杳然  
竟に行く所を知らず、時に年僅に三十。

是より先、君の再舉に關し、當時在北京の宗方小太郎は不同意を唱へ、寧ろ語學に熟達せ  
る石川伍一を適任とし、君を漢口本部に留めんことを主張せしも、君の決心と本部の決議  
動かすべからず、終に決行するに至りしと云ふ、君一書を宗方に寄せ、其志を言ふ、至誠  
天日を貫き、懦夫をして起たしむるの概あり。

一書謹呈仕候、大兄の御事業も、逐日御都合好く相運び居候趣き、欣喜之至奉存候、借  
過日大兄より荒尾氏に寄られたる書信を拜見するに、新疆行の事に付きて、二子異論を  
唱へ、竟に見合せる事に相成たる旨承知仕り、意外千萬の儀に御座候、二子は去年漢口  
を發する時、共に死生を同うし、險を冒して力の及ぶ限を盡さんことを誓ひながら、今  
日に至りて、何とか異論を申出し、遂に違約するの舉動を呈するに至りたるは、眞に驚  
呀に堪へざる儀と存候、原來彼二子は、初め敬一の引薦する所に係り、而して忽ち此の  
如き舉動に相成たる次第、諸同志に對して、面目なき儀に御座候、凡そ有志者が大事を

任するの時に當りて、互に小事を挾んで相調和せず坏とは、決して有間敷事にして、或は平時は少しく調和せざる事あるにせよ、本氣に事を成さんとする時に當ては、同心協力、小事を以て大事を敗らざるや、固よりの事に可有之。今三人同行中、互に意見を持ちて相争ふが如きことあるも、要するに其胸中少しく不淡泊なる所あるより生じ來りしものにして、殆んど兒童の喧嘩と一般、之を彼是喋々甲是乙非するは笑ふべき事に御座候、故に三人の者が、時に兒童の喧嘩をなすも、齒牙に掛くるに足らず、苟も信を以て交はり義を以て接し、共に大事を成すことを目的として之に従事せば、何人と雖も、共に事を成すべからざるはなしと、敬一平生自信致居、目前の有様は一笑に付し居候處、不幸にして中途に於て計畫行違ひ、互に相睽離するに至り、區々の心跡未だ明なるに至らずして、遂に諸君をして此三人は相調和せず、共に事を成すべからすと云はしむるに至る、誠に以て耻入たる儀に御座候、畢竟敬一才識淺劣の致す所にして、自ら責むるのみに御座候、蓋し此度異論の起る所以は、第一資金の少なき事、第二之に任する其人に非ざること、二點に在るもの、如し、今度の擧たる資金少なく、言語通せず、且つ經驗なき人々に候間、固より失敗なきを期し難く、完全なる成算は充分に立ち不申候、然

以て信交  
之、以て義  
接し、之を  
以て大事  
爲る目的

れども敬一等之を顧みずして險を冒して進まんとするは、已を得ざるものありて存すればなり、何ぞや、今日新疆の事たるや、外部に於ては最も緊要なる所にして、其形勢未だ詳かならず、故に速かに其形勢を探り、其地に於て同志者配布の方法を定むるは、極めて急務に有之、然るに今日我黨の事業、未だ擴張せず、資金充分ならず、内部の本支店さへ辛うじて維持し居る位にして、逆も充分なる資金は新疆に差向け難きは必然に有之、然れば資本の充分なるを待ちて、新疆の事に着手せんか、必ず機を誤り事に後る、其基礎を建つる見込を立て、而して後年内部より資金の送來を待ちて、充分なる事業に取掛り候存意に有之候、又た之に任するに其人に非ずとの説は、敬一等自ら之を知らざるに非ず、才識淺薄固より以て如此の大任に當るに足らざるべしと雖、然し御承知の通り今や同志の徒、極めて少なく、急に適當なる人物を求めんとするも得べからず、故に敬一等力を描らず徳を量らず、自ら進で第一の先鋒に當るものに有之、而して後年に至りて、追々同地に適する人物の來るを待ち、愈々充分なる事業の成るを期し可申候存意に有之候、今度二子は既に異見ありて同行せざること相成候得共、我行に於ては、決し

て差支無之故、二子の來ることは、毫も願ひ不申、二月中藤島と共に漢口を出發して、最初諸同志に約したることを實行可致候、事成れば、我黨に歸せん、成らざるは獨身其責に當らんと已、惟鞠躬盡力斃而後已、我同志に對する義を盡すのみに有之候條、御心配なき様奉願候、二子は如何なる方向を執るや、當堂に於ても資金を送る都合付き不申候に付き、當分の間自分にて如何とか計畫致し居候様致度存候、右者御起居伺旁此段申上候、勿々不。

宗方太兄

浦敬 一再拜

二百三子蘭州を立つ時、荷物は如何せしや、中には緊要のものも有之候間、若し預け置き居候得者、今度取出可申に付、此段二子へ御尋問の上御披被下度候也。

君が出發の前日、家大人に寄せられたる長文の信書は、君が一篇の經綸談にして、君の眞骨髄を顯はせるもの、其長篇の故を以て之を省く能はず、掲げて以て君の面目を紙上に顯然たらしめんとす。

一書謹呈仕候、維時暖氣相催候處、伏惟倍々御機嫌能、可被遊御動履、恐悅之至に奉存

寄家大

一篇經綸

人香地  
至經大  
一神有  
可一以  
以傳此

歐洲諸國  
對清政略

英國

候次に不肖儀無恙消光罷在候間、乍憚被安尊慮奉冀候、借不肖儀去年五月清國北邊地方巡視の見込にて、漢口を發し、甘肅省蘭州府まで歴遊仕候處、急に用事出來、漢口に引返し今日まで漢口に寓居罷在候ひしが、時候も追々暖氣に相成候に付、前の見込を實行仕候積にて、明二十六日漢口を出發し、北向可仕候間、左様御了知被下度奉冀候、不肖儀清國に渡航以來、實地に就て、清國々内の形勢及歐洲の清國に着手する方略を熟察するに、實に驚くべき有様に有之、先づ歐洲諸國の清國に對する有様を略述すれば。

英國は東洋政略に於ては、最も早くより着手する所にして、清國の南海なる香港を奪領してより、着々歩を進め、各港に於ける利権を占むるのみならず、又た清國の中央なる揚子江の権力をも占めんと欲し、近來四川省重慶府開港の條約を實施せんが爲め、漢口より重慶に通ずる汽船を作り、清政府と談判し日ならずして汽船を通じ、開港することに相運可申、又た印度より延長せる鐵道は、追々緬甸を経て、清國の四川雲南に連接することに計畫致居候得者、是亦た遠らずして成就可致候、蓋し英國の今日清國に對する政略は、陽に清政府を援助し交際を厚くし、以て露國を防ぎ、而して東洋に於ける權力を保持せんとするにあることは、十日の視る所に有之候、然れども若し油斷致し候得者

巨人系尾緒

三三三

將來印度の覆轍を履むに至るや、素より測るべからざる儀に可有之候。佛國は安南を征服せし後、未だ手を出さざれども、其清國々境なる雲南に注目し居ると一日の事に無之候。

獨逸の東洋政略に手を着けたることは、近來に候得共、其規畫する所頗る巧なるを以て非常に進歩し來り、李鴻章の顧問にも、自國人を入れ、海軍の指揮官にも、總て自國人を入れ、種々の方便を用ひて清政府の信用を買ひ、而して財政軍略等の事にまで立入り、貿易上に於ても近來東洋に其勢力を大にするに至りたることは、著しき事實にして、比公のなす所、測るべからざる儀と被存候、右に擧げたるものは恐るべきは恐るべきことに候得共、直接に奪略の實を顯はすにあらず、先づ種々の方便を以て東洋に於てする權力を占め、而して將來の計をなすに過ぎず候得共、

露國に至りては、滿腹の雄圖を展べんと欲するの方略、日に急に最も恐るべきものには有之候、露國の目的は御承知被遊候通り、其圖南の壮志を抱くや、一朝一夕の儀に無之、一地を奪うては一地を略し、漸々蠶食して、中央亞細亞は大半其有に歸し、一方に於ては阿富汗斯坦を越へて、印度を衝かんとし、一方に於ては清國の新疆蒙古滿洲及朝鮮と

境を接し、之を略して遂に清國の本部に討ち入るの計畫は、日に歩を進め西比利亞鐵道は四五年を出でずして、黒龍江を経て浦潮斯德に連接可致、中央亞細亞鐵道は、數年ならず清國の新疆に達すべし、斯くすれば露國に於て、大兵を繰り出すに、數日を費さずして清國々境に討入ること容易にして、清朝の兵備にては、迎も防禦は付き不申候、而して又清國の内地に於て緊要なる地には、商人に扮して武官を込込しめ、甘肅より新疆に至るの要路及北京より黒龍江に至るの要路には、處として露商若くは露教宣教師を配付せざるはなし、(英佛の宣教師も到る處に在り)此等は皆軍略上の偵察に従事するものには、有之候、又漢口福州其他一箇所に於て、大なる茶製造所を設け、之を擔任するものは、佐官以下の武官にして、陽には北清地方の利權を占め、陰には他日雄圖を展ぶるの方略をなし居候、其雄圖の盛にして、其準備の着々歩を進め居るには、實に寒心之至に有之候、歐洲の清國に對して手を着くる有様は、概略如此勢に御坐候處、

顧みて清國の形勢を看れば、實に紀綱解弛、内治腐敗國勢最早萎靡不振の域に陥り居候有様にて、漢の賈誼が火を積薪の下に置き其上に寢し火未だ燃るに及ばずして因て之を安と謂ふ、方今の勢何を以て之に異ならんと、痛哭流涕長大息致したるは、實に清國今

日の形勢を謂ふべきものと被存候、然るに清國の内治は、如斯萎靡するにも拘はらず、外観に關する國防等に至りては、日々強盛に赴き候有様有之、因て其内實を知らざるべきは、日々進歩の實を顯はし來る様相考候者も有之候得共、決して然らざる儀にて、其外観に見ばるゝ者は其實の進歩には無之候、蓋し外部を張りて内部に力を用ひざるものは、則ち今日清國々是の在る所にして、其國是の茲に一定せし所以を述べれば、往年長髮賊回々殺徒捻匪等相繼で大亂を起し、十八省中其蹂躪する所となり、此際政府は更に英佛と隙を開き、一戰して太仙破れ、再戰して北京危く、帝は熱河に逃れ、漸く城下の盟をなして其局を結了するに至れり、而して國內の叛亂は曾、左、李、湖等諸功臣の力に因りて平定し、小康を得たれども、外國との交渉は之より日に紛難に赴き、實に安心すべからざる事と相成申候、此時に當て國內瘡痍未だ癒えず、外國との關係は日に急なり一定の國是を定めて之を處せざるべからざる場合に臨めり、然るに國內は瘡痍未だ癒えざるも、不平の徒は既に根を絶ちたれば、亦非常なる叛亂を企つる憂なし、故に内國は姑らく唯平穩に之を鎮撫すれば、内より天下を覆へざるの虞なかるべし、特に恐るべきものは外國に在り、須らく大に力を外事に専らにし、以て外患を防ぐべしとは、當時

清國々是

朝議の在りし所にして、嘗て曾國藩の將に死せんとするとき、李鴻章左宗棠等に遺言して、今日内顧の患は已に絶たり、最も憂ふべきは外患にあり、故に内治は徐々に之を置處して可なりとして、専ら力を外防に盡し、其患を防ぐべしと謂れたりしは、即ち清國の國是を確言せしものにして原來二に此針路に因り、今日に至るまで固執して變せざる儀に有之候、是を以て海岸防衛等は頗る堅固に相成、海軍も近來に至りては殆んど東洋を雄視する勢を有し、其他之に付て施設する所往々觀るべきもの有之候、又國防を擴張するには之に要する資なかるべからず、故に各所に機器製造所を設け、招商局の汽船を盛にし、鑛山を開き電線を架し、今又官立銀行を起さんとする等總て國防を急にするより來るものに有之、外観の進歩は國是のある所にして、力を専らにする所に係れば、追々相運び居候得共、内國實力上の進歩は決して夢にだも見ざる有様に御座候。

内部之眞相

今其内部の眞相に立入り概略を述べれば、數百年の積弊を承け、上下腐敗粗綱解弛の極に達し、此儘にては扁鵲ありと雖も、救ふ能はざる域に相成居候、蓋し清朝政府は元と滿洲より起り、漢土を統一したるものなれば、漢土を制御するにも、一種の政略あり、其政略を約言すれば即ち外國人にして並吞せし國を治むる術に有之候、法制律令の如き

多くは前代に依りて、更に微密を加へ居候得共、所謂固有の政略なるものは、其間を貫き一事一物として此分子を含まざるものなく、脅迫となり籠絡となり、牽制となり、嚴酷なる上下の分別となり、而して其弊たるや腐敗となり拘滞となり猜疑となり隔絶となり、宗祖立法の意も今日に至りて實に進歩を妨げ發達を害し萎靡不振の原因となり居るもの枚擧に遑あらず候、此の事は立法上政治上より來る弊害にして、今之を事實に徹し陳述せんとすれば、頗る長きに涉り候、故に姑らく之を置き、

腐敗之最甚者

其最も腐敗の有様たる一例を陳述し、内部の有様を推考相成候便に供すべく候、最も甚だしき腐敗の有様とは、即ち官吏私を爲すの弊に候、此弊たるや上は大臣より下は地方の小吏に至るまで、天下到處之れなきはなく、其風習固結して釋くべからず、偶其間に立ち清廉の官吏あるも、却て不首尾となり、遂に其職を全うする能はざる有様なる故、上官は之を下官に求め下官は之を人民に貪り、賄賂公行するのみならず、國庫金竊取者横行すと云ふも誣言に非らず候、其私する金額多き一例を擧ぐれば、湖北の總督の如き年俸二萬兩許に候處、其實際の収入高は年々三十萬兩に上り、知府知縣の如き年俸千兩に候處、収入高は年々四五萬兩に上り候由、是等は皆下官及人民の賄賂と官金の私しと

賄賂公行

に因るものに有之、公然官金を私用はせざれども種々の名義にて收入す 又各衙門内に居る書役、即ち書吏と稱する小

吏の如きは、給料一月間一二兩に過ぎず候得共、書吏の株を他人に譲り渡すには、五六百兩乃至千兩の報酬を以てする由に有之、其平生私に收入する金員の多額なるを推知すべき儀に有之候、國家の實力を消耗する官吏の私するより大なるはなく、清朝政府財政の困難は畢竟此の如き弊、其大原因となるものにして、政府に於て年々歳入額は大抵一億萬兩許に候處、官吏の其中間に於て私に種々の名目を附し、人民より取立つる金額は極めて多く、或る確實なる想像を以てすれば、殆んど政府収入の三倍に上るべしとの事に候、人民の財源を涸渇せしむるものは官吏に在り、政府の國計を困耗せしむるも官吏にあり、而して官吏獨り不正の富を得ること、相成候ては、國家何を以て相立ち可申哉之のみならず政府に於て銳意兵備の擴張を計るにも拘はらず、官吏に於ては其金員を私せんが爲め、定額の兵員を減じて、多くは半數計となし、一營五百人の定制なるを三百人に減少して、其餘を偷取するもの各省到處然る有様にて、現に武昌城の兵員の如きも此通りに有之候、又鑛山機器局其他種々の事業を政府に於て創立するも、官吏に於て不正の所業多きがため、充分盛大ならしむるを得ず、又裁判の如き賄賂多きものは勝ち、

官吏所私入三倍

少なきものは負く、故に一訴訟あれば賄賂の入費頗る多く、正印官にして已に然り、小吏に至りては其威權を用ひ、苛酷誅成實に言ふに忍びざるものあり、人民の之を畏る、こと虎の如く、訴訟あるも可成之を官に出さずして、郷里の紳士に仲裁を請ふもの多き由に有之、右に擧げたるものは其概略にして、事々物々皆然らざるはなし、外國人の我等より見れば實に驚き入る儀なれども、元來數百年の積習に浸潤し居るものなれば、上下共に恬として怪まざるは、亦想像外に有之候。

夫れ國家紀綱の解弛する上下の腐敗する如此有様に有之候得者、假令外部に力を用ひて一時強盛なるが如き觀をなすとも、譬へば大木の既に老朽し將に倒れんとするものを、四方より棒を以て之を支持するが如きものにして、一時綠葉繁茂するが如く見ゆるも、其中心既に蠹す、久しきを持つるの理無之、一朝疾風の起るに逢ひ候得者、逆も之に抗するとは出來申す間敷候、右に述べたるが如く國是及政治の點より觀察すれば、清國の進歩は容易に觀るを得べからず、其命脈も長からざる様に考候得共、若し大豪傑あり之を維持振興することに力を盡すべきものとするれば、稍望を屬すべき儀に有之、因て其人物と稱せらるゝ人を觀察するに、著名なるものは李鴻章、吳大澂、劉銘傳、曾國荃、曾紀

警咳切實

人物

斗符之輩  
不足算

福機一發

日清關係

澤、彭玉麟、張之洞、楊昌涓の徒にして、其内李と吳とは爲すことあるの才なきに非れども、追々老朽致候得ば、生前に志を展ぶることは難かるべし、其餘の人々も或は老朽し或は器小にして、逆も大經綸の才を展して此國勢を一大改革することは、六箇敷かるべしと被存候、又其下に位するものを見るに無能の滿人に非れば、則ち文科出身の八股文より練上げたる人物にして、大有爲の才器を抱くものを得ることは覺束なかるべしと存候。清國々勢此の如く、又大改革をなし振興するの望なしとすれば、到底歐洲諸國の駸々乎として雄圖を逞うし來る勢を支ゆることは期すべからず、數十年を出ずして禍機一發形勢上に一大變動を來すに至るや、鏡に懸けて見るが如く、實に危急存亡の秋と被存候。清國は我邦と唇齒輔車の地勢をなすのみならず亞細亞の中原に位し、之を保てば亞細亞に霸たるに足り、之を失へば亞細亞なきに至り可申、故に我邦に於て進で歐洲と威を爭はんとするにも、此の地勢を連合するにあらざれば、出來不申、又退て歐洲の進取を防がんとするにも、此地勢を利用するにあらざれば、出來不申、若し一朝歐洲をして清國の命を制せしめんか、我邦は形裕し勢蹙まり、進むことも出來ず、退くことも出來ず、遂に共に滅亡に至るは必然の理にして、清國なければ則ち我邦なきと同様に有之、され



は今日清國の憂は實に我邦の憂、手足の疾にあらずして腹心の疾に可有之候。今の清國に對する計策を論ずる者、或は云ふ之と交誼を厚うして共に東洋の大勢を挽回すべしと、或は云ふ之と一戰して我が威武を輝すべしと。若し夫れ席上に於て之を論ずれば可なり、然れど實際手を下さんと欲せば、兩方共に容易に行ふべき事にあらず、何故かと申すに、彼れ臺灣朝鮮の事件以來、常に我に對して猜疑の念を挾むこと一朝一夕の事にあらず、且つ彼れ自ら大國中華を以て構へ、深く我を輕んじ、我亦彼の腐迂なるを侮り、双方意氣投合せざるや極めて甚だしく、我假令節を屈して交を求めんとするにせよ、彼れ却て己に奉承するものとなし、驕傲の念を生ずるのみに有之候、加之彼の國勢今日の如き有様に候得者、之と交を厚うして共に東洋の振興に任せんことは、到底覺束なき儀と被存候、然れば則ち彼と一戰するを以て得策なるかと云ふに、彼れ國內は衰弊すと雖も、國力を擧げて海岸防禦に力を用ひ居れば、外部頗る堅固に、其軍艦の如きは充分我より勝れるもの、如し、我之を擊破する萬全の勝算あるか、假令勝算ありとするも充分に善後の方策あるか、若し善後の方策なくして疎忽に爭端を啓くに至らば、禍結で釋けず、所謂鵝蚌の爭漁夫の利となるは必然の事と被存候、夫れ和するも戰ふも容

易に行はるべからずと致せば、今日の如く爲すことなきに放棄するより外致方なしとせんか、清國の勢は遂に歐洲の爲めに制せられ、東洋の事亦恢復すべからざるに至り可申、是れ國家を憂ふるもの、實に痛哭流涕長大息する所にして、奮進勇爲大計大略を定め、以て此の形勢を濟ひ國家の爲め東洋の爲め、長久の基を立てざるべからざる所以に御座候。抑も今日一局部に眼を配りて戰を論じ和を説くも、素より何の益もなきことにて、大に眼を東洋の全局面に注ぎ、以て其根本を立つるの規畫をなすにあらざれば、決して此の形勢を濟ふ能はず、亦長久の基を立つべからず、而して此の規畫をなすや素より速成の功を見んとするもの、なし得べきものにあらずして、大且遠なる見識を以て之に従事し幾十年の後、其功を收むることを期すべきものに有之候、然るに不肖儀見識謏劣なるのみならず、天下の形勢も如何に相成候哉、清國の状態も果して見る處の通りなる哉、萬事未だ充分なる考慮相付不申候得者、所謂根本を立つる方策は何の處より手を下すべきやとの事に至りては容易に言はるべきものに無之、且又不肖の身を以て徒らに大志を抱き候は、眞に螳臂を以て車に向ふが如く、疎狂にして淺臺なる考なりと御感笑も可被遊候事と存候得共、東洋の形勢此の域に至り候上は、力を計り力を願み候暇無之儀にて、

鞠躬盡力饒而後已、亞細亞人民たるもの、職分を全うする而已に有之候、苟も自ら先き  
んじて亞細亞人民たるもの、大義を天下に唱へ、亞細亞遠大の策を天下に明に致し候得  
者、我國小なりと雖も、清國衰へたりと雖も、必ず風を聞て起つもの可有之、假令不肖  
生前に志を達する能はざるも、不肖の志を繼ぎ之を達するもの有之候得者、満足の至に  
有之候。

前年清國に渡航の際拜辭するに臨で、不肖の目的を申上奉るべき筈の處、却て彼是御心  
配を相掛け候様にては誠に恐入候次第と存じ、故に商業熱心の旨を申上置き、他日折も  
あるとき平生の目的を申上候はんと存じ、今日まで差扣へ居候處、今より之を考ふれば  
誠に恐縮の至に堪へず、依て今日北向に臨で、不肖の目的、即ち前條に述べたる次第を  
尊聽に達し候、不肖の心事御察被下、不孝の罪御宥恕被下度奉願候、不肖が此志たる  
や一時の感激に因て出たる儀に無之、今日我邦内政治上の小波瀾に關係致し、政黨とか  
國會とか區々たる事に奔走仕り居候位にては、逆も國家の大勢を濟ふことは出来不申、  
國家の大勢を振張せんと欲せば、亞細亞の大局面より手を下さるべからずと、千考萬  
慮して斷然之に決したるものに有之候得者、其目的とする處遠且大なるを以て、不肖な

至誠惻々  
思情瀟灑  
緒面此  
誰不與  
孝志二時  
不區于  
錫爾類

から敬一の身は敬一己の身に非ずと自ら任じ居候、されば世の冒險者流が、輕忽に一  
壯事を成して、自ら快とするものと比することは、深く耻づる所に有之、故に一舉一動  
自ら重んじ、失誤なく、禍害なく、疾病なき様、萬般注意可仕、昔日の故能は脱却仕候  
積に候間、此邊の所は省尊念候様、偏に奉願候、不肖目的の存する所は、前述の通りに  
有之候間、是より清國內地及外藩地方を経歴仕候存慮に有之候處、今般幸に都合を得候  
に付、一人の親友を伴ひ、明日當地を出立して北邊地方を経歴し、邊外の有様及露國交  
界の有様等を篤と視察の上、明後年冬頃上海に回來候積に有之候得者、歸着次第早速我  
邦に歸省奉拜尊顔、萬端御教示に接し可申候間、夫れ迄は御機嫌を奉伺候儀は一切出來不  
申此儀は御海容被下度奉願候、不肖儀少小より漫に四方の志を抱き、常に遠遊を事とし  
膝下に奉侍するを得ざりしのみならず、御一家困難之際、如何とか計畫相立て可奉安  
尊意等の處、未だ其事をも盡すを得ず、且又志佐に於ても、非常の場合に相迫り居候處、  
是又未だ原處の道を得ず、別に兄弟の恃んで以て後を托するものも無之、而して身を挺  
して遠く異郷に入込候儀、誠に不孝の極、恐悚惶懼申上様も無之次第にて、一念此に至  
る毎に、血淚横流剛腹も寸裁せんとする儀に候得共、不幸にも今日の時勢に遭遇仕り、

未だ兩全の道を盡すを得ざる事に有之、不肖の微衷を御照憐被下、不孝の罪御宥恕被下  
 度偏に奉願候、明後年即ち今年より三年の後は、北地を一巡して上海に出で、早速歸省  
 可奉拜 尊顔、其節を期して將來の事彼是 尊教に接し、御家政上の計畫も、如何とか  
 相立て幾分か御安心之道を相計り候存慮に御座候間、今日より其時の來るを相樂み居り  
 候、然れども死生禍福は天に在り、不肖既に一步を踏出し内地に入候上は、如何なる厄  
 難に遭遇するやは測るべからず、往時武道の盛なりし時武士たるものは、一たび門を出  
 づる時は何れの時死するやも知るべからずと、覺悟せし如きの覺悟なからざるべからざ  
 る儀に有之故に、如斯事なしとするも萬々一此の如き事に逢遭せば、實に終天の憾に候  
 得共、志士の常分にて致方無之儀と覺悟罷在候、就ては若し萬々一此の如き事に遭遇仕  
 候節は、後事は如何とか世話致し呉れ候様、平素不肖の親友なる荒尾精氏に依託罷在、  
 同氏に於ても義氣深重此事を承諾相成居候間、決して信を失はざる儀と存じ、之を待み  
 て稍々安心罷在候、勿論同氏に於ても今日より御家政上の補助等をなすと云ふ事は、決  
 して出來不申、假令出來るものとするも、義に於て此の如き事を受くべきものにあらず  
 候得共、萬々一不肖に於て四五年間も存没詳かならず、後事を處分するものなきの時に

死生有命 志士不  
忘在

托後事 於親友 何等之周

知義知 恥志士 本領

至りては必ず、平生約束の信義は、失ひ不申、御耻辱に相成らざる程の事は、如何とか  
 御世話可申上事と奉存候、荒尾氏本邦へ歸省の時は、御知せ申上候様との事に候ひしも  
 今度は勿々の歸國にて迎も御面會は出來不申候儀に付、御報不申上候、再び來清の上、  
 此年の秋頃、又再び本國へ歸省相成候筈に有之、其節は同氏は商業の事に關し、各地巡  
 廻の見込に候間、長崎にも滞在し、其中同氏或は同氏の書生平戸に來り拜訪相成かも知  
 れず、多くは拜訪相成積りの様話され居候、荒尾氏は大に商業を擴張する見込にて、將  
 來充分此に關する大なる見込有之、有爲の人物に有之候、同氏の事業は當時商業を擴張  
 するに有之、不肖は之と趣きを異にしたる事業に候得者、前文に論じたる亞細亞恢復論  
 は不肖一人の考へにて、同氏等の事には關係せざる儀に有之候條、左様思召被下度候、  
 又樂善堂に居りては、務めて商業熱心の體を裝ひ、領事は勿論同堂内に居り日夜起居を  
 共にするものと雖も、不肖の心事を知るもの少なく、又今度の旅行に付ても、其何の地  
 に到るやは存じ不申、且つ不肖既に頭を辨髮とし支那服を着し居、言語も可なり出來候に  
 付、今度内地に入込み候節は、日本人の資格を打棄て、支那民人の資格にて、各地巡遊  
 仕候儀に有之候、故に領事館に於ても不肖の踪跡は知り不申候、是れ決して物好きにて

如此仕候儀には無之、此の如き様子ならざれば充分各地を巡り、事情の觀察は出来不申候故に有之候、就ては不肖の目的と行爲を尋る人有之候節は、矢張商業專一の旨御答置被下、且又北邊地方巡廻の事も御明かし被下間敷奉願候、又三年間は樂善堂とも音信を絶ち候間、荒尾に御間合せ相成候ても今何れの地に在り何事をなし居るや、其踪跡は一切相分り不申候間、左様御了知被下度奉願候、併し前文にも繰り返し申上候通り、不肖今日の志に於ては、輕舉疎忽の舉動は毫も不仕候積に候のみならず、支那内地巡遊者は許多有之候得共、一人として異變ありしもの無之、何も掛念なることは無之候間、此儀は深く御安心被下度奉願候、借御家事に付ては別に何も申上奉るべき事無之只深く願ひ深く膝り奉り候儀は、常々御大事に御珍重被遊、滋養等は決して缺かせられず、運動を適度にせられ、而して若し御不快あらせられ候節は、少しの事にては息りなく御服藥あらせられ、陪々御壯康にあらせられ度き一事に御座候、御母様に於ては不肖の遠行に付きて嗚々御心細く思召され候はんと、痛念の至に堪へず、別段書を呈せず候間、可然御安心被遊様御仰せ上られ度謹而奉願候、又田村祖母様志々岐谷姉様にも、別段書狀を認め不申候に付、おときを御遺はし被下、少々内地見物仕度付、漢口を出發せし旨申述候

安三親心  
足守道之  
第一義

様おときに仰付られ被下度、又おときにも、別に書面を認めず候間可然仰せ聞けられ度奉願候、時下暖氣には相成候得共、寒氣朝夕猶ほ消せず、御大事に御保養奉願候、書は意を盡さず、筆を擱して眷々之至に堪へず候、

恐惶謹言。

明治二十二年三月二十五日

於清國漢口 不肖男 敬 一頓首再拜

家 大人膝下

二 廣岡安太傳

廣岡安太  
傳

君肥後熊本の人、幼にして藩儒生駒氏の門に學び、稍長じて四方の志を抱き、鬱勃たる雄心、雌伏するに堪へず、明治十九年清國に航し、上海城内馮公館に寓し、支那語を修め、居ること二年、去つて北清各省を跋渉し、山河の險夷風物の粗密を究め、漢口に出で樂善堂志士の群に入りて、其事業を助く、既にして高橋謙等と巴蜀の山中に入り、一時重慶支那に在りしが、二十二年四月孤劍重慶を發して、深く貴州の蠻界に進み、大に爲す所あらんとして、踪跡杳として聞けなく、遂に消息を絶つに至る、發する時年二十有二。

時年二十  
有二

巨人花尾傳

君人と爲り一目を眇し、謹嚴にして談笑苟くもせず、熱誠事に當り、百折屈せず、實に得易からざる人材なりしと云ふ。

浦廣岡二士の末路は、常に同志諸士の追慨措く能はざる所にして、宗方小太郎兩士と交り最も深く最も能く兩士を知る、因つて左に其の撰ぶ所、在上海招魂碑文を載す。

亡友招魂碑

浦君敬一、平戸人、明治二十二年三月念五日、單身發漢口、萬里度絕漠、深入新疆之地、廣岡君安太、熊本人、明治二十二年四月某日、由重慶赴貴州、各欲有所爲、二君去後十三餘年于茲、踪跡杳然、料已非斯世之人矣、

我輩與二君、同志于當年、追慨不能措、與同志相謀、建碑以垂不朽、方今時局日艱、東亞百年之計、有待于俊傑之士者多矣、二君當時之苦心、早已知有今日之歎、嗚呼所謂先天下之憂而憂者、於二君見之矣、我輩已悲二君之亡、又不忍不勉終其志也、

明治三十三年二月

友人 宗方小太郎撰

三 高見武夫傳

高見武夫傳

君備前岡山の人、高見山信の第二子、母は阿部氏、明治元年四月廿八日を以て同市新道に生る、幼にして浦上氏に養はれしも、故ありて家に歸る、君少壯にして岡山原泉學舎に學ぶ、學舎は池田學校の後を承け、西薇山翁の監督する所、君蒼髮癯顔の小丈夫にして、氣骨稜々多く人を許さず、硬磊卓落の氣、自から眉宇の間に表はる。

從西薇山史、氣骨稜々、既癯頭、角學、哲

就井上圓了學、哲

參釋宗演學、釋

薇山翁の閑谷山巖を再興するや、原泉學舎に在りし者移り學ぶ者多く、君も亦之に従ふ、平生寡言深黙、手に卷を釋かず、夕陽斜めに東嶺の雲を射て、晚鴉啞啞啼に歸るの時、君必ず林叢の下に散歩し、丘壑の間に逍遙し、高歌朗吟す、其聲琅々懸泉の音と相應じて妙調高遠なるものあり、同窓の士以て奇となさざるなし、二十四年晚秋家を辭して、東都に遊び、井上圓了に就て哲學を研鑽し、勵精刻苦、大に會得する所ありしが、猶ほ以て足れりとせず、更に鎌倉圓覺寺に到り、釋宗演禪師に參し、坐禪觀法に力む、幾くもなくして、大悟徹底する所あり、宗演君の殊に見性の功あるを見て、微笑居士の號を授く、蓋し拈華微笑の意なり、圓覺寺は鎌倉五山の一にして、禪師は夙に緇流巨擘の名あり、來つて參禪

巨人荒尾緒

するもの最も多く、博識の士の暑を鎌倉に避けて三伏の夏を坐禪三昧に送らんとするものあれば、居士公案を提出して之を試む、皆な其の奥妙高遠なるに驚き、禪師を問はずして去る者十の八九なりしと云ふ。

會東  
齊航  
清方

抱壯圖

入普  
山待  
風陀  
雲之機

荒尾氏の商品陳列所を創設するや、日清兩國の間に來往して計畫する所あり、一日鎌倉圓覺寺に供養禪師を訪ふ、微笑居士に接して禪を談ず、氏乃ち居士の才を奇と爲し、胸襟を披きて東方の形勢を論じ、志の相投合する所、居士を誘ふて清國に赴かんことを勸む、居士固より東洋經路の念あり、禪窟に雌伏するもの、龍蛇の池中に蟄するに異ならず、喜んで之に従ひ、勿々行李を調べて、郷里に歸り、別を親戚故舊に告ぐ、其將に渡清の途に就んとするや知友に語つて曰く、風雲の機近く清國の末路に在り、一蓋の笠、一雙の履、支那四百餘州を跋渉せんとするもの、豈に唯だ觀光采風の爲めのみならんや、大に東方經路の壯圖有ればなりと、以て意氣の壯を見るべし、斯くて廿六年十一月上海に航し、居ること半歳、浙江の名勝を探り、遂に普陀山法雨寺に入りて參禪す、同寺の左師奇材を以て君を遇せりと云ふ、君の普陀山に入る固より單に坐禪三昧に耽けらんが爲めにあらずして、風雲の機の到るを待たんが爲めなり。

既にして、二十七年夏六月東學黨の亂は、延て覺端を日清兩國の間に啓き、福原林平は、軍事探偵の故を以て捕へられて、先づ國難に殉せしが、捕史は又海を距つる普陀の靈寺に入り、微笑居士を禪榻の上に縛せり、楯與君を擁して波濤を凌ぎて、寧波府に入るや、米國領事、君の爲めに斡旋する所尠ならず、殊に法雨寺の老禪師の如きは、勉めて君の罪無きを證す、訊鞠數句、獄吏も亦君の罪無きを謂つて之を宥むるあり、獄窓の裡に在りとも、悠々自適毫も苦患を覺えず、斯くの如きもの月餘、君は忽ち杭州府清波門外の刑場に引致せらる、獄吏君を伴つて曰く、卿は敵國の軍事探偵に非らざると歴々證左あり、故を以て今將に放釋せられんとす、請ふ來れとて、鐵鎖を釋き檻車に載せ去る、君刑場に到る迄、其身の斬戮せらるゝことを察せざりし、檻車を出て從容席に着く、兵勇場を圍み、獄吏前に在り、君之れを訝かる、吏の壇に在るもの聲を激まして曰く、敵國の民、皆な捕へて斬に處す、罪の有無は問ふ所に非らざるなりと、君茲に於て悠然白襯衣を脱ぎ、其表に左の辭世の詩を書す。

此歲此時吾事止、  
男兒不復說行藏。  
蓋天蓋地無端恨、  
附與斷頭機上霜。

巨人荒尾精

悠然  
脫衣  
絕命  
詩

巨人荒尾精

三四四

書し終るや、白刃一閃身首忽ち處を異にす。嗚呼有爲の志を齎して、禹域に赴き、未だ風雲に際會せずして空しく斷頭臺上の露と消ゆ、君の遺憾復た想ふべし、時に年二十有七。

詞藻

偶成

荒尾精

少小元期擴斯文、  
道義講來夙夜勤。  
得將隻手一回天日、  
身後功名存竹帛、  
不問當年第一勳。

愧吾四十尙無聞。  
風塵閱盡春秋老、  
眼前窮達本浮雲。

日本全游後之作

同

薩海館灣眼底窮。

蜻蜒何處復伸雄。

試從芙蓉峰頭望、

同

同

遠近のあやなす雲も日に増して

千里行く身の心せはしき

北筑途上

浦敬一

凍雲漠々雨雪急、  
其奈征馬嘶不前。  
身迹越軻業難就、  
平生所期自剛堅。  
又不見本朝奇傑田長政、  
羞他垂頭乞人憐。  
朔風捲雪萬壑震、  
夙期單騎渡幽燕。

豐山筑水望凄然。  
嗟我漫抱蓬桑志、  
管盡世味酸與辛。  
君不見東漢豪英班定遠、  
雄飛杖策入南邊。  
俯仰感來意氣奮、  
叱咤驅馬舉長鞭。

讀家書

同

父曰我兒勤學不、  
對之再拜淚自流。  
世路間關業未就、  
遙望西天獨悲傷。

母曰我兒無疾憂、  
小少漫抱四方志。  
踈狂常爲慈親累、  
嗚呼何時侍膝下、

巨人荒尾精

三四五

送高原兄赴伊岐

三四六

遙望西北是韓州。  
當年遺跡尙存不。

茫渺雲山入兩眸。

武末城頭君試見。

錄舊作贈高雅兄

同

西馳東奔未嘗閒。  
雲迷北筑萬重山。  
馬革包屍是常事。

復負劔書下紫關。

波激太玄千里海。

雄圖看逼立駒庭。

義俠交來屠狗間。

失題

同

人生不滿百。  
不議骨朽復無跡。  
奈勃列翁和聖頓。  
丈夫志業果何似。

在世如過客。

何事營々爭枯榮。

看來古今幾變更。

個裏誰是人中英。

遂使豎子成大名。

抱膝仰天獨莞爾。

某將遊歷九州及畿內之間而至于東京賦古體一篇以贈呈。

同

大丈夫固當雄飛。  
要制天下有爲機。  
深山晝暗號豹狼。  
雙脚踴躍呼快哉。  
筑後河邊定遺勤王跡。  
要看大業復屬誰。  
況是抱大有爲志。  
刮目將待君再來。

豈可鬱々守伏雌。

壯圖蔽世膽如斗。

遠遊萬里事豪放。

探遍東陲又西陲。

蒼海波激躍鯨鯢。

想君單衣提一劍。

箱崎祠頭猶存伏敵字。

使人慨然懷往時。

水聲猶覺激餘威。

懷古慨今感多少。

君不見西漢馬遷極禹域。

千載令史耀其奇。

壯遊豈無發其奇。

墨田江邊泛斗酒。

偶感

石川 伍一

人生已過半。  
壯心空逡巡。  
茫茫天下事。  
燈下見古人。

夙志無由伸。

會訪萬里秦。

遷固不可趕。

功名何所就。

碌々六尺身。

試登燕山頂。

買得高粱酒。

冀野接天垠。

暫且遊雲津。

天上懸明月。



除夜

年華此夕盡、遊子古燕間。人世多愁淚、

日月無關山。

同

偶感

二十六年與水流。

辜負平生覆育周。

同

長大彈、缺歸無由。

燕山積雪藍關馬、

萬里客窓夢不結、

雙親膝下弟妹好、

定知霜髮加幾縷。

河海堅水陸上舟。

奇患難、分不肯憂。

寒燈挑盡影明滅、

鴻雁歸去暫斷絕、

送宗方大亮君歸朝

同

風卷寒漪、雪壓籬。

柳枝折盡轉傷悲。

憶君桑梓奉歡日、

却是天涯思舊知。

送宗方大兄北游

廣岡安太

立志不難果、志難。

同心萬里結金蘭。

飄零雨露鍊筋骨、

跋涉河山見大觀。

君須好風浮海濤、

我吟殘月倚欄杆。

理財自壯忠臣膽、

吞炭人誇義士肝。

色辨風塵無限路、

心懸南北有餘歡。

桃花洞裏垂柳渡、

岐臨留言挽玉鞍。

鎌倉圓覺寺

高見武夫

百年霸氣落烟波、

起伏春山積翠加。

寂々化城獅子座、

天風吹散萬松花。

壽德庵

同

白雲來宿石牕前。

修竹當門洞口天。

也與老僧樂其樂、

飢來喫飯倦來眠。

遊繪島

同

雨後松林翠欲流。

有人據岳起層樓。

雲山碧海暮帆遠、

烟雨湖南萬里舟。

金陵秋詞

同

銀河無影冷秋羅。

畫壁酒醒如夜何。

聽罷琵琶人倚闌、

疎燈瑟瑟照龍波。

巨人死尾精

三五〇

舟行抵三密渡、夜泊、是昔仲麻呂望月處

同

落水冷雲古越秋。

寒潮拍岸夜天幽。

多情三笠山頭月、

來照遠人萬里舟。

越城客舍、寄懷日本東京諸故人、

同

雲遊萬里一身輕。

吳越風烟懷古情。

畫壁春燈今夜雨、

落花風裏夢東京。

法雨寺夜坐

同

身與梅花太瘦生。

寂寥禪閣一燈明。

夜深人靜聽天籟、

屋角風鈴微有聲。

味菴園

同

秋雲欲瘦雨如絲。

日落名園宿草悲。

一點疎燈心萬里、

小樓剪燭夜題詩。

春日感懷

同

滿眼東風吹滿林。

花開濺淚鳥驚心。

吳山越水三千里、

春與春愁一樣深。

夢痕錄、後半

同

訪荒尾氏於大阪花屋、留數日且飲且談、常至夜深而寐、此間吾深知荒尾氏矣、嗚呼氏則天下之志士、而實曠世之偉人也、出阪也、到梅田、與荒尾益田泰諸士、亦分手矣、夜入神湊、直投輪船、船已發却望神湊、夜山欲低紅燈千點、而團月照海、秋濤萬里、金波漣々、真是天地之活畫也、吾在船中、而不敢登甲板、船已過讚岐、連山競秀、海水涵綠、白鷺雙々、風致明媚、真可愛、其達馬關也、時已夜月明、潮上孤雁啼入烟、柔櫓遙相答、而船燈隱見於山影海色水霧溟濛之際、宛然亦天地間之一活畫也、登陸也、宿繞翠樓、吾聞馬關之勝久矣、而未游其地也、天明因與洞巖同車、北到小瀬戶、兩山對峙、大潮流其間、而潮勢如箭、白帆如飛、真鎮西之奇觀也、若使李白視此景、必也曰天門中斷楚江開、南到壇浦、謁壽永之古陵、山勢之峨々、蓋如訴孤憤者、海潮拍岸、其聲如泣、古碑苔滑、宿草秋寒、吾掬裳川一杯之水、以弔平家千秋之冤魂、或登紫石之山、或拜赤馬之宮、想舊撫今仰俯感慨、涕淚久之、東坡曰、人生知字愛患之初、古人不欺吾也、蓋馬關望之有一衣帶水之間耳、然天暮因歸館、嗚呼馬關之勝、不期而一遊亦奇哉、初夜船已發、馬關海天如墨、風濤漸惡、

巨人死尾精

三五二

已而狂瀾捲天、怒濤震海、船休簸盪、山嶽潛形、鯨鯢出舞、於是乎船進不得、退不得、天曉船泊文字關、以避難、因與洞巖登陸、頗得知文字之勝、亦不奇乎、此日與檜崎氏邂逅、氏則遊支那多年、今亦欲往朝鮮、亦奇遇也、吾有詩云、日暮酒醒人下樓、天涯重聚又離愁、碎雨冷煙青山路、文字關頭欲老秋、夜宿石田、天曉與洞巖到波止場、海天如拭、秋濤千里、而輪船先我已解纜、不能之如何、則即直上鐵車、赴博多、路過香椎之古陵、經千代之松原、則到敵國降伏之祠、遂入博多、而此間一面臨海、一面據山、山則連山起伏雲烟蒼茫、海則潮痕一碧水天鬚髯、於是乎頗發今昔之感矣、過其松原也、玉沙玲々、青松流翠、微波拍塘、瑟瑟有聲、亦是鎮西之佳景也、而吾亦不期而視之亦奇中之一奇也、直從博多再投輪船、船已發、天亦暮、獨立船頭、願望霸家臺之雲樹、山色遙隱、見落日蒼煙之際、越一日、船到長崎、遂投綠屋、聞有輪船、此日航上海、吾以事不果、而上海之故人相待已久矣、因離杯一杯、使洞巖先發、嗚呼吾與洞巖同其行、同其苦樂、如此、今亦相別、孤鶩入夢、蓋亦奇哉、先是船中得一良友矣、曰池田某、崎陽野母之人也、篤厚而有才、奉職陸軍、已八年、今任滿歸鄉與吾同登陸、越一日來日、聞君有故緩航一週、與吾同去遊我鄉、亦不奇乎、想山之秀、水之明、亦足發詩興而至巨口細鱗之美、則其味不可言、吾不覺曰、妙、及期則

發、順風相送、布帆半日、到野母、天已暮、即投池田氏家人出迎、杯盤已備、秉燭舉杯各祝其平安、此地去長崎十里、地僻而人朴、夫妻相扶、兄弟相和、清風滿室、穆如可愛、嗚呼吾無感乎、越一日、傲船遊樺島、遊脇津亦遊岬、山秀水明、真不負所聞、而至鱸魚之美、潑々上匙、或爲鱸、或爲羹、風味自是天上之物、人間幾回得之管矣、留三日、亦歸崎陽、嗚呼吾嚮者與洞巖相別、實奇矣、而不期又爲此小遊、抑亦不奇乎、留其崎陽亦三日、於是乎崎陽之勝、亦知之矣、一日捲簾眺望、碧峯俊嶺、雙々互相對峙、一水空濶、據山臨海、洋樓楚閣、玲瓏相映、金碧相照、兩岸千百之老松、鬱々森々、隱隱見其間、檣帆如林、物貨輻輳、與天府之良港而鎮西之畫景也、越一日投輪船、船已發、天亦暮矣、獨立甲板、則水天鬚髯、東方只認一髮之青而已、蓋日本之山、亦不得觀也、嗚呼吾亦無感乎、雖然不期而吾烟霞之痼疾、時已得少愈、錦囊之詩料、時已得少富、而悠遠之志、時已得少養矣、是皆不期而得、不圖到、實亦奇中之一奇也、越三日、始認西方一髮之青、赤髯笑指之曰、是吳淞河口之砲臺、支那之山於是乎吾始見之矣、蓋從長崎到楊子江、三百五十里、更溯江口、四十八里、左折入吳淞、亦溯江十三里、始達上海、上海即古吳之地也、因天涯與故人相遇、其喜可知也、其快可想也、而楊子江頭之明月、吳城之風煙、多感多愁、亦可知也、居未滿月、飄然亦爲

海南之遊、孤帆萬里、遂到普陀山、投法雨寺矣、蓋亦吾之志也、居數日、登臨逍遙、獨相其地、真是南海之瀛洲、而天下之奇觀也、四面臨海、雲濤莽渺、千里一碧、而遠樹雲島、如遠如近、亂點於烟波縹緲之際、而孤帆桂席、暮風斜送、其最近而浮青雲梳綠巖者、謂洛伽山、山則有寺有庵、亦有水晶宮云、而願望普陀山、松老杉古、山骨稜々、如龍之躍、如虎之嘯、或如奔馬、或如臥牛、有欲落而不落、有欲騰而不騰、或起或伏、奇岩怪石、千態萬狀、得而不可形容、而白雲紅樹點綴其間、有人乘竹輿登此景也、欲畫而不能畫、欲筆而不能筆、隔嶺渡水、塔宇相聳、金碧相映、若其到、煙雨濛々暮鐘相聞之時、頗有南朝四百八十寺多少樓臺烟雨中之觀、而白沙如玉、青松凝翠、月明團々、雁聲搖落、曰金鼎沙、怪巖奇石、如躍如舞、石髮穆々、如獅子、曰獅子洞、據山臨海、竹樹蕭々、有草臺、有石橋、遙與洛伽山相對、風景如畫、曰洛伽洞、到梵音洞、則真千古之靈場也、倚鐵欄、拾石陞而下、白石玲瓏、碧苔如油、奇草異木、叢生其間、冷風拂衣、龍氣忽腥、大潮澎湃、與洞巖相激、澗々轟々、如百雷之轟、如獅子之吼、水霧四起、白日失光、四顧冥々、而兩山忽如裂、斷巖絕壁、不知其幾千丈、小堂架其間、倚欄望之不寒而肌生粟、毛骨悚然、冷氣徹骨、其千古之靈場、古有龍王居之、亦非偶然也、內安置觀音大師、香火常盛、蓋普陀之山、普陀之水

奇景勝地、蓋可以百數之、而吾足跡未、到也、故不能之筆也、聞之春則桃花流水、宛然一大桃源之仙區也、夏則萬嶽積翠、千峰明媚、萬里無雲、大日照海、水風微動、涼氣入閣、夏而秋、嗚呼吾謂之海宇之瀛洲、謂之天下之勝地、亦非偶然也、於是乎吾烟霞之痼疾可得少愈、吾萬斛之詩情、可得少蓄、而吾大鵬之志、可得少養也、吾今爲孤劍天涯之客、而擅勝於萬里之外、嗚呼亦不奇乎、更有從是奇者焉、何也嚮吾在日本鎌倉、參得大乘之禪機、踟躕有年矣、其到廊然悟入、則自想男兒有遠圖、而不得志於當世、一衣一鉢、飄然放浪江海、傲笑四方、石火雷光、毒殺天下之英雄、詩賦風流、千秋之業、亦足垂名教於百代、補世道於天下後世、亦不快乎、於是乎慨然欲爲僧、而未決也、人々皆曰、高見爲僧、高見爲僧、而吾遂不爲僧也、人々皆曰、高見落髮也、今也吾飄然爲天涯之孤客、而落髮於萬里之外、蓋有所大決也、嗚呼亦奇哉、到其普陀也、各僧大喜、隨時厚遇、隨處欲迎、蓋如有待者然也、豈亦不奇乎、先是余在吳城也、與慧光和尚相知、余到普陀也、與慧光同其行、暮發上海、曉過寧波、夜泊鎮江、從足海、遂入普陀矣、投其法雨寺也、亦同其室、愛樂起臥、亦同之、而吾入清日淺、言語不通、如啞如聵、如痴如魯、吾從慧光而來歟、慧光從吾而來歟、豈亦不奇緣乎、而飛錫於天下之奇勝、印足跡於海南之瀛